

# 奈良國立 文化財研究所 年報

1997-I

ANNUAL BULLETIN  
of Nara National Cultural Properties  
Research Institute 1997-I

#### マグエ者イラワジ河右岸のセイシーチョウンの調査

ミヤンマーの寺院セイシーチョウン(19世紀)には、僧院の住と貢が残っている。総は332本あり、ビルマ最大の規模をもつた。ミヤンマーは、高温多雨の気候のため、木造建造物が傷みやすい。この僧院も洪水による損傷が大きかったという。古い仏塔の調査においても、周囲に存在したであろう木造建造物に注意をはらう必要がある。本文のページ参照(撮影/森本一司)

#### 中国遼寧省・ラマトン墓地出土遺物の保存研究

ラマトン追跡は、大凌河西岸の丘陵斜面に形成された3世紀末~4世紀代の鮮卑族の墓地。近年の調査で、金銀器が多く発見された。武器・武具・馬具などは、韓国・日本の出土品と密接に関係しており、今後の研究が期待される。写真は鮮卑族特有の他の飾り物で、韓国・日本には類似製品が及んでいない。本文のページ参照(撮影/宿 舛雄)

スラ・スラン西岸でのレーダー探査  
パンテアイ・クディ東側のスラ・スラン西岸で、  
レーダー探査をおこなった。  
中央の人物がレーダー本体を牽引し、左側の人物  
が手にもつ装置で制御とデータ収集をおこなう。  
東西にレーダーを走査し、  
西岸に沿う石組みの溝を  
確認した。本文47ページ参照（撮影／杉山洋）

## パンテアイ・クディでの発掘調査

上智大学と共に、カンボジアのパンテアイ・クディ  
寺院を発掘調査している。パンテアイ・クディは、ア  
ンコール・ワットの北西 4 km にある12世紀末の寺院。  
写真奥に映る前往殿南側のラナイト積み建物の基礎  
を調整中。本文47ページ参照（撮影／杉山洋）

### 墨田15号墳出土の双龍唐頭大刀

幕田加賀地方の櫛頭大刀をまねて造った日本（倭）製の金銅大刀。複製櫛頭大刀としては上質の部類に属し、6世紀末の製品。よくに銀板に打ち出し文様を施した柳口金具の例は全国的に珍しい。保存処理に際しては、大刀の製作工程をわかりやすくするために、あえて柄木を復原せず、出土状態を保存するために最善の努力を費やした。左：出土状況。中：処理後（張表）。右：処理後（側表）。本文8ページ  
参考（前編／牛島茂）

### 山田寺東回廊再現

山田寺第4～6次調査で出土した回廊の建築部材は、14年の歳月をかけて、ようやくPEGによる保存処理が完了した。飛鳥資料館2展示室では、柱間3間分の部材を、当時の構造と規模がわかるように再現展示了した。山田寺東回廊は木造寺社建築の現存する最古の実例となる。

本文別ページ参照（撮影／井上道夫）

### 高御座の1/10模型

平城宮第1次大極殿1/10模型の内部に設置する高御座1/10模型。平成元即位式に使われた現存高御座を基本資料としつつ、文献史料からの検討をくわえ。さらに古代遺物や正倉院宝物などを参考にして、奈良時代の高御座を復原設計した。

本文別ページ参照（撮影／猪 肇）



建設中の朱雀門初重屋根

平城宮朱雀門の初重屋根。野喬木を組み立てているところ。野喬木の奥にみえる樹皮のついたまろの丸太は、軒の重ね下がりを防ぐための枯木（構造補強材）である。本文別ページ参照（撮影／春日井道志）



建設中の東院庭園平橋

平城宮東院庭園の圍池にはりだす中央建物から東の対岸に平橋がかかる。写真是空襲直で、欄柱の擬宝珠（拟諸宝の焼き物）もまだとりつけていない段階。本文別ページ参照（撮影／西山和也）

## 『奈良国立文化財研究所年報』の 再出発にあたって

装いを新たにした3分冊構成の『奈良国立文化財研究所年報』をお届けします。

奈良国立文化財研究所は、文化財を調査研究し、その成果を公表する機関として、1952年に設立され、その調査研究の成果は、設立直後の1954年以降、『奈良国立文化財研究所学報』や『奈良国立文化財研究所史料』、春と秋の公開講演会、発掘調査の現地説明会と発掘調査概報、その他各種の出版や催しものの開催などによって、公表、普及に努めてきました。

『奈良国立文化財研究所年報』は、やや遅れましたが、1959年に発刊しました。一般にみられる年報は業務報告と要綱などを主としたものでしたが、研究機関の年報では調査研究成果の速報が中心となるべきだ、と先輩諸氏は考え、それをめざすものとして発刊したのです。今では入手できない最初の20年分に近い年報が復刻されたことがありましたが、それはかつて刊行した年報が今なお研究資料として活用されているからでしょう。

最初の年報の発刊後40年近くが経過しました。その間に平城宮跡や藤原宮跡、飛鳥地域の発掘調査も大規模になり、年報でもその成果の概報部分が増加しました。そのために、発掘調査とならんで多面的に展開している調査研究に関する速報部分が十分でない傾向は否めませんでした。一方、発掘調査の概報は毎年別に刊行しており、年報掲載分とかなり重複するところもあって、整理が必要となっていました。

新装の『奈良国立文化財研究所年報』では、第1分冊は発掘調査以外の文化財に関する多様な調査研究の成果の速報を中心に研究所の要綱をあわせて構成し、発掘調査成果の概報は第2・3分冊にまとめることとしました。

『奈良国立文化財研究所年報』は再出発します。これでその年度に実施した調査研究のすべてが網羅できるものではありませんが、その主要な成果については速報でさるとみています。ご一読ください。そして、われわれの奈良国立文化財研究所の活動について、忌憚のないご意見をお寄せいただくことを願っております。

奈良国立文化財研究所  
所長 田中 琢

1997年9月30日

## 目 次

『奈良国立文化財研究所年報』の再出発にあたって

### I 調査研究報告

3

### II 事業の概要

41

1 調査と研究

2 研修・指導と教育

3 造跡整備・復原事業と展示

### 奈良国立文化財研究所要綱

67

## 凡 例

- 1 年報は、1996年度に奈良国立文化財研究所がおこなった調査・研究・事業の報告である。
- 2 年報は全体で3分冊より構成されており、年報IIには飛鳥藤原宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告を、年報IIIには平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告を掲載している。そして年報Iには、両調査部の発掘調査報告をのぞく各種の調査・研究・事業を収録した。
- 3 執筆者は各項に明記したが、執筆者のないものについては、担当部局の協力を得て、編集者がまとめた。
- 4 年報I・II・IIIでは、いずれも当研究所の刊行物について、以下の略号を用いた。  
『奈良国立文化財研究所年報1995』→『年報1995』  
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告III』→『藤原報告III』  
『平城宮発掘調査報告X』→『平城報告X』  
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報25』→『藤原概報25』  
『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』→『昭60平城概報』  
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報10』→『藤原木簡概報10』  
『平城宮発掘調査出土木簡概報30』→『平城木簡概報30』
- 5 年報の表紙は柴永文夫氏による。編集・レイアウトについては、財団法人千里文化財団出版部・柴永事務所が協力した。
- 6 年報Iの編集は浅川温男・寺崎保広、年報IIの編集は千田剛道、年報IIIの編集は加藤真二が担当した。

奈良国立文化財研究所年報 1997-I

発行日 —— 1997年9月30日

編集発行 —— 奈良国立文化財研究所

〒630 奈良市二条町2-9-1 TEL.0742-34-3931

印刷 —— 関西プロセス

ANNUAL BULLETIN  
of Nara National Cultural Properties Research Institute  
1997-I

C O N T E N T S

**I Research Reports**

- Dendrochronology of the large-sized building with pillars embedded directly in the ground at *Ikegami-Sone* Site
- Burnt pit dwellings excavated from *Goshoro* Site in Jomon middle period
- Ring-pommel sword decorated with twin dragons excavated from *Kibita* mounded tomb
- A tile with whirl motif from *Kawara-dera* Temple site
- Rethinking the pottery excavated from SE800 at *Ishigami* Site
- Study on eave tiles of *Asuka-dera* Temple Site made by the same mould
- Research on eave tiles made by the same mould in the medieval period
- Green glazed tile from *Yamanouchi* historical materials and its constituent
- Supplement to the wooden tablet inscribed "OONIE - 大欽 -" in ink from *Fujiwara* Palace Site
- Pieces of paper bearing ink characters permeated with lacquer from the peripheral area of east market in *Nara* Capital Site
- Study on three-stepped bracket complex of the Japanese ancient architectures
- Historical investigation and restoration of the Imperial throne
- Interpretation of the structural remains and restoration of west building in East Precinct of *Nara* Palace Site
- Excavated Garden Sites - examples of Tumulus period and Asuka period-
- Survey of the *Tekisui* Garden ( Kyoto ) and *Yousui* Garden ( Wakayama )
- Survey of the Customed Houses in *Shiga* Prefecture
- Subject for the study of "Cultural Landscape"
- Application of Soil Micromorphology in Archaeology
- What to find by geophysical prospecting
- Trial development about the system of computer aided excavation surveying and site database
- Convert the dry photographic plate of architectures into digital data
- Culture at the late stage of Paleolithic period in middle and south China
- Reproduction of color and ancient wall paintings
  - Joint research on the wall paintings of Chinese mounded tomb with China -
- Collaboration in the Restoration of *Angkor* Cultural Heritage

**II Brief Introduction of Activities**

**2-1 Researches and Investigations**

- Excavations of the *Asuka-Fujiwara* Capital Sites
- Excavations of the *Nara* Capital Sites
- Researches and Investigations of the historical architectures
- Investigations on the historical documents
- Research activities of Center for Archaeological Operations
- International study co-operation
- Brief Report on Research Tours Abroad
- Public Lectures in 1996
- Symposiums
- Studies subsidized by the ministry of Education
- Academic activities of learned societies and seminars, etc.
- Miscellaneous Research News

**2-2 Training course, Instruction and Education**

- Training course and instruction by Center for Archaeological Operations
- Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

**2-3 Restoration and Reconstruction of the sites and Exhibition**

- Restoration of the *Nara* and *Fujiwara* Palace Sites
- Special Exhibition at the Asuka Historical Museum and Reconstruction of the cloister excavated from *Yamada-dera* temple site

The Outline of Nara National Cultural Properties Research Institute

# I 調査研究報告

池上曾根遺跡の大型掘立柱建物の年輪年代	4
御所野遺跡で出土した縄文時代中期の焼失竖穴住居群	6
森田15号墳出土双龍環頭大刀	8
川原寺出土の溝文塙	9
石神遺跡SE800出土土器の再検討	10
飛鳥寺同范瓦二題	12
中世の同范軒瓦の調査	14
山内資料の縁軸塙とその成分	16
藤原宮出土「大賛」木筒補遺	18
平城京東市周辺ほか出土の漆紙文書	19
古代建築における三手先組物について	20
高御座の考証と復原	22
平城宮東院西建物の造構解釈と復原設計	24
発掘された庭園遺跡 古墳時代～飛鳥時代の出土例	26
養翠園・滴翠園の調査	28
滋賀県の近世民家	30
「文化的景観」研究の課題	32
土壤微細形態学の利用	33
遺跡探査で何がわかるか	34
発掘調査支援機械システムの試作研究	35
文化財建造物写真ガラス乾板のデジタル・データ化	36
華中・華北の後期旧石器文化	37
古代壁画の色と再現 中國古墳壁画の調査・保存に関する中日共同研究	38
アンコール遺跡群の調査	40

# I 調査研究報告

## 池上曾根遺跡の 大型掘立柱建物の 年輪年代

大阪府和泉市と泉大津市にかけて所在する池上曾根遺跡は、わが国でも有数の弥生時代の環濠集落である。1976年には遺跡の中心部約11万m<sup>2</sup>が「国史跡」に指定された。1990年からは、「史跡池上曾根遺跡整備委員会」が設置され、史跡整備にむけての発掘調査がはじまった。一連の調査のなかでもとくに注目されたのは、1995年に遺跡中心部において検出された弥生時代中期後半の大型掘立柱建物と、この建物中央部南側にある大型倒立井戸の発見であった。

**大型掘立柱建物の柱根** 大型掘立柱建物は、桁行10間(約19.2m)、梁間1間(約6.9m)、床面積約132m<sup>2</sup>の東西棟で、これに独立した棟持柱が東西両妻間に1本ずつ、また屋内棟持柱が2本たつ構成のもので、弥生時代中期後半のものとしては最大級の規模を誇る。総数26基の柱穴には、直径60~70cmの柱根が総数17本遺存していた。材

種はヒノキ材が15本、ケヤキ材が2本であった。これらのなかから、遺存状態の良好なヒノキの柱根を5本選定し、年代測定をおこなった。5本のうち1本は北柱列から(柱番号4)、他の4本は南柱列からのものである(柱番号12、16、17、20)。これらのなかで柱12と柱20には辯材部が残存していた。とくに柱12の柱根には、辯材部が完存しており、Aタイプのものと判断した。残る3本はCタイプのものであった。

**柱12の伐採年は紀元前52年と確定** 5本の年代測定の結果は、表1に示したとおりである。得られた結果のなかでもっとも重要な年輪年代は、柱12の年代値である。これは、樹皮を剥いだだけの形状のものであるから、柱12の年輪年代は伐採年代を示している。つまり、柱12は紀元前52年に伐採されたものであることが確定した。ここで、柱12についてみると、下部底面を新たに切断したような痕跡もないことなどから推して、転用や再利用材とは考えにくい柱材と思われる。また、この柱材が伐採後、すぐ使われることなく、長年にわたって放置されていたとは考えにくい。これらの点を考慮すると、大型掘立柱建物の創建年代は紀元前52年を上限にして、その後が考えられる。さらに、辯材部を有する柱20の年輪年代は紀元前56年で、柱12にきわめて近い年代値が得られており、失われたであろう若干の年輪層数を推算すると、これまで柱12と同様の伐採年代が想定できる。

**柱12の伐採年代確定の意義** 弥生時代を例にとると、遺跡、遺構の年代決定は、おもに土器の様式編年によっている。近畿では、唐古遺跡出土の土器を基準に5様式に分類、弥生時代前期を第I様式、中期を第II・III・IV様式、後期を第V様式とする時期区分を設定している。これに従うと、上記の大型掘立柱建物の柱穴の掘削埋土内出土の土器は弥生時代中期後半のもので、多くの研究者は実年代で西暦1世紀後半頃と推定していた。ところが、

表1 柱根5本の年代測定結果一覧表

柱地	柱列	材・種	年輪数	年代	形状
4	北	ヒノキ	184	93B.C.	C
12	南	ヒノキ	248	52B.C.	A
16	南	ヒノキ	358	113B.C.	C
17	南	ヒノキ	253	113B.C.	C
20	南	ヒノキ	252	56B.C.	B

大型掘立柱建物の平面図及び柱穴断面図 1:300  
(和泉市教育委員会提供)

→大型掘立柱建物を描いたと思われる土器絵面  
(出土:世田遺跡出土)

柱12の伐採年代はこれよりも約100年古く遡った年代が得られた。この建物がほぼこの頃に建てられたとすると、近畿における弥生土器幅年の1点に実年代が与えられることになる。このことは、これまで北部九州が近畿より先行していたとされる時代関係の見直しや弥生前期、後期、古墳時代のはじまりなどの見直し論にも一石を投じたことになる。さらに、柱12の伐採年代が確定したことにより、この頃の日本の文化と世界の古代文化を共通の時間軸で比較することが可能になってきた。たとえば、エジプトに目をむけてみると、クレオパトラが女王の座についたのが紀元前51年であるから、大型掘立柱建物はまさにこの頃のものなのである。

大型掘立柱建物の柱根12(写真)とその年輪バーナングラフ  
(黒:根率バーナングラフ、赤:柱根12)

**他の事例** 滋賀県守山市にある二ノ塙・横枕遺跡は弥生時代の環濠集落である。発掘の結果、ヒノキやスギを使った井桁式の井戸2基(A、B)が発見された。そして、井戸Aは紀元前97年、井戸Bは紀元前60年にそれぞれ伐採した材であることが判明した。井戸内の埋土や木棒内の裏込め上からは、第IV様式後半の土器が出土しているという。弥生時代中期後半の年代が約100年遡る可能性が高くなつた。

(光谷拓実/滋賀文化財センター)

## 御所野遺跡で出土した 縄文時代中期の焼失堅穴住居群

昨年、岩手県一戸町の御所野遺跡で、保存状況の良好な縄文時代中期の焼失堅穴住居群が8棟出土した。堅穴の上部構造を復原し、その縄文時代の焼失住居址はきわめてまれであり、筆者らが実測した住居址DE24住を中心に出土状況を報告し、あわせてその復原案を示してみたい。

**環状集落の構造** 御所野遺跡は今から4500年前に誕生し、500~600年存続した縄文時代中期後半の大規模な集落遺跡である。集落は標高200mほどの細長い台地(65000m<sup>2</sup>)上に営まれている。台地から一段低い西側段丘面にある馬場平遺跡との関係は緊密で、御所野と馬場平は一体化した居住領域として、I(円筒上層c式)~V(大木9式)期の変遷をとげた。集落はIII期(大木8b式)から大きく変化し、墓域中心の環状集落が成立する。二つの環状列石が東西にならぶ墓域は、台地中央部北側の低い平坦面に位置する。この広場=墓域を中心に、集落内の建物は環状もしくは扇状に配列する。環状列石および墓域群の外周域で、柱穴が80個検出され、少なくとも3棟の掘立柱建物が確認された。これらの掘立柱建物は、いずれも桁行2間×梁間1間である。この掘立柱建物群の外側には、堅穴住居が3地区にわかつて数百棟分布する。

**住居群のパターン** 馬場平では41棟の堅穴住居がまとまって発掘され、住居群の構成パターンがほぼあきらかに

なっている。堅穴住居は長軸12m以上の大型、一辺3~6mの中型、一辺3m以下の小型に分かれ、II~III期の段階で、大型住居1棟、中型住居3~4棟、小型住居1~4棟がセットになっていた。ただし、一つの大型住居を核とする住居群は必ずしもすべてが共存したわけではなく、中・小型の建替えは大型よりも頻繁だったろう。これについても、昨夏の御所野西区における発掘(1700m<sup>2</sup>)が良好なデータを提供した。発掘された20棟の堅穴住居はII期以降、少なくとも4段階の変遷をとげており、出土土器が同時期で、なおかつ焼失状況の近似するV期(約4000年前)の5棟の建物が同時存在した可能性はきわめて高い。5棟のうちDF22住がやや小振りの大型、DE18住とDE24住が中型、DH28住とDG26-01住が小型に相当する。都出比呂志の用語を借用するならば、1棟の堅穴は「消費単位」、住居群全体は「世帯共同体」と対応する可能性があるだろう。

**焼失住居の出土状況** V期に共存した5棟の住居址のうち、ここでは中型のDE24住と大型のDF22住を取りあげる。なお、炭化材はいずれもクリである。

DF22住：南北8.2×東西6.8mの南北に長い楕円形平面で、南壁がやや直線的になる。堅穴の深さは60~70cm。南壁に近い位置に石圓柱があり、石圓柱と南壁のあいだの床面を一段低く掘りこんで、両側に石を埋めこむ。堅穴の埋土のうち、黄褐色土を含む褐色土が壁際から大量に流れ込んでおり、周囲と屋根土がそのまま崩壊したもの

御所野遺跡口F22住土層断面図 1:125

のと考えられる。ところが、石圓炉の周辺では、屋根の葺き土と推定される土層が僅1.5mほど円形に途切れている。天窓の痕跡とみてよかろう。主柱穴は7ヶ所で確認されており、入口は石圓炉にちかい南壁側と推定され、墓域=広場を指向している。炭化材は竪穴のはば全城から出土しているが<sup>6</sup>、なかでも壁の深い南壁から西壁の壁際にかけて、厚さ3~5cmの板状の割材が直立したまま連続し、板に打ちこんだ枕も内側にやや崩れた状態で残っていた。これらの壁板と側壁の境に、棒状の横材をとどめる部分があり、これは板板・枕をとめる繋ぎ材か、周堤につきさした垂木を承ける軒桁のどちらかであろう。一方、竪穴中央の床上には、炭化した小枝の破片が面状にひろがる。このもやもやとした炭化物層は、屋根の葺き土層と垂木状の棒材の間にくいこんでおり、土屋根の下地と推定される。このはか梁・桁と推定される太めの材が柱穴を結ぶ位置にみとめられる。

DE24住：斜面下にある東壁は削平され残存しない。平面は円形に近く、南北が4.4m、東西は残存部で3.8mの小さめの中型住居である。南壁よりに石圓炉があり、やはり火から南壁にかけて幅60~70cmの掘込みをともなう。広場の方位と一致する南壁側に入口を設けたのであろう。竪穴は浅く、最も深い西側でも30cmあまり。屋根の葺き土と推定される埋土の第3層（最下層）は、黒褐色土に白色粘土・褐色土が混入した硬い土で、その下から多量の炭化材が出土した。葺き土の厚さは場所によって異なるが、中央部で10~15cmほどである。炭化材は南~西の壁際に多く残る。中央部で炭化材が少ないのは、天窓の存在により、火が中央に集中した可能性があり、葺き土の上面で確認された焼土層も中央部分が勢いよく焼けて崩落した結果とみなせよう。炭化材のなかで注目されるのは、直立して残存していた4本の柱材（径15cm）である。このはか2ヶ所で主柱穴が確認されており、柱配置は6角形をなす。竪穴の中心にむかって倒れた垂木もしくはサス状の材、あるいは梁・桁状の材も確認できる。

### 土縛頭形の竪穴住居 建築構造について整理しておく。

①周堤と板板：周堤そのものはみつかっていないが、竪穴埋土にその崩壊土らしい土層が確認されている。かりに周堤が存在しないならば、竪穴壁際の外周域で垂木の挿込み痕跡が検出されるはずであり、それが確認されないということは、周堤が存在した傍証となる。DF22住においては、壁際に板状の割材が直立した状態で確認され、DE24住でも同様の状況が確認されている。さらに壁際にには、枕状の材や竪穴の壁際にならぶ横材も確認されている。枕状の材や竪穴の壁際にならぶ横材も確認されている。枕状の材や竪穴の壁際にならぶ横材も確認されている。枕状の材や竪穴の壁際にならぶ横材も確認されている。

②軸組と小屋組：大型・中型住居においては、柱は梢円形平面に対応し多角形配列をとる。竪穴の頂部を横架材で繋ぎ、垂木もしくはサス状の材を求心的に配列している。柱上を通る材は垂木よりも太く、構木的な機能を果たしたものと思われる。構木の有無は不明。

③葺き土と屋根下地：クリの枝を厚く敷いて土屋根の下地としている。この場合、垂木のビッチは草葺きと変わらず密にはならない。

④天窓：DF22住の石圓炉上面において、天窓の痕跡が土層中に確認されたのは画期的なことである。DE24住の焼けたまゝ、天窓の存在を暗示する。そもそも土葺き住居の場合、屋内の密封性が著しく、煙出し用の天窓を設けないと、そのなかで生活することは不可能であろう。

⑤石圓炉と入口：石圓炉は広場のほうに偏向し、壁と炉の間を一段低く掘りこむ。この掘込み部分は床面の温気抜きを兼ねた調理場・作業場だったのではないだろうか。この炉端の掘込み部分に接して入口を設ける。

以上の考察をもとに、DE24住の復原案を考えてみた。柱や周堤の高さは不明だが、梁を人間の頭にふれない程度の高さでおさめ、土葺きに適当な屋根勾配を想定することによって、およそそのスケールを把握することが可能だろう。入口と天窓の詳細は不明だが、棒太ニブヒの土葺き竪穴住居の竪子天窓や扉を参考に図示してみた。

（浅川滋男・西山和宏／平成宮跡発掘調査部）

## 黍田15号墳出土双龍環頭大刀

兵庫県揖保郡揖保川町の黍田古墳群は、山陽本線竜野駅の南西約1.3kmの丘陵上に立地する。揖保川町教育委員会が平成7年3月に実施した15号墳の発掘調査で全長約6mの片袖式横穴式石室から、双龍環頭大刀・金環・ガラス玉・鉄鏡・刀子・須恵器・土師器、漢道部から須恵器が出土した。同年9月に、保存法の検討のため奈文研にこの双龍環頭大刀が持ち込まれ、材質分析・X線観察・実測・写真撮影をおこなった(口絵参照)。

環頭大刀は、玄門付近で、切先を奥壁に向け佩裏を上にした状態で出土した。柄頭部分は折れ、鞘の先端は欠損していた。柄頭は長さ13.5cm、環の長径10.7cm、銅の鋳造製品で、環と環内の龍は別々に鋳造されている。龍の下部に柄を作りだし、環体下部の凹部にはめて鍛付けたらしい。龍は2匹が向き合い1つの玉を噛む。頭・背の冠毛・角を3本の突起で表現し、目の部分には小孔をあける。頸ひげは口の下の突起で表現する。環の文様は、本米龍の全身を表現したものだが、本例ではまったく崩れており、わずかに足を表現した痕跡がみられるにすぎない。環・龍とともに全体を刻目で装飾する。環と龍を結合後鍍金(Au5Hgに同定)するが、茎(Cu:99.6%, Ag:0.1%, Fe:0.1%)には鍍金していない。茎があたる部分を彫りこぼめた合わせの柄木で茎をはさみ、目釘で留める。鉄刀の茎とは直接結合しない。柄木の上部は舌状に環の下部に被さる。柄木上端に銀板(Ag:97%, Au:0.5%, Pb:0.3%, Cu:2%, Fe:0.5%)を被せ、さらに背・刃側をU字状に切り込んだ金銅製貴金属をはめて、柄木が直接みえないようにする。貴金属は4本の沈線で文様帶を区画し、1つおきに刻み目を施す。出土時の記録によれば、やや下に同様の装飾をもつ貴金属がある。おそらく両貴金属の間に、筒金具を装着し、貴金属を留めていたのであろうと考えられた。柄間には紐を模した刻み目のある薄い銀線(銀板や銀線はほぼ同じ組成を示す。銀黒色に見えるのはAgClが形成しているためである)が巻かれる。柄元には長径4.1cmの銀製八角形噴出頭が装着される。鍔が一体に作られ、その端部を鉄刀の関で止めて固定する。柄木は鍔まで挿入されているらしい。鞘は1対の鞘木を合わせて作り、全体を装飾用の

金具がおおう。鞘口には銀製筒金具をはめ、両端を金銅製貴金属で留める。筒金具は背側のみを断面台形状に面取りする。表面には打出して植物文を施す。刃側の貴金属からさらには19.3cmのところにもう1つ貴金属がある。この間に佩裏から金銅板を巻き、佩表にはその上にさらに円形浮文と列点文を施した金銅製伏板を錠留する。金具の佩裏側はほとんど破損し、装飾の有無は不明。ここから鞘尻までは欠損する。鞘の貴金属は柄のものと同様で、沈線と刻目を施す。ただし、本例の鞘尻側の2つの貴金属は、本米円形の吊手金具を鍛付けた足金物であった可能性が高い。また、鞘の金銅製金具は、鍍金の色が柄よりかなり白っぽく、銀を混合し色調を変えたらしい。鉄刀本体は平棟平造りで浅い両闇を持ち、茎尻は栗尻で付近に目釘孔が1ヶ所あく。茎長13.7cm、身幅3.3cm。

本例と共通する刀装具が良く遺存している京都府湯舟坂2号墳出土品と本例を比較すると、環の長径はほぼ同じで、円形浮文金具は本例の方が長い。湯舟坂2号墳例は全長約120cm程度と推定されている。本例も大差ない寸法が考えられ、環頭大刀の中では大型の部類にはいる。新納泉の装飾付大刀編年を参考にすると、環頭や他の刀装具の特徴は上記した湯舟坂2号墳や千葉県金鈴塚古墳石室D区出土例との共通点が多く、新納の双龍環頭III式に比定できる。ただし、双龍環頭III式では龍の冠毛・角を4本の突起で表現するのが一般的で、本例の3本の突起による表現は後出的な要素であるので、その中でもIV式に近い時期になる可能性がある。双龍環頭III式の年代は須恵器辺縫年のTK209式併行期に含まれる。実年代については、研究者により相違があるが、おおまかには6世紀末を前後する時期となる。群集墳のうち、比較的大きな墓に儀仗大刀を副葬する傾向があり、中小豪族が後の朝廷に属する一つの証拠である。

今回、顕微鏡観察・X線透過・材質調査等を加え、環頭大刀を細部まで観察できたのは重要な成果であった。従来、この種の装飾付大刀は内部観察が困難なため、細部の造りが不明なものが多い。そのため、装飾付大刀の系統差や、刀身と刀装の変化の対応について、なお検討すべき点が残されている。本例のような観察例が増加することが期待される。(肥塚隆保／埋蔵文化財センター、臼杵 熊・町田 章／平城宮跡発掘調査部)

## 川原寺出土の渦文壇

1957年におこなわれた川原寺の第1次調査において、東回廊南端東側の包含層から出土した緑釉水波文壇は、わが国における施釉技術の開始をつける資料のひとつとして知られている。この時の調査で出土した、もう1片の文様壇について報告する。

**渦文壇の観察** 塔に対面する東回廊の南から5間目の基礎付近から出土したものである。10.5cm×6.5cm程度の破片で、各辺の全長を知ることはできないが、2辺は直角に交わり方塊とみてよい。厚さは縁辺で1.1cm、中央に向かって次第に厚味を増す。側縁はほぼ垂直になり、断面が梯形をなすものではない。胎土は乳白色を呈し、精良。やや軟質の焼き上がりである。本来緑釉が施されていたものと考えられるが、剥落が著しく確認ができない。表面の渦文は、幅2mm、深さ1mm前後、断面U字状の沈線で4条の同心円弧を描く。裏面は団の左右方向に軽いケズリを加え、側縁に沿って狭い面取りをおこなう。釘穴等の穿孔、刻書・墨書きは認められない。

**川原寺の緑釉壇** 川原寺で使用されていた緑釉壇には、大きく二者がある。ひとつは冒頭に述べたもので、厚さ1.5cm、表面に半円形りで水波文を表す。類例は1973年の東大門の調査においても出土している。素地は砂粒を含む粗微なもので、表面から側面にかけて施釉をおこない、裏面には製作時の布圧痕を残す。

他方は、1974年の川原寺裏山遺跡の調査で、火中した塑像・塔仏等とともに、大小30点近くがまとめて出土したもので、大きさのわかるものは縦15.5cm、横25.0cm、厚さ1.2cmをはかる。素地はきわめて精良で白色を呈し、繊細な沈線で静かな水波文を表現したものと、太いヘラ描沈線で渦文と波の泡立つ様子を表現したものがある。裏面に布圧痕ではなく、素面で軽いケズリを側縁の方向に平行に加えている。施釉は、前者と同様表面および側面におこない、裏面に及ぶものもある。素地の表面にえぐり込みを設け、施釉・焼成後、その窪みの中に漆喰を塗り込めた箇所がいくつかみられる。また、縁辺に釘穴をもつものがある。

これらの裏面には『八』(川原寺)『第十一□三』『八大』『中』(川原寺裏山)といった刻書・墨書きがみえ、堂内の壁面もしくは須弥壇を莊嚴した際の番付と考えられている。同一個体に、刻書と墨書きでそれぞれ異なる内容を記したものもあるため、こうした記載には製作時・使用時など複数の文脈のあったことがうかがわれる(奈良国立博物館『飛鳥の塔仏と塑像』1976年、8頁 図版17)。

**まとめ** これまで寺域内からは、半肉彫りの水波文壇の出土しか知られていなかった。今回報告した渦文壇は、胎土・形状・製作技術などの特徴から、川原寺裏山遺跡出土の緑釉渦文壇と同一のものである。裏山遺跡に埋納された遺物が、本来いざれの堂塔に属するものであったのかを推定する手がかりとなろう。

(次山 淳/飛鳥資料館)

## 石神遺跡SE800 出土土器の再検討

石神遺跡では、齊明朝と目されるその最も整備された段階（A-3期）には正殿にあたる庭付の東西棟建物を長大な建物で囲んだ南北に長い長方形区画が2つ並んでいる。表題の井戸SE800は東の区画の南辺中央にあってA期の初めから存在し、B期には廃絶しており、A期の建物等と命運をともにする造構であり、その出土土器は遺跡の始まりと変遷、性格の究明にとって重要である。

井戸SE800出土の土器については、「藤原概報15」上で飛鳥IIIに位置づけられるものがあることを報告しているが、提示した土器にはより古い段階の土器が含まれ、すべてが飛鳥IIIの標識になるわけがないことは自明のことであった。しかし、主に年代の指標となっている杯類が少ないとても関わらず、一部で飛鳥IIIの基準資料にあげたこともあって、無用な混乱を生じる恐れがあった。また、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、近年新たに追加された川原寺下層、豊浦寺下層、山田寺下層、飛鳥池遺跡、甘樺丘東麓など、おもに飛鳥I～IIの土器群について当該年度の「藤原概報」誌上に概要を報告するとともに、「飛鳥地域土器編年基準資料」の公刊にむけて飛鳥I～IIIまでの土器が含まれる井戸の「一括遺物」の検討は必要な作業でもある。

**遺構と層序** 井戸は杉の巨木を半裁して厚さ18cmにくり抜き杏仁形に合わせた井戸枠をもち、周囲には玉石を方形に敷き詰め、その外側には、北を除く三方に側石を立てて、東西5.3m、南北6.7m、深さ約1mの方形石組池状をなす。井戸枠は東西内法1.2～1.37m、南北内法0.67～0.8mで底から15～35cmの高さに40cm程の円窓をあけて取水口とする。井戸の底は石敷面からの深さ3.8mにあり、深さと狭さから井戸渡えは不可能であったとみられる。井戸の層序は4層に大別される。石敷から1.6mまでの灰褐色粘質土（1層）は埋立の最終段階あるいはその後に掘られた石敷を破壊する土坑に限り、2.4mまでのバラス層（2層）は人頭大の石が詰まった短期間の埋立土で、その下3mまでの砂層（3層）も人頭大の石が多量に混じる埋立土である。これに対して3.7mまでの4

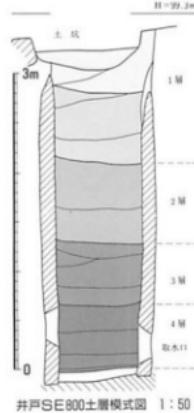
層には有機物が多量に含まれ、上・下端が枠に開けられた取水口の高さに一致していることからも使用時の堆積土とみられる。土器は2層の下半、3層、4層上半に多く、約200個体の土師器・須恵器があるが、土師器甕・須恵器平瓶・壺類の出土量の多さが目立ち、杯類は全体の数%程度と少量で、しかも土師器杯C・杯G・杯Hであり須恵器杯類は全体で数点しかない。

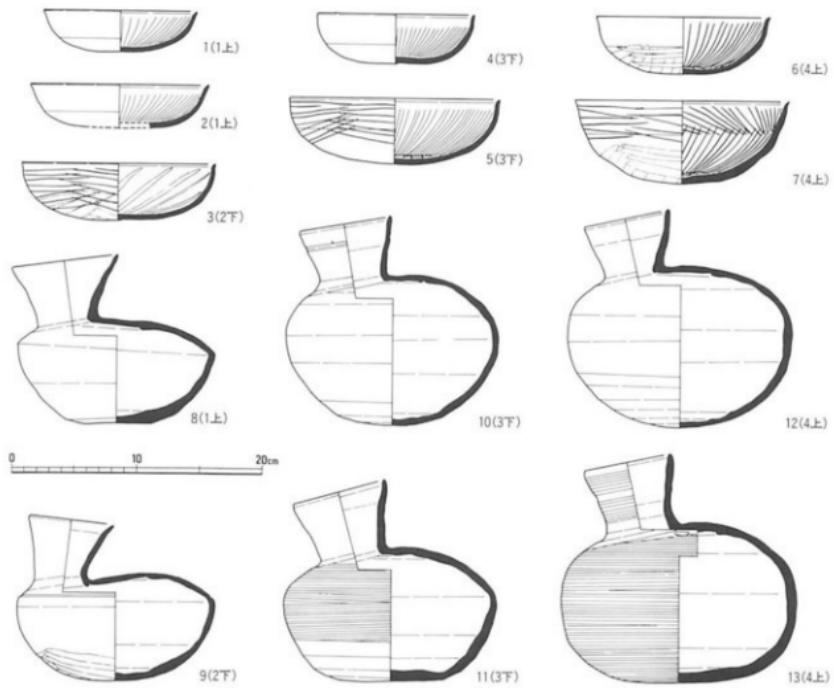
**土器の年代観と系統** 図は土師器杯Cと須恵器平瓶を層位別に示したもので、上層ほど土師器杯Cの口径に対する器高の割合（径高指数）が小さくなり、平瓶では体部の丸みが取れて肩が張る傾向にあり、上層ほど新しい傾向にあることは明白である。また平瓶には体部にカキ目を施すものとナデ調整のものがいるが、器形変化の方向は产地を異にするとみられる両者に共通しており、この井戸の層序は安定したものとみなすことができる。

そこで各層の土師器杯Cを従来の編年基準に照らすと1層の土師器杯C IIは径高指数25～27前後で飛鳥IVに位置づけられ、2層は口径15.5cm、高さ4.6cm、径高指数30前後で飛鳥III、3層は径高指数31～32で杯C I (5)の底部をヘラケズリしない点でも坂田寺S G100を基準とする飛鳥IIに近い内容である。そして4層は、杯C II (6)が口径13.8cm、高さ4.6cm、径高指数33で、底部を3分割で削るが、飛鳥IIの坂田寺S G100には底部を削る杯C IIはみられないこと、杯C I (7)が丸底で器高が高く、底部外面を5分割で削り、内面には太い暗文を2段に施すが、二段暗文の杯C Iは

飛鳥Iの新しい段階である山田寺下層資料にも残ることから飛鳥Iに属すると考えられる。すなわち、井戸SE800は飛鳥Iに始まり、飛鳥IIIで廃絶し、飛鳥IVに壊されているのである。

ところで、廃絶時を示す2層の3は法量の上では飛鳥IIIに属すが通常の杯Cとは胎土色調を異にするうえに、底部を5分割ケズリ、暗文はナデ





SE 800出土土器 1:4 (括弧内は出土層位)

調整に近い方法で施した異質の杯Cであり、飛鳥地域の飛鳥IIIの基準資料とするには問題がある。

また、4層の6・7は内面の暗文が太い点が特徴で、類例は飛鳥地域では、豊浦宮推定地・山田寺下層から出土しているが、大阪府藤井寺市周辺の遺跡からは同じ太い暗文を施した高杯など別器種と共に多数出土している。SE 800からは杯類の少なさもあって4層に細い暗文の杯Cはないが、3層に口径16.6cm、高さ6.3cm、径高指数38で外面を5分割ケズリの後へラミガキし、内面に細い一段放射暗文を密に施した飛鳥Iの杯C Iがあり、两者は太い暗文の杯C IIが丸底なるが故に器高が高く径高指数が幾分大きくなるものの概ね一致する。このことは太い暗文をもつ6・7は飛鳥地域で通有の杯C IIではなく製作者(地)を異にする別系統の杯C IIであるとみられると共に、この時期の土師器にはそうした系統の違いを越えた規格性があることを示しており、土器の年代観はその中

にみることができる。

飛鳥Iの杯C IIに飛鳥地域に通有の一群とは異なる群別があることについては、すでに甘利丘東麓の焼け土層出土土器の特徴として報告されているが、それらは内面の暗文が太いものの口縁部の形状などで6・7とも違った一群であり、その単位はかなり小さなものと推定できる。今回除外した杯Gについても口縁部の形と胎土の違いによる細分が可能であって、この時期の杯類は個性的で多样である。そもそも製作技法の異なる杯C II、杯G、杯H自体が互いにほぼ似通った法量と器形をもった杯類であり、遺跡や造構の違いによって互いの構成比が異なることも報告されており、土師器の煮沸具にみられる手法の相違による「型」と杯類の系統・群別を関連づけて把握することによって遺跡の性格を推定する手がかりとなりそうである。須恵器貯蔵具等の産地の検討とともに、後稿を期したい。

(西口壽生/飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

## 飛鳥寺同范瓦二題

**飛鳥寺と新堂庵寺の同范垂木先瓦** 飛鳥寺の垂木先瓦は4種類ある。「飛鳥寺発掘調査報告」(奈文研学報第5冊1956年)では、これらを「縁の反りの大きい素縞丸縛と六縛のものと、山田寺式軒丸瓦の内区を探つたもの」および「軒丸瓦田型式の内区のみを用いて」垂木先瓦としたもの、と報告した。本文中に型式番号は記載されていないが、「第3表」(34頁)には、「種I」、「II」、「IV」の記載がある。今回、記述の便宜を計るため、I型式：素弁九弁、II型式：素弁六弁、III型式：軒丸瓦田型式の内区を利用したもの、IV型式：弁央に凸線をもつ八弁、と型式設定する。うち、素弁九弁I型式(図1中央)の同范品が大阪府富田林市新堂庵寺でみつかった。

新堂庵寺は、石川左岸の丘陵裾に位置する飛鳥時代創建の寺院跡である。1959年と翌年の発掘調査により、塔と金堂が南北に並び、金堂の北と西にも基壇建物を配する御藍が確認された。藤澤一夫氏は一塔三金堂の御藍とみる。また、藤澤氏が推定した寺号・烏舎寺は、百濟の都扶余扶蘇山上にあった寺院名を踏襲したもの(浅野清・坪井清足・藤澤一夫「河内新堂・烏舎寺跡の調査」大阪府文化財調査報告書第12輯 大阪府教委 1961年)。

この調査では3種の垂木先瓦が出土したが<sup>5</sup>、問題の垂木先瓦はこの中にはなく、1995年に実施された推定寺域北側の調査で出土した。概要報告書に「I C01素弁蓮華

文」とされた垂木先瓦がそれ(図1左)。これと同范で、釘孔が貫通せず裏面に丸瓦?接合痕跡を残す「IA01素弁(9弁)蓮華文軒丸瓦」(図1右)もある(井西貴子「新堂庵寺発掘調査概要」大阪府教委 1996年)。

飛鳥寺垂木先瓦I型式は、直径14.6cm、中房での厚さ1.6cmあり、側面と裏面をヘラケズリ調整する。新堂庵寺例は、直径14.5cm、厚さ1.8cm、調整も同じ。いくつかの弁の歪みに加え、瓦当面全体に残る作范時のノミ跡が全く一致するので両者は同范。製作技法および胎土焼成にも違いは認め難く、同一生産地から二寺への供給とみてよい。石川中流域での飛鳥寺同范瓦は初出で、この地域での寺院建立に、蘇我氏と飛鳥寺が関与していたことを推測させる資料となろう。(同范認定にあたり、大阪府教委の井西貴子氏・広瀬雅信氏の協力を得た。)

**飛鳥寺禪院の軒瓦** 白雉4年(653)入唐、玄奘三藏に禪定を学んだ僧道昭。帰国後、彼は飛鳥寺の東南の隅に禪院を建てて住み、また天下を周遊して各種の土木工事をなした。文武4年(700)、船72隻にして繩床に端座しつつ入寂したのもその禪院。(『続日本紀』文武4年3月10日条)。禪院は平城京遷都に伴い、飛鳥寺とは別に和銅4年(711)右京四条一坊に移り(蘭師寺「仏足石記」)、後に禪院寺とも称される。道昭が将来した多数の禪院寺所蔵経論は、「書迹墨好、錯誤あらず」と有名だった。

道昭創建の禪院は永く所在不明だったが、1979年に飛鳥寺南門東南方の南面築地外で7世紀後半に作造された掘立柱の塲や建物がみつかり、禪院の一部ではないかと推測された(『藤原概報9・10』)。その後、1992年に中心

図1 同范垂木先瓦(中央:飛鳥寺、左右:新堂庵寺 1:3)

図2 飛鳥寺禪院の創建軒瓦 1:6

図3 平城京右京三条一坊  
十四坪出土軒瓦 1:6

伽藍の東方で7世紀後半に建てられた礎石建ち基壇建物がみつかった。建物方位は、中心伽藍ではなく東限塀と揃う。西側に築地塀があり、一院をなしている。出土した瓦も中心伽藍ではめったに出土しないもので、單弁のXVII型式と複弁のXVII-XVIII-XIX-XXI型式に三重弧紋軒平瓦が組む(図2)。丸瓦は竹状模作丸瓦、平瓦はタテ襯叩き桶巻作り。この礎石建物も寺地の東南隅にある《飛鳥寺1992-1次調査「藤原概報23」》。

いずれの調査地が禅院か。糸口は意外な方面からもたらされた。1993年に奈良市教委がおこなった平城京右京三条一坊十四坪西道の調査(平城京第291次調査)で、13世紀後半に廃絶した井戸から、飛鳥寺XVII型式軒丸瓦と三重弧紋軒平瓦。それに竹状模作丸瓦が出土した(図3)。これららの瓦は平城京で出土したことがない。しかし、三条大路を隔てた南は右京四条一坊。まさに、禅院寺の地だ(原田恵二郎『平城京出土の飛鳥寺軒丸瓦と「竹状模作筋」をもつ丸瓦』『奈良市埋蔵文化財調査センター記要1994-1995年』)。飛鳥寺1992-1次調査地が禅院の一郭となれば、その移転先の近辺から禅院創建瓦が出土するのも腑に落ちる。

軒丸瓦XVII型式はこの他、奥山庵寺(明日香村)、姫寺跡(奈良市)、高田庵寺(桜井市)と横大路(櫻原市)に同範瓦がある。横大路の同範例は下ク道との交差点から西約300mの路面上に掘られた土坑から出土した。土坑の底に葉っぱを敷き、底に孔を開いた土師器鍋を置く。その上に曲げ物の側板をのせ、軒丸瓦(飛鳥寺XVII型式)の瓦当部を紋様面を上にしてのせ、さらに石でこれらを固定する。調査者の今尾文昭氏はこれを横大路に対する地鎮め祭式の造構と認めている(今尾文昭『櫻原市新設京横大路発掘調査報告書』『奈良県遺跡調査概報 1992年度』

1993年。今尾文昭『新設京の鎮祭と横大路の地鎮め造構』『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 1994年)。

当時これらの鎮祭には陰陽僧が関連していた。『日本書紀』持統6年(692)2月11日条にみえる陰陽博士沙門法藏・道基は陰陽僧であろう。道昭自身も出自は土木技術に長けた船達。宇治橋建設は『続日本紀』編纂者の一人で同族の菅野真道の仮託としても、各地で壁井や港漕・橋梁工事などに関わったことは彼の業伝にみるとおり。その技術の一つに陰陽道があつたとすると、横大路の鎮祭に用いられた軒丸瓦が禅院創建軒瓦の一つだったことも、偶然ではないようと思われる。

大和以外で、禅院推定地と同範関係をもつのが櫛津の梶原寺(大阪府高槻市)である。ここからはXVII型式が出土し、最近、梶原瓦窯でも出土した。今、にわかには禅院と梶原寺をつなぐ赤い糸を指摘することはできないが、梶原寺が山崎道に面して建ち、東に山崎津を控えた立地であることは、注意してよいだろう。山崎津には天平3年(732)行基開基と伝える山崎院があつたが、周辺からも7世紀代の瓦も出土し、寺院としてはそれ以前からあつたようだ(山崎庵寺)。行基は道昭を師とし、二人の密接な関係はその業績にもあきらか。山崎津・山崎院と行基との関係は遡って道昭の時に始まったもので、梶原寺と禅院との瓦の同範関係もそれにちなむ、とは想像にすぎるだろうか。飛鳥寺東南隅の禅院に関わる同範関係は、少なくとも飛鳥寺がもっていたそれまでの、またそれ以後とも全く独自の広範囲にわたるものである。それは、「天下の行業の徒、和尚に從ひて禅を学びぬ」とある業伝の一文を勞拂とさせる。禅院が平城遷都にとどまらず元興寺から離れたことの原因はこのあたりにも胚胎しているのだろう。

(花谷 達／飛鳥寺原宮跡発掘調査部)

# 中世の同範軒瓦の調査

1995年から1997年にかけて中世瓦の調査を集中的におこなった。本稿では現在までに判明した同範軒瓦についての概要を記す。なお、中世瓦の年代の細分については、I期(1180~1210)、II期(1210~1260)、III期(1260~1300)、IV期(1300~1333)、V期(1333~1380)、VI期(1380~1430)、VII期(1430~1500)、VIII期(1500~1575)とする。

## ①東大寺再建瓦(岡山県出土瓦と東大寺瓦の比較) I期

中央の梵字を回んで「東大寺大仏殿」と記し、その外に8弁の蓮華文を配する軒丸瓦はA~Iの9種を確認した。岡山県と奈良県で出土したのはA・B・E~Iで、東大寺南大門のCや東大寺藏のDの2種は岡山県では現在まで未発見である。しかし、胎土や技法及びこれらと組む軒平瓦の技法からみて、この9種がすべて岡山県万富窯(広義の意味では吉井川添い)であることは、まず間違いない。1997年調査。

## ②鎌倉極楽寺と京都壬生寺 II期

鎌倉極楽寺の瓦を実見した際に、原廣志・小林康幸の両氏から側面蓮華文軒丸瓦が京都壬生寺出土例と同範の可能性が高いとの教示を受けた。その後、元興寺文化財研究所で壬生寺出土例を実見する機会を得た。两者とも同一箇所に範傷があり、同範は間違いない。胎土も酷似する。この文様の軒丸瓦は京都石清水八幡宮から出土していること等を考えると、京都産の瓦が鎌倉へ運ばれたものと理解してよいだろう。1997年調査。

## ③姫路円教寺・大和薬師寺・唐招提寺・法隆寺と

### 河内電泉寺 II期

姫路円教寺の蓮華唐草文軒平瓦については、1992年に薬師寺・法隆寺例と現物照合し、その成果を『三村山極楽寺跡遺跡群』(1993)で報告したが<sup>2</sup>。今回は河内電泉寺と薬師寺・法隆寺例との現物照合をおこなった。同範であり、製作技法も同一であるが<sup>2</sup>、胎土はあきらかに異なる。大和の瓦工の河内での出張製作を示す。電泉寺例については「南都・在地瓦工が共同で焼造」「領貼付(包み込み?)」(桃崎祐輔「鎌倉時代蓮華唐草文軒平瓦の系譜と年代」「考古学雑誌一西野元先生追憶記念論文集一」1996年)という見解があるが<sup>2</sup>、現物もみないで報告書の図版だけをもとに過度の論を立てることがいかに恐いも

のであるかを知実に示す。1997年調査。

## ④河内須弥寺・慈子窟寺と大和薬師寺 III期

交野市教育委員会の真鍋成史氏の協力によって、1997年発掘の須弥寺の巴文軒丸瓦・蓮華文軒平瓦と薬師寺の軒丸・軒平瓦を現物照合する機会を得た。两者は軒丸・軒平セットで同範になることが判明した。製作技法は同じだが、胎土は異なる。薬師寺の巴文軒丸瓦は玉筋部まで残っており、丸瓦の吊り紐から判断して、この一組がIII期まで遡る有力な根拠を得た。

## ⑤尾道淨土寺と大和大安寺(2種) IV期

尾道淨土寺と大和大安寺で同範の軒平瓦は花菱唐草文軒平瓦と菱形唐草文軒平瓦の2種がある。花菱唐草文軒平瓦は、淨土寺段階では外周が二重圓線となっていた范型が、大安寺段階では外周を切り縮め一重圓線となっている。两者は技法では差がないが<sup>2</sup>、胎土では、淨土寺例が白色粒を多量に含みあきらかに異なる。この瓦は、嘉慶2年(1327)の淨土寺本堂再建当初の瓦に間違いくなく、この時、大和の瓦工人が尾道に出張製作に来たことは間違いない。次に菱形唐草文軒平瓦も、淨土寺と大安寺で同範関係にある。范の切り縮めなどの前後関係を明確に示す資料はないが<sup>2</sup>、淨土寺例の方が文様がシャープであるから、これもやはり淨土寺用として使用され、後に大安寺用として使用されたものであろう。この瓦も、文様構成・製作技法の点からみて、IV期の瓦とみてよい。1995年に淨土寺にて現物照合。

## ⑥河内宮町造跡と大和大安寺・西大寺 V期

八尾市宮町造跡出土の2種の軒平瓦は大和大安寺・西大寺出土例と同範である。1種は花菱唐草文軒平瓦で、大安寺・宮町造跡例は同一場所で照合。两者は同範で、胎土も同じ。西大寺の瓦(西大寺所蔵)とも同範である。他の1種は中心無飾り均整唐草文軒平瓦で、大安寺で使用された後、宮町造跡・西大寺段階で范の両端を切り縮め使用されている。宮町造跡と西大寺の出土例は、胎土も同一である。1996年調査。

## ⑦河内電泉寺と大和唐招提寺・喜光寺 VI期

河内電泉寺出土の菊水唐草文軒平瓦は、大和唐招提寺出土例と同範であり、この范は後に、両端を切り縮めて喜光寺で使用されている。今回現物照合したのは電泉寺と喜光寺例で、技法は同じだが<sup>2</sup>、胎土は異なる。1997年大谷女子大学資料館にて調査。

中世の同范軒瓦 1:8 図の①～⑧は本文小見出しの①～⑧に対応する

### ◎紀伊根来寺と大和薬師寺 隅窓

紀伊根来寺出土の蓮華唐草文軒平瓦は大和薬師寺出土のものと同范である。技法は同一だが<sup>f</sup>、胎土は微妙に異なっている。根来寺出土の瓦は、大和の瓦と同范とみて間違いないと思われるものが「他にもあるが、今回、この瓦は実見できなかった。蓮華唐草文軒平瓦は、1996年、和歌山県立埋蔵文化財センター管理棟にて現物照合。

### ◎河内竈泉寺と大和薬師寺 隅窓

宝珠水波唐草文軒平瓦は河内竈泉寺と薬師寺とで同范。技法は同一だが<sup>f</sup>、胎土は異なる。1997年現物照合。

### ◎攝津久安寺と大和薬師寺 隅窓末・Ⅶ期初頭

池田市久安寺樓門と大和薬師寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は同范である。范筋があるが、傷からは両者の前後関係は決め難い。両者の胎土は異なる。薬師寺例では顎はりつけが明瞭であり、Ⅶ期初頭と考えてよいが<sup>f</sup>、久安寺例は瓦当はりつけ（久安寺は完形品であり、ごく一部の割れの観察から）の可能性があり、Ⅶ期末に遡るものであろうか。1997年、久安寺にて現物照合。

### ◎河内大谷庵寺と大和薬師寺 隅窓

交野市大谷庵寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は、薬師寺出土例と同范である。技法は同一だが<sup>f</sup>、胎土は異なる。こ

の瓦は薬師寺西塔が多く出土しており、薬師寺西塔が兵火によって焼失する享禄元年（1528）以前であることは確実である。1997年、交野市文化財事業団にて現物照合。  
◎山城柄社遺跡・醍醐寺五重塔と大和諸寺 各期

山城柄社遺跡方形堂出土の3型式の軒平瓦は、いずれも大和と同范である。軒平Aは東大寺等と同范（II期初期）。軒平Cは元興寺極楽坊等と同范（II期）。軒平Bは法隆寺等と同范（V期）。このうち同一場所で現物照合できたのは軒平Bだけであるが<sup>f</sup>、胎土は两者酷似する。一方、醍醐寺五重塔の屋根にのっていた軒平瓦のうち、大和と同范関係にあるのは6型式あり、そのうち現在醍醐寺に所蔵されている5型式と大和の諸例とを現物照合した。第1は興福寺と同范のもの（平安末）、第2は法華寺・西大寺等と同范のもの（III期）、第3は法隆寺と同范のもの（IV期）、第4は法隆寺と同范のもの（VI期）、第5は法隆寺と同范のもの（VI期）であり、いずれも胎土が類似する。山城伏見区醍醐における柄社方形堂と醍醐寺五重塔の瓦が大和と同范で、かつ胎土が同一であるということは、中世の大和の瓦は、京都へは、瓦自体が運ばれるのが一般的であったことを示すものであろう。1994・1996・1997年調査。

（山崎信二／平成宮跡発掘調査部）

## 山内資料の綠釉壇とその成分

**はじめに** 今回調査したのは、中国もしくは朝鮮半島で作られたと推定される綠釉壇5点(228~232:『山内清男考古資料8』参照)である。これらの資料について釉薬と胎土の分析および釉薬の鉛同位体比の測定をおこなったので、その概要について報告する。

**調査の方法** 5点の資料は実体顕微鏡下で観察をおこなったのち、綠釉については蛍光X線分析法による測定をおこなった。まず釉薬層の厚い部分を選んで、表面の白っぽくなつた風化層を取り除いたのち蛍光X線分析法により定性分析をおこない、検出された各元素を酸化物に置き換えた後、ファンダメンタルパラメータ法により、検出された酸化物(重量%)の合計が100%になるように基準化して定量計算した。定量分析にはK2、BCR126Aなど鉛珪酸塩ガラスを標準資料とした。また、風化して白色と化した表面部分についてはX線回折法により生成物質の同定もあわせておこなつた。

胎土部分については、胎土の一部を採取してメノウ乳鉢を用いて200メッシュ以下に粉碎した後、X線回折粉末法により測定をおこない、含有鉱物の同定をおこなつた。また、一部の資料については示差熱分析などを用いて胎土の焼成温度の推定もおこなつた。

綠釉(鉛釉薬)の鉛同位体比測定は高周波加熱一鉛同位体比法によつた(斎藤務氏測定)。

**結果と考察** 各資料を観察した結果、いずれの釉薬部分も風化がかなり進んでおり、表面の一部は白色を呈し粉状化したり層状剝離が生じていた。また、228、229、230、231の各資料にみられる綠釉表面はブロック状の亀裂が発生したり(図1)、多数の気泡が観察された(図2)。これらの亀裂は製作当時において徐冷操作が充分になされなかつたり、冷却時において胎土とガラスの収縮率が大きく異なることなどが原因していると考えられた。しかし、釉薬層にはまったく亀裂が生じてない資料も存在していた(232)。この資料は緑色と黄褐色の釉薬が観察された。また、緑色釉と白色釉が観察される230資料は、緑色釉部分には亀裂が生じているが、白色釉部分には亀裂は生じておらず、釉薬層に亀裂が発生する原因是上記原因以外にも釉薬の層の厚さにも一因がある。

実体顕微鏡下の観察の結果、今回の資料は胎土の状態から大きく3つに分類された。まず、含有する鉱物や礫が細かく淘汰が良好な230、232に対して、228、229は3~5mm大におよぶ石英や長石などが混じつており、やや粗雑な砂質土が使用され、かつ鉄分が多く色調はいわゆるレンガ色を呈している。そして231はこの中間的なもので、基質部分は細かく、これに数mmにおよぶ礫が混合していた。以上の胎土と釉薬の観察の結果、釉薬に亀裂が生じてないものや亀裂が少ないものは、胎土も良質である傾向を示した。

各資料の綠色釉部分について蛍光X線分析をおこなつた結果(表1参照)、いずれの資料からも主成分として珪素(Si)および鉛(Pb)を検出したことから、鉛ガラス

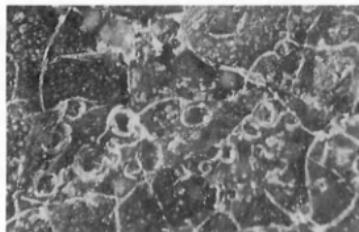


図1 資料230:亀裂や未溶解の石英が観察された(×40)

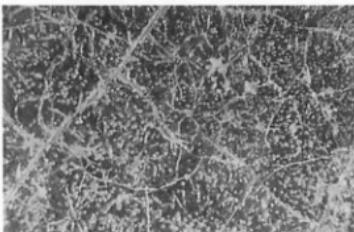


図2 資料229:多数の気泡が残存する(×20)

( $\text{PbO-SiO}_2$ 系)が釉薬原料として使用されたことがあきらかである。今回の資料は一酸化鉛の含有量が、ほぼ60~70%に達する高鉛含有の鉛釉で、従来から公表されている綠釉の組成と同じであった。また、緑色の釉薬からは銅(Cu)を検出しており、銅イオンによる着色がなされている。黄褐色部分については定性分析のみであるが、その着色は鉄イオンにもとづくと判断された。上記元素以外にナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、チタン(Ti)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)などを検出したが、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ :3%以下、 $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{CaO}$ :2%以下で、それ以外の $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{MnO}$ はいずれも1%以下であり、これらの成分に関しても従来のデータと同じ特徴を示した。白色釉および黄褐色釉部分はガラス層が大変薄く(300μm以下)、かつ内部まで風化がすんでいる可能性もあるため、定性分析のみを実施した結果、同様な鉛ガラスであることもあきらかとなった。

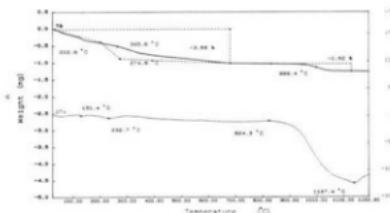
白色に風化した緑釉表層は、X線回折の結果、 $\text{PbSO}_4$ [Anglesite]に同定されるスペクトルが観測された。

以上、緑釉などにみられる鉛釉に関しては中国、朝鮮半島のデータは少なく詳細はあきらかでないが、成分的には日本で出土するものと大差なく、主成分からこれらの地域性を判別することは困難である。今回は資料228、230、232の各資料の緑釉について鉛同位体比の測定を実施した(表-2)。その結果、228と230資料は中国産

鉛鉱石が原料に関係していると推定されたが、232に関しては従来の文献などにはみられないものであり、今後の検討課題となつた。

胎土のX線回折分析の結果、いずれの資料からも石英、長石のピークが検出された。粘土鉱物が検出されていないことや長石が溶融していないこと、ムライトやクリストバライド、スピネル鉱物など熱変成によって生じる鉱物が検出しないことなどから考慮すると、700°C以上1000°C以下で胎土が焼成されたことが推定される。これは熱分析によって得られた結果とも一致(図-3)、824°Cからの大きな吸熱反応とそれに続く1000°C付近からの減量曲線から判断すると、資料230の塊の胎土は800°C前後で焼成されたことが推定された。なお、824°Cの吸熱に続いて1200°Cよりやや高い温度で発熱が観測されており、二次鉱物の生成が関与する。

(肥塚隆保・金子裕之／埋蔵文化財センター)



## 藤原宮出土「大贊」木簡補遺



1975年の6月から12月に実施された藤原宮第18次調査は、藤原宮北面中門を対象とするもので、その発掘で宮の外濠S D145から551点の木簡が出土した。この木簡については『藤原本木簡概報2』(1975年)に略報告がなされ、その後『藤原宮木簡1』(1978年)として正報告が刊行された。『藤原宮木簡1』には、1点1画の墨付をのぞき、証記できたすべてを木簡番号8号から246号まで計239点が掲載されている。それらの木簡の大きな特徴として、評からの荷札が多く出土したことがあげられ、淨御原令制下の地方制度や租税制度を考える上で重要な位置を占めている。

ところが、発掘当初の記録には残っているものの、その後、木簡の所在が不明となり、写真撮影もおこなわれていなかったため、報告できなかつたものが1点あった。

それが、じつは盗難にあったものであり、実物が存在することが判明したのは1990年のことである(飛鳥資料館『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』1991年)。盗難にあったのは軒瓦などが中心であったが、そのなかに木片9点がふくまれていた。その大半はわずかな墨痕のみで判読できないが<sup>4</sup>、1点だけ当初の記録にあった木簡があり、それは『藤原宮木簡1』に192号として報告したものと接続し、完形となる。そこで、今回改めて全体の写真を掲載し、報告することとした。

写真は右上に掲載した。証文は次のようになる。

熊野評大贊塗近代百廿隻

243×20×3(mm) 6033型式

『藤原宮木簡1』ではこのうち下端の「百廿隻」部分だけしか掲載できなかった。最初の文字は左半に傷があるが<sup>5</sup>、「熊」のくずしとみてよい。熊野評は後の丹波国熊野郡にあたる。そこから大贊として貢進された塗塗の近代に付けられた荷札の木簡である。

これまでのところ、熊野評の木簡としては「熊野評私里」と記す藤原宮出土の木簡(『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告25 1969年)について2例目となり、

同郡の贊としては平城宮出土のものに1例あるが、これは品目が判読できていない。

本木簡の品目「近代」は魚の名前で「このしろ」と読む。コノシロは『日本書紀』や『和名抄』に「鰐」と記し、これまで木簡にはあまりみられなかつたが、長屋王家木簡と二条大路木簡にいくつかの例がある。前者では「西店交易進近志呂五百隻…」(『平城木簡概報25』1992年)、後者では「名錐郷近代味腊」(『平城木簡概報31』1995年)などである。ちなみに前者の「近志呂」は『出雲國風土記』の表記と同じである。

コノシロを貢進した国は文献史料ではわからず、今回の木簡によって丹波国と、二条大路木簡によって志摩国が判明するのみである。

次にコノシロの加工法として、「塗塗」(しおぬり)という語句がある。木簡で類例を探すと、長屋王家木簡に「住吉郡交易進貢塗染阿遲二百廿口…」(『平城木簡概報21』1989年)とあり、ここに「塗染」(しおぞめ)の跡とみえる。「塗塗」「塗染」とともに、魚類の保存のために塩をまぶした上で貢進したのであろう。

また、平城宮第258次調査で出土した木簡にも「(表)泉遣使請塗■■彼充魚塗料 五月十七日栗前福足(裏省略)」(『平城木簡概報32』1996年)とあって、「魚塗料」として塩を請求したものがあり、魚の加工に塩を用いた例が知られる。なお丹波国に注目すれば、「延喜式」では諸国貢進御贊として、丹波国の品目の中に「塗塗年魚」とあり、参考となる。

以上、評および贊の関係木簡として1例を追加すべきことを述べた。

(寺崎保広/飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

## 平城京東市周辺ほか出土の 漆紙文書

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、以前の調査で出土した漆紙文書を順次再調査しているが、今回、整理の終了した3次分の調査で出土した資料について報告する。  
**第93次調査出土文書** 平城京左京八条三坊（東市周辺東北地城）を調査した第93次調査（1975年）において、九・十坪の坪境小路南側溝SD1155から1点の漆紙文書が出土した。同じ溝からは他に、御帳下の付札を含む木簡合計25点、「法所」「土寺」「紀伊」「都」などと記された墨書き土器、人面墨書き土器、漆塗小葉壺、漆塗木製匙、漆皮箱、漆塗冠帽断片、漆漉し布、漆容器（土師器皿・杯、須恵器壺、ヒノキ製曲物）、漆刷毛・籠などが出土しており、付近に漆器工房が存在することを想定できる（『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年、『平城木簡概報11』1977年）。

漆紙文書は多くの断片に分離している。これらを接合すると11片の断片にまとめることが可能であるが、断片相互の位置関係は不明である。漆容器の液面の縁辺部にあたる円弧状の部分が残っており、これから直径を推定すると、約15~18cmと考えられる。11片の断片のうち、墨書きは9片のオモテ面（漆の付着していない面）に判読不可能な文字を含めて計20字確認できる。このうちまとまつた墨書きの判読できるA・Bの2片について积文を別掲した。A断片についてみると字の大きさは約1.4cm四方、行間は約1.9cmである。界線、印影、紙背文書などは確認できない。

**第131-31次調査出土文書** 平城京左京二条二坊十三坪を調査した第131-31次調査（1982年）において、遺物包含層から1点の漆紙文書が出土した。調査の報告は奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』（1984年）において同一坪内の他の調査とあわせておこなっているが、本文書については未報告があるので、ここに収載する。

本文書は漆のパレットに用いたと思われる直径12.6cmのクロメ漆付着の土師器の碗A（平城宮土器IV）を覆っている。紙自体の遺存状況はきわめて悪い。墨痕はオモテ面に2行認められ、积文は別掲のとおりである。残



平城宮第93次調査出土漆紙文書A



りの良い部分で観察すると、字の大きさは約8mm四方である。界線・印影などは認められない。紙背については水で濡らすなどの方法で観察を試みたが、墨痕は確認できなかった。

**第154次調査出土文書** 内裏東方を調査した第154次調査において、この地区を南流する宮内の基幹排水路であるSD2700から1点の漆紙が出土した。これも未報告資料である。同じ溝からは漆塗用刷毛のほか、1778点の木簡も伴出している（『昭58平城概報』1984年、『平城木簡概報17』1984年）。

この文書も漆のパレットに用いたクロメ漆付着の土師器の杯を覆っているが、完存せず、本来の直径は不明である。残存部分は約9cm四方の断片となっている。墨痕は確認できなかった。

（古尾谷知浩／平城宮跡発掘調査部）

## 古代建築における 三手先組物について

**はじめに** 彰国社刊『建築大辞典』の「三手先」の項をみると、「(前略) 壁面から前方へ斗組が3段に出ているもの。比較的格式の高い堂塔に用いられる。(後略)」とあり、薬師寺東塔と唐招提寺金堂と思われる建物の側柱から外の部分の組物の図が掲載されている。ほかの辞書や建築術語解説書等をみても、ほぼこれと同じ内容で大差ない。一般的に組物は、側柱から外側の部分の形態的特徴として捉えられているようである。建築は構造物であり、当然軒を支える組物は構造材である。しかし、上記のように構造的な見方からの説明がない。本稿は三手先を構造的視点から捉えようと試みたものである。なお、桔木等の出現によって構造的意味あいが薄れる中世以降のものは対象外とし、古代建築にしほって考察する。

**古代建築遺構の組物形式** 現存する古代建築において組物をもつ建物は56棟あり、その内訳は三手先15棟、二手先1棟、出組4棟、三斗20棟、大斗肘木6棟、舟肘木10棟である。飛鳥・奈良時代に限れば、三手先10棟、二手先0棟、出組2棟、三斗8棟、大斗肘木3棟、舟肘木1棟である。三手先の数に比べて二手先、出組が極端に少ない。東大寺転害門は現状で出組となっているが、これは後世の改造によるもので、当初は三斗であるから、飛鳥・奈良時代において三手先以外で手先の出るものは、東大寺法華堂の出組わずか1棟しかないことになる。

古代の伽藍が残る法隆寺西院で、各建物の組物をみると、金堂、五重塔、中門が三手先、講堂、回廊、經蔵、鐘楼が三斗である。二手先、出組はみられない。

**法隆寺金堂・中門・五重塔の組物** 側柱、入側柱上に組まれた舟肘木の上に通肘木がわたされ、側柱をこえて外側に出される。入側柱筋に束がたち、その上から先ほど通肘木の先端にかけて斜材(尾垂木)がわたされる。この斜材の先に三斗が組まれ、桁、母屋をうける。

**薬師寺東塔の組物** 雲肘木のかわりに肘木、斗が組まれるだけに基本的には法隆寺と同じ原理である。

**興福寺東金堂の組物** 室町時代の建築であるが、構造は奈良時代の形式を踏襲していると考えられているので、ここでとりあげる。側柱と入側柱の高さが同じであるこ

とは、法隆寺、薬師寺と同じである。側柱から外の組物形態は唐招提寺金堂と同じであるが<sup>1</sup>、柱高さを同じにしたことにより、唐招提寺金堂でみられる入側柱上の折点ではなく、安定した三角形を構成する。

**唐招提寺金堂の組物** 前者と異なり、入側柱が側柱より高い。ここでは外側に出された通肘木のかわりに繋虹梁を肘木に作り出してのばしている。入側柱上の枠肘木上に平三斗を組み、その上に束をたて、その上に尾垂木をのせる。前の三者が通肘木、束、尾垂木で三角形を形成していたのに対し、三角形は構成するものの内側部分が三斗と束の二つの部分からなり、途中でおれやすい構造となっている。前の三者と異なり、二手のところで組物間を連結する通肘木が入っている。

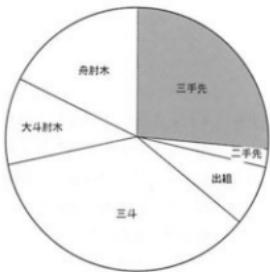
**平等院鳳凰堂の組物** これまで入側柱のある建物であったが、この建物は身舎だけで、庇がつかず、入側柱がない。尾垂木は天井上の盤からわたされる。興福寺東金堂の庇部分を取りのぞき、側柱と入側柱をドッキングしたつくりになっている。

**まとめ** 以上、古代を代表する建物の三手先組物について述べた。結論として、三手先は、通肘木、束、尾垂木で三角形(トラス)を構成し、これによって深い軒をさえる構造手法であるといえる。上記以外の三手先についても考察した結果、掲載した図のように三手先には四タイプあることがわかった。このような三手先の構造をみれば、三手先は「壁面から前方へ斗組が3段に出ているもの」という説明が得てないものであることはあきらかである。

古代において、とくに飛鳥・奈良時代において、三手先以外に手先を出す組物がきわめて少ないということは注目すべき事実である。三手先の構造からいって、中間的な二手先や出組は、基本的には存在せず、東大寺法華堂の出組は例外的なものであった可能性もある。

なお、今回の研究の成果については、平成7年度から実施中の平城宮第一次大極殿基本設計に反映したいと考えている。また、同時に基本設計の中で、法隆寺金堂・薬師寺東塔・唐招提寺金堂など三手先組物をもつ本格的な建築の構造についてコンピュータ解析を実施する予定で、三手先組物の科学的な解明にも挑戦したい。

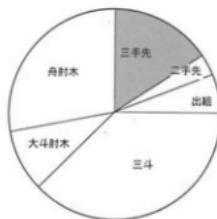
(村田健一／建造物研究室)



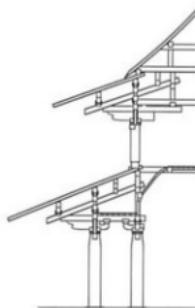
古代建築における組物の割合



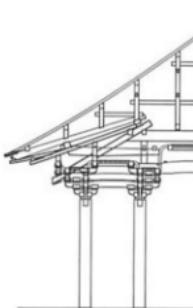
うち 飛鳥・奈良時代



うち 平安時代



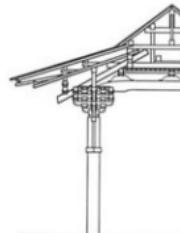
法隆寺金堂



興福寺東金堂



唐招提寺金堂



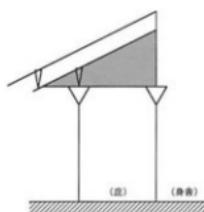
平等院鳳凰堂

## 和様三手先の種類

組物は、軒を支える装置である。軒を支えるためには、当然のことながら側柱から外の部分だけに対応するとは不可能で、内側の部分を含めた架構によってその役割を果たす。特に三手先のようにきわめて深い軒を支える形式においては内側の架構が必要なポイントとなる。

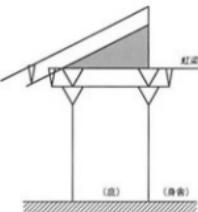
三手先は、通財本・束・尾垂木で三角形(トクス)を構成し、これによって深い軒の支えを構造手法である。わが国の和様建築の三手先はこのトクスの作り方にによって大きく下の四種類に分類することができる。

△ 通財本  
▼ 尾三手



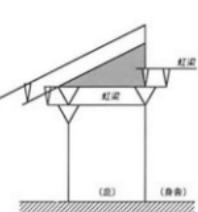
TYPE A 身合柱と施柱が同高

通財本上の通財木、身合柱との束、尾垂木で三角形を構成する。4つのタイプの中で三角形が最も大きい。



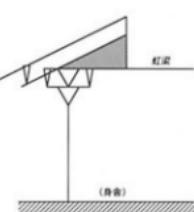
TYPE B 身合柱と施柱が同高・2

基盤的にはTYPE Aと同じ。通財本を2段に組み、その上に三角形をつく。そのため、三角形はTYPE Aよりも小さくなる。二手目に通財木を入れ、組物の様の連結をはかっている。



TYPE C 身合柱が施柱より高い形式

身合柱と施柱の高さが異なる形式。TYPE A, Bのように通財木、束、尾垂木で完全な三角形をつくる。構造的には不安定である。TYPE Bの身合柱を通財木一段分高くした形式である。



TYPE D 丸がない形式

TYPE Bの身合柱と施柱をひとつについた形式

# 高御座の考証と復原

平城宮跡発掘調査部では、平城宮第1次大極殿1/10復原模型内に設置する高御座の1/10復原模型を製作した(口絵参照)。古代の高御座の構造意匠に関する資料はほとんどないので、復原設計にあたっては、現存高御座を基本資料とせざるを得ない。現存高御座にもとづきながら、文献史料によって復原できる点をあきらかにし、後世の意匠を反映する点については、できる限り奈良時代初頭に近いものに修正するという方針で設計を進めた。

**文献史料からみた高御座** 高御座は、治承元年(1177)の平安宮大極殿焼失以降、規模を縮小して紫宸殿・太政官庁に設置されるようになった。そのため、文献の調査対象はそれ以前のものに限定した。史料は「内裏式」「内裏儀式」「儀式」「延喜式」「文安御即位調度図」および裏松固縫「大内裏図考証」、平胤様「高御座勘物」所引の院政期古記録などを利用した。

院政期古記録にみえる高御座は、壇が上・中・下の3段あり、その上に柱を8本立てて帳をめぐらし、八角形の蓋をのせている。蓋には鳳凰、鏡など多くの装飾品がつく。壇の名称は、下壇が「壇」、中壇が「(御帳)土居」、上壇が狭義の「高御座」である。御帳土居とは帳台の柱が立つ土台、狭義の高御座は天皇が座る壇のことであろう。

表1 装飾品の復原

寸法、文様	員数	デザイン	
		参考	備考
蓋 紫宸	大1.7尺小1尺	大1 小8	百濟陵山寺出土 金銅大香炉
鏡	大1尺小4寸 小24(各面3)	正倉院 日光型	大鏡は光芒なし
玉	8(各隅木下)	形態は法隆寺納 宝物広葉鏡はか く	金具は正倉院難 鏡などを参照
玉相輪	1尺	16(各面2枚)	法隆寺金堂天蓋の 本製造跡
障子	表:緋紅花絛 裏:白絹	12	法隆寺納物御 江綿帶おおよび 正倉院 双鳥進珠文刺繡
帳	表:浅紫絹 裏:緑絹	2	正背面を除き各 面2枚 平能式
下壇 敷物	本地唐鑄	法隆寺御衣袋の 江綿帶おおよび 中国緞地織物アラ タス(アラタスの通 称)等在用	
中壇 敷物	青地唐鑄		
上壇 敷物	青地唐鑄		
椅 子		正倉院 赤漆欄木胡床	
木箱 敷物	綿畠	正倉院 綿畠地木印綿畠	

高御座の研究史をふりかえると、これは常設のものか、臨時のものか、また、唯一のものか、複数存在するものかという議論がある。「延喜式」などをみると、最下壇の「壇」のみは複数常設であっても、狭義の高御座本体は唯一であり、中壇の土居桁と柱、装飾品などとともに、通常は内蔵室に収納され、儀式に先立って臨時に敷設される建前であったことがわかる。但し、「日本紀略」昌泰2年(899)5月22日条には「未時、飄風吹。傾大極殿高御座於巽方」とあるので、9世紀末の実態としては、柱や蓋などは撤収されず、常置されていたものと思われる。

**現存高御座との比較** まず、現存高御座について記そう。現存高御座は明治42年(1909)の「登極令附式」にもとづき、大正天皇の即位に際して新調されたものである。高御座は3つの壇、すなわち長方形下壇(正面6.06m×側面5.45m、長八角形中壇(対辺距離正面5.55m×側面3.90m)、長八角形上壇(同4.95m×3.30m))からなる。下壇には赤地、中・上壇には青地の敷物を敷き、上壇には屏、椅子を重ねる。下壇から壇下にかけて背面に5級の木階をつけるが、両側面3級の木階は平成度即位儀の後に撤去した。また、下壇と木階には高欄をめぐらす。柱は円柱で上壇に8本立ち、柱上には長八角形方形造の蓋をのせる。各隅木鼻には軒手をつけ、その上に鳳凰をおき、軒手下には轆を下げる。蓋の頂上には方形露盤をのせ、その上に軒手上のものより一まわり大きな鳳凰をおく。軒先各辺には鏡と唐草の装飾を交互に配す。柱間は開放で、各間に引き分けの帷をかけ、内法長押下には帽額を下げる。

次に古代の高御座と比較してみよう。各部の復原設計については後述し、3つの主要な相違点を述べる。

①高御座の壇と柱の立つ位置：現存のものは柱が上壇に立つ。前述のように、古代のものは中壇の御帳土居の上に柱が立っていたとみるべきである。

②平面形：前述のように現存高御座は蓋が長八角形である。これに合わせて、軒先各辺に配された鏡の数も正背面が各5枚と多く、他の6面が各3枚と少ない(鏡の数は院政期古記録も同じ)。しかし、「延喜式」では各面3枚ずつとなっており、蓋および上・中壇の平面形は正八角形であった可能性が高い。

③帳の数：現存高御座は8枚で各面にかけ、柱間の中央で左右に引き分ける(この点は院政期も同じ)。しかし、

『延喜式』では「障子十二枚、帳二条」とあり、障子は正面以外の柱間6面に各2枚ずつ納められていたと推定される。帳2条は、それぞれ八角形を半周する形で障子と重ねてかけめぐらし、正面で左右に引き分ける可能性と、正面各1枚として巻き上げる可能性が考えられる。前者は障子と帳との関係に問題が残り、後者の場合、儀式の際の女官2人による帳の開閉法が問題となる。今回の模型製作においては後者を採用した。

**軸体の復原** 不明部分が多いが、以上の考察をふまえて、現存高御座や古代の建造物等を参考に設計した。平面規模は、院政期には疊一丈四方が上壇に納まるとしており、上壇を対辺距離15尺の正八角形とした。一方、中・下壇は『大内裏園考証』に記された寸法を参考に、中壇を対辺距離18尺の正八角形、下壇を一辺24尺の正方形とした。下壇には高欄を付け、下壇および高欄の形式は大極殿模型にならった。また、昇高欄は平等院鳳凰堂仏壇を参考にした。本階は現存高御座にならない、背面を5級、両側面を3級とした。柱は中壇に立て、古代の八角円堂にならない八角柱とした。柱間装置は前述のように正面に帷、他6面には障子を2枚ずつ入れ、障子2枚は半部型とする。高さについては文献史料にも記載がなく、3つの壇いすれも現存高御座の寸法をほぼそのまま採用した。また、下壇上端より蓋の頂上（露盤の下）までの高さは、現存高御座正面のプロポーションに合わせて17.4尺とした。

蓋の意匠も不明だが、史料に玉幡が帷額から1尺があり、軒の出を1尺とした。蓋の曲線は正倉院六角厨子残欠のものを採用した。蔽手は東大寺八角燈籠、露盤以上は法隆寺夢殿と東大寺八角燈籠の意匠を参照し、最上部に平城京出土の擬宝珠をおいた。下壇側面の格狭間の形状は、正倉院赤漆文櫻木厨子の台脚を参考した。なお、単位尺は大極殿模型にならない、1尺=29.54cmとした。

**装飾品の復原** 数量、大きさは文献史料に沿い、デザインについては、正倉院宝物、法隆寺献納宝物などを参考に設計した（表1）。このうち、玉幡は法隆寺献納宝物広東綾幡等の形態を玉で作製することとし、玉の連ね方は阿武山古墳玉枕復原模型にならった。敷物は各壇同デザインとし、帷と障子も同デザインとした。飾金物のデザインは法隆寺金銅小幡の偏向唐草、奈良時代初期の軒平瓦文様などを参考に設計した。調度品は、疊を用いず、

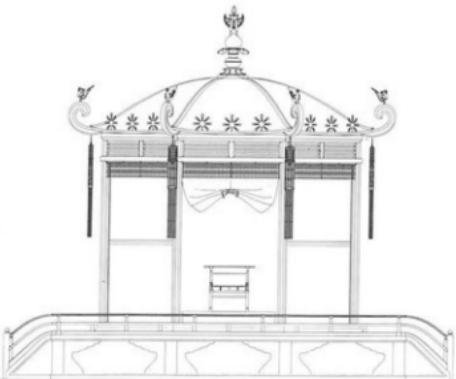


図1 高御座復原平面図 1:100

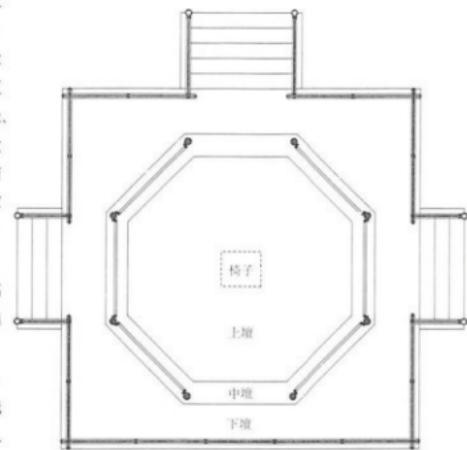


図2 高御座復原平面図 1:100

椅子式にするという方針から、椅子を製作した。

**まとめ** 文獻上の検討から、高御座は常設で複数存在するのか、唯一にして臨時に設置するのかという研究史上の議論に対し、後者の可能性が高いとの見通しを得た。また、柱のたつ位置や平面形等に現存高御座とは異なる点をみいだし、復原模型の設計に反映させることができた。模型の細部意匠については、資料的制限もあり、思ひ立って決定せざるをえなかつた面も少なくない。諸点について、各方面からのご批判をいただければ幸いである。  
（古尾谷知浩・箱崎和久／平城宮跡発掘調査部）

## 平城宮東院西建物の遺構解釈と復原設計

平成8年度の平城宮跡東院庭園復原事業では、西建物の復原設計をおこなった。復原にあたっての基本的な考え方と復原建物としての西建物の意義を述べてみる。

**遺構解釈と復原事業での位置づけ** 西建物は、昭和54年度の第120次調査で検出した掘立柱建物遺構SB9360にある。桁行7間×梁間2間の身舎に西庇のついた南北棟で、身舎の柱間寸法は10尺等間、庇の出は14尺で柱間寸法よりも長い。身舎柱の掘形は一辺が約140cm、深さが遺構面から140~150cmとかなり大きいが、庇柱の掘形は一辺が60~80cm、深さも約70cmと小さい。

SB9360は、すでに復原された東院南門SB16000Cの北東に位置する。第243次および第245-1次調査（平成5年度）の所見によると、南門とSB9360は奈良時代後半のE期で共存しており、SB9360は南門から北にのびる道路の脇に設けられた施設と推定されている。また、SB9360の東側には、SB9360と柱筋をそろえて2条の掘立柱南北塀SA9289・SA9320Bが<sup>a</sup>おり、東院庭園地区と南門周辺地区を厳重に区画している。このように、西建物SB9360は東院庭園とは別の区画に含まれる建物であり、おそらく南門と関係の深い政務機関の施設の一つであったろう。したがって、西建物は東院庭園に対するアプローチとともに本來は無縁なはずだが<sup>a</sup>、復原事業の全体計画では、駐車場を西におき、西建物を経由して庭園に入ることになっている。このため、西建物は庭園への導入施設であるとともに、集客のための管理・休憩施設として位置づけている（61頁参照）。

**平成5年度復原案の問題点** 東院庭園復原全体計画を作成した平成5年度の段階では、西建物の上部構造は、今回とは異なる復原案を考えていた。身舎柱間10尺に対して庇の出が14尺と長い点に着目し、庇の垂木を身舎垂木の先端につな

ぐ打越垂木の技法を用いて、神社建築様式でいう「流造」のような構造を推定していたのである。しかし、この案には以下の問題点がある。

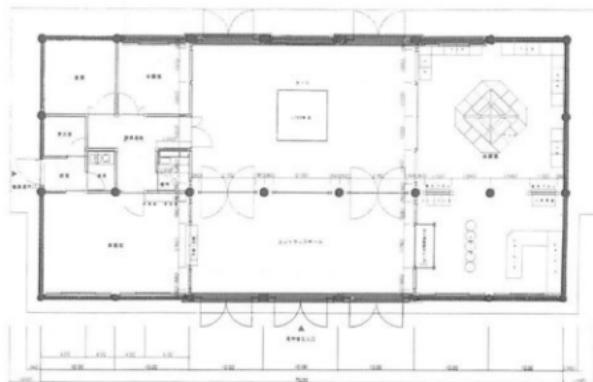
1)身舎と庇を一体化した流造のような構造ならば、身舎と庇の柱寸法がそれほど違わないはずだが、庇の柱穴は身舎のものに比べて小さすぎる。

2)流造のような屋根にすると、庇の軒先で雨仕舞に必要な屋根勾配が充分確保できない。

3)庇の出を身舎柱間寸法よりも長くする掘立柱建物は、平城宮・京で非常に多く検出されており、これらの建物が、すべて流造のような構造をしていたとは考えにくい。

また、第243次の所見では、SB9360身舎の南から4間目に間仕切りの柱穴を認めているが、今回の再検討では、それは別の建物の側柱列の一つであることが判明した。

**復原再考** 以上から西建物は、身舎と庇が一体化しない構造で、しかも身舎内部には間仕切りのない建物と考えられる。とくに、身舎に比べて庇の柱穴が著しく小さい点が注目される。これは身舎と庇の屋根構造・葺材が異なった可能性を示唆するものである。この場合、葺材は、①身舎=瓦/庇=桧皮、②身舎=瓦/庇=板、③身舎=桧皮/庇=板の組合せを想定できるが、SB9360周辺では奈良時代後半の軒瓦がほとんど出土しておらず、掘立柱と瓦屋根の複合性も考えにくいので、③身舎=桧皮/庇=板葺の案を採用した。以下、各部位について概説する。なお、設計の基準尺は、造構の計測値から、1尺=



西建物平面図 1:200 赤色付部分のみ古代建築（立面図・断面図も）

30.0cmに復原した。

(a)柱径：柱据形の規模の差から身舎の柱径を根元で1.2尺(36.0cm)、柱頭で1.1尺(33.0cm)、庇の柱径を根元で9寸(27.0cm)、柱頭で8寸(24.0cm)とした。

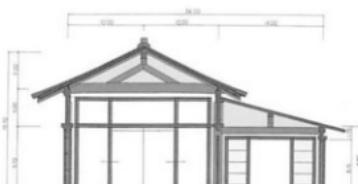
(b)柱間装置：庭園への導入部分をひろくとるため、正面は中央3間を扉口とし、両脇2間を連子窓とした。一方、背面については、背面らしく壁体を多くした。背面扉口30.0cmに復原した。

(c)構造：身舎の組物は舟肘木で、軒は一軒とした。軒の出は、庇のつく正面側で3尺、背面側で4尺とした。身舎の梁は直材、架構は又首組とした。身舎の構造・寸法は、軒の出以外、復原した宮内省西南殿および西北殿にはほぼ準じている。庇では柱頭に組物を用いず、柱が直接繋梁をうける構造とした。

(d)庇屋根：庇の屋根は鎧つきの目板葺とした。目板葺材の寸法は、昭和修理前の法隆寺金堂・五重塔の裳階の板葺を参照した。屋根勾配・軒高の確保のため、身舎側柱の上端外側に古輪状の材をとおして板掛けの材とした。

**現代建築としての西建物** すでに述べたように、西建物は東院庭園への導入施設であるとともに、管理・休憩の施設でもある。この複合的機能に対応するため、中央3間をエントランス兼通路、北側2間を管理事務所、南側2間を休憩スペースとした。このような現代的機能を充足させるため、建物内部に古代建築とは関係のない間仕切り等を設けなければならない。これについては、奈良時代の復原構造部分と現代建築として必要な構造部分を、一見して区別できるような配慮を考えた。たとえば間仕切り壁については、古代建築の白漆喰壁に対して、可能な限り、ガラスやステンレスパネルなどの現代的な素材を用いる。また、柱の取り付き部分は、独立したH型鋼をなして間仕切り壁を支持することにより、古代建築の木柱と分離させる。もちろん、現代的な天井は張らず(管理事務所部分をのぞく)、古代建築の架構を露出させる。このほか、建築基準法や消防法上の問題点を解決するために、やむを得ず、壁体部分に小窓や扉を設けるが、これらは外観上目立たないよう工夫した。また、構造的に必要な桁行方向の耐震壁は、展示パネルや管理事務所の間仕切りとして利用するなど、現代的機能に還元した。

**復原建物としての西建物の意義** 今回復原した西建物の形態は、現存する文化財建造物にはみられないが、発掘



西建物 ホール・休憩室断面図 1:200



西建物 北立面図 1:200

事例には類似する平面を多数確認できる。このような片面庇付き掘立柱建物に対する一つの具体的な復原案を示したことの意義は大きいだろう。もっとも、便益施設を兼ねる建物として設計したために、西建物SB9360本米の性格に基づいた、純粹な古代建築としての復原ができたわけではない。しかし、設計上の最大の課題は、これまでの平城宮内の復原建物と異なり、現代的機能を古代建築の意匠・構造といかに共存させるかという点であった。このテーマに対し、現代的機能と古代建築の構造を完全に分離させ、便益施設としての用途を古代建築に内包させるという方法をとって答えてみた。この構造分離手法によって、見学者は現代的空間の中にいながら、古代の空間を感じることができるだろう。そして園内に足を踏み入れれば、古代の庭園と建物を体感でき、西建物はいわば現代と古代をつなぐ架け橋となる。

遺跡の上にたつ復原建物には、たんなる復原建物以上の用途を求める場合がある。西建物の設計はその命題に対する先駆的な解の一つに位置づけられるだろう。なお、西建物の基本設計に関しては、鈴木嘉義・岡田英男両先生にご指導を仰ぐとともに、西尾信広・手島知恵両氏（京都環境計画研究所）の全面的な協力をえた。

（箱崎和久・浅川滋男／平城宮跡発掘調査部）

## 発掘された庭園遺跡

古墳時代～飛鳥時代の出土例

日本庭園史の研究に、発掘された庭園道路(発掘庭園)の資料が大きな寄与をなすようになっておよそ30年が経つ。現在、発掘庭園は部分的なものも含めると、全国で約230件が報告されており、年代的にも古墳時代から江戸時代までにわたる。発掘庭園について、「佛教藝術」109号(毎日新聞社、1976年)と192号(1990年)で特集が組まれたほか、「京都の庭園」(京都市文化財ブックス、1989年)では平安時代の庭園道路について、「発掘された古代の苑池」(学生社、1990年)では、主に飛鳥・奈良時代の庭園道路についてまとめた報告がなされている。また、「古代庭園の研究」(牛川喜幸京都大学学術論文、1993年)でも、発掘庭園の成果をもとにした論考が主要部分を占めている。

平城宮跡発掘調査部計画修景調査室では、かねてから発掘庭園の資料収集をおこなってきたが、1996年度に重点的な研究を実施し、新資料の収集とそのデータベース化を進めた。ここでは、上記掲載論文をはじめとした先行諸研究の成果も含め、古墳時代から飛鳥時代の庭園道路についてとりまとめ報告しておきたい。

**古墳時代の庭園遺跡** 城之越道路(三重県上野市、図1)は、1991年に発掘された古墳時代の道路である。木津川右岸、周囲を丘陵に囲まれた盆地の山裾部に位置するこの道路では、4世紀後半にさかのぼる流路の構造が発見された。3ヶ所の自然の湧水を玉石によって護岸して水量調節のための桝を作る。それぞれの桝から流れ出した流路は、おむね自然流路を踏襲したものとみられ自然

な屈曲を示すが、まず南の二本が合流、さらに北のものが合流して西方に流下する。流路両側の斜面には、古墳の葺石の技術を援用した石張りが施され、さらに流路合流地点には集中的に石が置かれ、あきらかに人为的に立てた石もみられる。この道路は、出土遺物から祭祀道路と位置づけられているが、その形態・意匠は、造水(流れ)・潤沢・立石など奈良時代以降の日本庭園の意匠を想起させるものがある。共同体あるいは共同体を統率する支配者にとって、重要な屋外空間を一定の美意識に基づいて造形したのが庭園のはじまりと考えると、その役割の中心が祭祀であるのは当然である。城之越道路は、日本における庭園出現段階のひとつの形態を示すものであり、その意匠には、すでに後世の日本庭園の自然風景指向的な性格が看取できる。

南郷大東道路(奈良県御所市、5世紀)は、自然流路湾曲部に張り石を施し、流路中の建物への導水施設を設けたものである。阪原阪戸道路(奈良市、5世紀前半)は、自然流路を利用し湧水地点等に集石を施したもので、いずれも城之越道路と形態が異なるといえ、水辺祭祀の場である屋外空間の修景を地形にあわせておこなっている点で注目にあたる。また、南紀寺道路(奈良市)で検出された井泉構造は、中央付近に円形の水溜をともなう一週4.5m、深さ50cmの方形石組である。水溜から溢れた湧水は、方池にひろがり、方池からのびる素掘溝で西北西に流出する構造をとる。5世紀中葉に築造され、後半まで存続したとみられる。この井泉構造は水辺祭祀の場と推定されているが、その整然的な意匠には飛鳥時代の方池の萌芽をみる思いがする。

**飛鳥時代の庭園遺跡** 飛鳥時代の庭園を特徴づける意匠は方池である。これまでに発掘された方池のうち、規模

図1 城之越道路・流路遺構

図2 石神遺跡・方池遺構

図3 小野田宮推定地・圓池遺構

が確定できた最大のものが、多武峰西麓の緩傾斜地に立地する鳥庄遺跡の方池（奈良県明日香村）である。一辺約42mの隅丸方形で、深さは最大2m以上。石積護岸をほぼ垂直に施し、底部には20~30cmの平らな石を敷き詰める。池の北岸中央付近の池底に排水用の木樋を据えて、完全に水が抜ける構造となっている。方池の意匠は朝鮮半島に類例があることから、おそらく大陸の影響をうけたものであろう。築造されたのは、奈良時代以前の古地図に記載したことから7世紀前半で、9世紀ないし10世紀まで存続したものとみられる。この池を『日本書紀』推古天皇34年（626）5月条に記載のある蘇我馬子邸の池とみる説もあるが、池中に小島をもつ小池、という描写との相違が大きく、別物とみる方が妥当であろう。用途としては、大規模な方池という形態から考えて、なんなる鑑賞のためというよりも、仏教関連施設としての意味合いが強いように思える。

また、石神遺跡（明日香村）では方池が2基検出されており、一方は7世紀中葉の齊明天皇の頃のもの（図2）。他方は7世紀後期の天武朝の頃のものと推定される。このうち前者は、1辺6m、深さ80cm、側壁には川原石を2~3段積み上げ、4隅は立てて押さえられた構造をもつ。底は粘土上に小石を敷き詰めているが、取水・排水の施設は設けられておらず、使用時にのみ水を溜めたものとみられる。方池は、大規模な建物で囲われた石敷広場のなかにある。『日本書紀』齊明天皇6年（660）5月条には、石上池邊に須弥山像を作り歎息に対する饗宴をおこなった、との記載がある。一方、明治35年（1902）、この付近で須弥山像が発見されている。この方池と須弥山像こそ、同条に記載された造構・造物であり、これらを重要な舞台装置として石敷広場で服飾儀礼としての饗宴が執りおこなわれたのであろう。

明日香村では、このほかに坂田寺跡（7世紀前半）や平田キタガワ遺跡（7世紀）でも、方池の一部とみられる直線的な石積護岸がみつかっている。さらに、仙台市の郡山遺跡でも方池が検出され、方池が「地方官衙にも築造されていたことがあきらかとなった。この方池は東西3.7m、南北3.5mのはば正方形で、深さは80cm、川原石を4~5段小口積みにし、底は円礫を敷き詰めていた。7世紀末の築造。形状や大きさ、石敷広場が同時に併存する点で、石神遺跡の方池と類似し、中央官人による

図4 キル第118窟（『中国石窟・キル石窟』、平凡社、1984年）

蝦夷・南嶺に対する服飾儀礼の饗宴の舞台装置として、石神遺跡と同様の用途に供されたものと推定される。

一方、こうした方池とは系統を異にする園池造構も発見されている。上の宮遺跡（奈良県桜井市）で検出された園池造構は、6世紀末から7世紀初頭にかけて存続したものである。直径約5.6m、延長10m以上の馬蹄形の石組溝（幅40cm、深さ30~40cm）の内側に石敷を施し、その中心部には石組の長方形池（1.5m×2.6m、深さ1.5m）を設ける。さらに、そこを起点に石組排水溝（幅50cm、深さ1~1.4m）が北東方にのびる。他に類例をみない特異な形態があるが、どちらかといえば幾何学的な平面プランや石積の手法は、大陸からの影響が想定できる。出土遺物からみて、園池をともなう邸宅の居住者が高い地位、身分の人物であったことが推定できるが、園池の具体的な用途はあきらかでない。

小堀田宮推定地（奈良県明日香村）で検出された園池造構（図3）は、不整円形・玉石組の池（南北2.4m、東西2.8m、深さ50cm）と、池西南隅から発し南西方向にS字状にのびる石組溝（幅25cm、深さ20cm）で構成される。この意匠もまた、自然景観を模したものとはいいがたく、大陸由来のものと考えられる。その平面形は中国新疆ウイグル自治区キル千仏洞第118窟（4~5世紀）の窟頂部壁画（図4）に多数描かれている不整円形の池から、S字状の溝が発する絵柄との類似が指摘でき、その関連性の検証が今後の大きな課題である。

また、前述した鳥庄遺跡の方池の東方で検出された流路造構は、幅3~5m、深さ1.2m。自然の溪流を模した石組の護岸が施されている。7世紀中葉に築造され、末には埋め立てられている。この流路は、方池が盛んに築造される時代にあっても、一方で自然風景指向的な意匠が存在したことを見出している。（小野健吉／平城宮跡発掘調査部）

## 養翠園・滴翠園の調査

本年度おこなった養翠園(和歌山市)、滴翠園(京都市)の調査は、ともに後年度に控える庭園改修にともない、実測図の作成を主眼としたものである。調査対象となる各庭園の面積、調査回数および日数は、養翠園が約27,000m<sup>2</sup>(うち園池部分が約9,000m<sup>2</sup>)、計6回、延べ26日間、滴翠園が約4,300m<sup>2</sup>(うち園池部分が約900m<sup>2</sup>)、計3回、延べ15日間である。調査にともない、養翠園では1/100、滴翠園では1/40で野帳を作成し、それぞれ1/200、1/50の清絵図と1/400、1/100の縮図(図1、図2)を作成した。

**養翠園 一庭園の概要と保存整備**— 養翠園は、文政年間(1818~30)に紀州徳川家第十代藩主治宝が和歌山藩士山本理左衛門の下屋敷を改修し、西浜御殿の別墅「水軒御用地」の庭園として造営したのを始まりとしている。治宝の死後、「水軒御用地」は家老三浦家に下げわたされるが、明治21年に徳川家が買い戻し、これを昭和8年、藤井家に売却、昭和23年の農地買収令によって、現在は庭園の部分のみが残っている。藤井家ではこの養翠園の保存に努め、同29年より公開のため飛び石を新たに施すなどして改修・整備を手掛けるとともに、「養翠園保存協会」を設立し、養翠園は同33年に和歌山県指定文化財「名勝 紀瀬水軒御用地」の指定を受けた。同36年には第二室戸台風来襲の折、庭園内浸水や多くの倒木などによって多大な被害を蒙ったが、よく復旧に努め、同45年に保存事業経営の安定化のために「株式会社養翠園」を設立した。平成元年には国指定名勝「養翠園」となり、現在に至っている。

庭園は池泉回遊式を主要な骨格とするが、大浦湾に面する沙入式の園池、散地面積の1/3を占めるこの園池を利用した舟遊式、天神山・草魚頭姿山を背景とした借景式、中国西湖の風景を模した縮景式、露地など、種々の庭園様式が組み合わされている。

L字型の敷地は西辺と南辺を大浦湾に囲まれ、南側にある東西に長い園池を中心にひろがる。園池の北西には「養翠亭」(文政4年建築、平成3~6年改修)があり、園池南岸の孤山の石組や東方の中島、三ツ橋、天神山などを望む「御座の間」、あやめ池の正面に「御次御座敷」、

露地をともなう茶室「実際庵」などが付属している。

養翠園は海浜地にありながら、とくに海景を取り入れず、平坦な地形と大浦湾に接する部分を「松ヶ枝堤」で仕切って閉じた庭園空間を形成している。松ヶ枝堤は高さ約2m、幅約5mの土手の上に、胸高直径20~60cmの大分のクロマツを列植したもので、往時は湾岸に独特の風致をなしていたが、第二室戸台風以後、防潮のためのコンクリート堤防が堤の南側に接して設けられている。園内の植栽はこの「松ヶ枝堤」に代表されるように、大小のクロマツが大部分を占め、その他もウバメガシ、イスマキ、マサキなど、耐塩性、防風性に富んだものを使用している。

園池は中島と共に付属する三ツ橋、太鼓橋によってほぼ東西に二等分割される。庭石は紀州青石(緑泥片岩)を基調としており、護岸の石組はこれを石垣風に積むのを基本として一部を乱立打ちとし、汀線は中島遊びを境に西側は自然風、東側は直線的な作りとなっている。紀州青石で作られた護岸は、築造以後の堆積などによって埋もれている部分があり、とくに南岸の孤山にみられる築山石組の本来の姿の解明には今後発掘調査等を含めた詳細な調査を必要とする。

今後、養翠園では「護岸の改修」「池の浚渫」「御門長屋の修理」などの事業を順次予定している。庭園内部だけではなく、天神山の借景や松ヶ枝堤など周辺環境を含めた名勝の保全を進めるためには、緑地や港湾など、関係他部局と協力し、緑の基本計画や都市マスタープランのなかで総合的に位置づけた保全計画が必要である。

(平澤 誠/平城宮跡発掘調査部)

図1 養翠園平面図

**滴翠園** 一洛中洛外園から読む築造年代— 西本願寺の東南隅にある滴翠園は、飛雲閣をめぐる庭園である。飛雲閣については、豊臣秀吉の京都邸第・聚楽第の構造を移築したとの伝承が江戸時代からある。聚楽第遺構の移築説については、近年の解体修理の際の所見から否定的な見解が優勢であるが<sup>1</sup>、なお、その真偽は決定的にはあきらかになっていない。飛雲閣が移築であるにせよ、新造にせよ、滴翠園の築造とは不可分の関係にある。滴翠園の築造およびその後の変遷については、文献史料と絵画資料を駆使した飛田範夫の論考(『西本願寺滴翠園の変遷』『史跡と美術』532号、1983年)がある。飛田は、洛中洛外園、なかでも《林家本》を手掛りに滴翠園の築造年代を考察しているが<sup>2</sup>、《大阪市美術館本》(田万家本)に描かれた滴翠園の前身庭園および楼閣建物の存在をみおとしている。ここでは、二条城築造後の景観を描いた第二期洛中洛外園に属する《勝興寺本》と《大阪市美術館本》をとりあげて、築造年代を考察する。

《勝興寺本》の景観年代は、再建のなった方広寺大仏殿が描かれ、同寺鐘楼が描かれていないことから、慶長16

図3 《勝興寺本》

図4 《大阪市美術館本》

年(1611)と元和元年(1615)の間に推定されている(日本絵風説集成第11巻「洛中洛外」講談社、1978年)。左隻左下隅に描かれた西本願寺の東南隅をみると、隅にとりつく二層の建物と鐘楼が描かれるだけで、飛雲閣を思わせる建物はもちろん、池や庭園らしい木立なども全く描かれていない(図3)。一方、《大阪市美術館本》の景観年代は、内裏の形態と焼失以前の西本願寺の伽藍配置から、慶長19年(1614)と元和3年(1617)の間に推定されている(上掲書)。こちらには、鐘楼の南に平屋の建物が描かれ、さらにはその南に圓池が描かれている(図4)。圓池は、堰川から導水したのであろう、東から直線的な水路が引き込まれる。北岸は、この水路北岸を延長したかたちで直線状にのびる。また、池の南岸には出島(または中島)とみられる突出部がある。この出島の東・北・西の護岸も直線状を呈し、池北岸からは木製反橋が架かる。さらに、この出島上には二層の楼閣建物が建つ。この出島西方の池南岸および西岸の護岸線は曲線を描き、池全体としては直線的な護岸と曲線的なそれとが併用されていることがわかる。《大阪市美術館本》に描かれたこの池を中心とする庭園が滴翠園の前身であり、楼閣建物が飛雲閣そのものではないにしても、少なくともその前身建物であることはあきらかであろう。

以上の結果、飛雲閣の前身建物とそれをめぐる庭園が西本願寺東南隅のこの場所に築造されたのは、両園の景観年代に関する上記の推定が正しいとの前提に立てば、元和元年(1615)から同3年(1617)の間に統れる。また、小堀遠州が直線的なデザインを庭園に導入は始めたのがこの時期であり、この庭園には時代の先端を行くデザインが採用されていたといえる。さらに、反橋の存在は池での舟遊びがなされた可能性が高いことを示し、描かれた楼閣建物にも飛雲閣同様の舟入りの施設があつた可能性を示唆している。

(小野健吉／平城宮跡発掘調査部)

図2 本願寺滴翠園平面図

## 滋賀県の近世民家

**調査・研究の経緯** 平成7年度から3ヶ年計画で、滋賀県近世民家調査をおこなっている。滋賀県の近世民家に関する先行研究としては『滋賀県緊急民家調査』(滋賀県教育委員会、昭和41~43年)があるが<sup>5</sup>、おもに近世中期までの民家を対象とした調査報告であり、近世末期、あるいは近世の伝統を鮮明に継承した近代初期の造構についてはとりあげられていない。また、近年の都市化の進行や生活様式の変化により、滋賀県でも近世民家の造構は急速に減少してきている。このような現状を踏まえて、全県下での調査が、県教育委員会により再度企画された。調査委員会は奈文研の建造物研究室を中心に、室谷誠一(福井工業大学教授)、吉見静子(岐阜女子大学教授)、山岸常人(京都大学助教授)の各氏を迎えて構成された。また、委員長は建造物研究室長がこれにあたる。

平成7年度は市町村主体の一回調査(所在調査)を実施し、50市町村で805件2095棟がリストアップされた。これをもとに、委員会で2次調査(詳細調査)対象を選びだし、13町の50件63棟について、調書作成、史料収集、聞き取り、平面実測、断面実測、敷地内配置、写真撮影などをおこなった。平成8年度は、36市町村の112件119棟について、5回に分けて2次調査を実施した。各回の日程と対象地域を表に示す。

**近世の滋賀** 滋賀県は周囲を山地に囲まれ、面積の6分の1を占める琵琶湖がその中央にあって、湖北・湖東・湖南・湖西の4地方に分ける。近世には湖東の彦根藩の他に大藩ではなく、幕府領・他国大名領・旗本領・寺領な

日 程	対象市町村と2次調査件数
7/22-26	彦根市 7 永源寺町 3 愛東町 2 湖東町 1 鞍莊町 4 愛知川町 1 豊郷町 1 甲良町 3 多賀町 2 米原町 4
8/5-9	長浜市 6 山東町 2 伊吹町 1 浅井町 2 西浅井町 3 虎姫町 2 虎北町 4 ヤクノ町 3 今津町 3 別所町 3
9/9-13	大津市 9 草津市 2 守山市 3 志賀町 4 信楽町 2 宝篋川町 3 高島町 2 朽木村 2
10/21-23	八日市町 1 安土町 5 莲生町 3 日野町 5
11/18-20	近江八幡市 4 中主町 3 五個荘町 3 龍登川町 4

どがモザイク状に入り交じる複雑な支配をうけた。「近江石帳」(文政6年)は、近江84万石を248家が分けあう様子を伝えている。一方、滋賀県は近畿と東海・北陸を結ぶ交通の要地でもある。東海道・中山道・北国街道・西近江路などの街道が整備され、琵琶湖の水運は沿岸各地を密接に結びつけた。さらには近江商人の活躍により物資・情報の伝達は活発で、封建的閉鎖性とは無縁な土地柄であったといえる。

このような地域的特性は、民家の様態に大きな影響を及ぼしている。地方ごとの特色に、周辺地域との交流の影響が複雑に組みあわされて、多様な形態をみせるのが滋賀県の民家といえる。ここでは平成8年度の2次調査対象から、特徴的な建物事例の概要を報告する。

**西浅井町・HT家住宅** 入母屋造、茅葺、妻入の小規模民家である。三和土仕上の土間、ニュウジ(モミガラ・ムシロ敷の土座)のダイドコロ、床上の座敷・寝間という古い空間構成をのこす。この家の土間は下足では決して入らず、掃除は雜巾掛け、日常はメザラ(竹簀子)でわたる。湖北地方東部を代表する余糸型の発展形と位置づけられるが、食い違いの平面や、土間に掛けた十文字梁の交点に柱を立てるのは、越前地方の影響である。創建を示す資料はないが、19世紀前半の造構であろう。

長浜・Y邸家 平面 1:300

朽木・S邸家 座敷

朽木・S邸家 平面 1:300

長浜・Y邸家 座敷・仏間境に立つ柱

**今津町・Y邸家住宅** 入母屋造、茅葺（鉄板被せ）、平入の建物で、湖北地方西部を代表する大浦型の典型例である。平面は桁行方向に3分割し、前側全面に通した土間の中央部を入口とする。居室は2列×3室で、右手から座敷と寝室、ダイ、ダイドコロとならぶ。前側の土間は入口左手を食堂、右手を寝室とするために床を張った。ダイドコロ奥も作業用の土間であった。明治中期の移築と伝えられ、前身建物は19世紀中頃の創建であろう。

**長浜市・Y邸家住宅** 中世に遡る歴史をもつ土豪の屋敷である。敷地外周には土塁・濠が残り、敷地内に自家の菩提寺をもつ。入母屋造、茅葺、平入の主屋は、数度の改修を受けているが、床上居室部の中央棟通りに、1間おきに柱を建てる古い形式が確認された（上図参照）。当初平面は整形六間取に復原される。創建を示す資料はないが、18世紀前半に週りうる造構である。

**朽木村・S邸家住宅** 寄棟造、茅葺、平入の建物で、食違いの四間取平面をもつ。座敷は高い根太天井で、内法以上を2段の貫をみせた板壁とする独特の意匠である。 NANDO（寝室）は当初3間2室でダイドコロ側から入るが、1.5間の両端半間を板戸、中央半間を板壁とする特徴ある「納戸構え」に復原される。年代を示す資料はないが、集落内の同形式の建物（文政年間）との比較から19世紀初頭の創建と考えられる。里内他地域には類例をみないが、平面形式は京都府の「北山型」に属する。ただし小屋構造は又首組で、北山型に特徴的なオダチ・トリイ組の形式はとらない。朽木村でも最も奥まった集落に

近江八幡・Y邸家 平面 1:200

あり、山越えて京都府美山町に至る。丹波地方の山村民家との影響関係をうかがわせる造構である。

**近江八幡市・Y邸家住宅** 切妻造、桟瓦葺、平入の町家で、「耐震構造」の伝承がある。間口6.5間、奥行8.5間に達する大規模な建物であるが、セイの高い差物を多用し、二階床組の大引・根太で固めることによって、剛性を高めている。また、土間境では内法以上の壁に半間ごとに束を立て、貫を多用する様子もみられる。食違いの平面も建物の変形を減じようとしたのであろうか。寛政6年（1794）の棟札が残るが、諸室の意匠はこれより新しく、小屋組にも改造の痕跡がある。創建は18世紀末で、19世紀中葉に改修を受けた造構とみるべきであろう。

**おわりに** 平成7～8年度の2ヶ年で、162件の詳細調査をおこなった。対象とした建物の大半は良好に維持されており、往時の姿と生活様式をよく伝えている。江戸時代中期に遡る可能性のある造構も発見され、予想以上の成果が得られた。また民家を現代生活に適合させるための工夫が随所にみられ、民家造構の将来を考える上で貴重な情報が収集できたものと考えている。一方、調査後に解体された建物があったことは残念である。1次調査の2割という限られた件数の調査ではあるが、滋賀県における近世民家の多様な展開をみることができた。この「多様性」を、平面・構造の両面から系統立てて理解していく作業が、今後の課題となるであろう。平成9年度は補足調査とテーマ別調査をおこない、年度末には報告書の刊行を予定している。

（長尾 充／建造物研究室）

## 「文化的景観」研究の課題

**文化的景観の定義** 世界遺産における文化的景観は3つのかテゴリーに分類される。第一は、公園や庭園のように「人間の意志によって設計され、意識的に創り出された景観」である。第二は「有機的に進化してきた景観」で、「進化の過程が過去のある時期に突然あるいは時代を越えて終止している残存景観」と「伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を保ち、進化の過程が今なお進行中である雑種中の景観」に分けられ、後者の事例としては、フィリピン、イフガオ地方の高地性棚田景観がある(1995年登録)。第三は自然的要素の強力な宗教的、芸術的または文化的な関連性によって定義される景観で「文化的複合景観」と訳される。我国の和歌や文学にあらわれる「名勝」もこのカテゴリーに入るが、棚田景観や「名勝」に指定されていない物件については、保存が危ぶまれており、以下に若干の研究課題を記す。

**日本の棚田をめぐる状況** 近年、写真集『たんぽ一めぐる季節の物語』(NTT出版、1994年)が話題に上るなど、棚田については一般の人々の間でも関心が高まっている。棚田の審美的な形態が稻作にかけた人々の営為を伝え、見る人つまり非耕作者の心を引きつけるのである。ところが、棚田の多くは大型機械化のできない立地条件にあり、耕作者に過酷な労働を強いている。棚田は農山村地帯に分布し、耕作者の高齢化、地域社会の人口減少、減反による耕作放棄地の拡大など、社会環境・農業構造の変化を被って、その保全がきわめて難しい状況であるが、具体的な保護の取り組みもいくつか報告されている。第一は生活排水の流入しない安全性などを売り物としたブランド化により農業経営を安定させ、景観を維持しようというものである。第二は棚田での耕作作業等を都市住民に開放し、地域社会との交流の場として保存をはかる試みなどである。後者の場合、棚田の稲作風景は保持できても、農業景観は都市住民のためのレクリエーション景観に変化する。保存するのは、地形の形態か、稲作とともにう農業景観か、景観の意味を含む社会システムかという問題を、農業経営者あるいは都市住民

がそれぞれ生活者としての視点から論じる必要がある。

**万葉ゆかりの地の現在** 万葉集に詠まれた和歌山市の景勝地「和歌の浦」では、市末川河口に架けられた江戸時代末の石造アーチ橋である不老橋の隣に車道橋の建設が計画されたが、住民団体はこれを歴史的景観の破壊であるとして、公金の支出差し止めを求める訴訟を起こした。県側は海苔漁業と観光の沈没からの脱却のため、体系的な交通システムの確立が必要で、新しい橋は新たな魅力の創造と主張した。また、歴史的風土特別保存地区の大和三山では、松が枯くい木などの被害ではなく立ち枯れ状態となり、県側は松にかわってサクラやモミジを植え、四季を通じて楽しめる山にする計画をまとめたところ、万葉学者らは古代人の詠んだ三山は穩やかな緑であるから常緑樹を植えるべきと主張し、風景観の違いを鮮明にした。さらに、万葉歌人志貴皇子の陵墓とされる田原西陵、古事記編纂者太安麻呂の墓などが茶畠の中に点在する奈良市東部の田原にはヘリポートが計画され、静寂と歴史的環境を守ろうとする反対運動があった。これらの3例は、地域の将来像をどのように合意形成し、景観をどのようにコントロールしていくかという広域の景勝地保存の課題を示すものといえよう。

**研究の課題** 造跡、遺物、歴史的建造物など文化遺産は、その価値を理解しやすいが、棚田景観や文学に表現された景観については、情緒的な侧面が強く、社会的、経済的な要請に対抗し得るだけの保存理論が構築されてこなかった。風景の科学的な研究では、風土を自然と歴史に分け、さらに、目に見える景観構成要素のみを分類、数量化して、いかにも客観的な手法で風景を評価する方法をとってきた。そのため文学というメディアを通して形成されたイメージなどは、近年まで景観研究の対象外であった。これらを文化的景観の対象とし、自然と歴史を一体的に把握する研究手法の開発が急がれよう。

(内田和伸／平成宮路発掘調査部)

## 「文化的景観」研究の課題

**文化的景観の定義** 世界遺産における文化的景観は3つのかテゴリーに分類される。第一は、公園や庭園のように「人間の意志によって設計され、意識的に創り出された景観」である。第二は「有機的に進化してきた景観」で、「進化の過程が過去のある時期に突然あるいは時代を越えて終止している残存景観」と「伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を保ち、進化の過程が今なお進行中である継続中の景観」に分けられ、後者の事例としては、フィリピン、イフガオ地方の高地性棚田景観がある(1995年登録)。第三は自然的要素の強力な宗教的、芸術的または文化的な関連性によって定義される景観で「文化的複合景観」と訳される。我国の和歌や文学にあらわれる「名勝」もこのカテゴリーに入るが、棚田景観や「名勝」に指定されていない物件については、保存が危ぶまれており、以下に若干の研究課題を記す。

**日本の棚田をめぐる状況** 近年、写真集『たんぽ一めぐる季節の物語』(NTT出版、1994年)が話題に上るなど、棚田については一般の人々の間でも関心が高まっている。棚田の審美的な形態が稲作にかけた人々の営為を伝え、見る人つまり非耕作者の心を引きつけるのである。ところが、棚田の多くは大型機械化のできない立地条件があり、耕作者に過酷な労働を強いている。棚田は農山村地域に分布し、耕作者の高齢化、地域社会の人口減少、減反による耕作放棄地の拡大など、社会環境・農業構造の変化を被って、その保全がきわめて難しい状況であるが、具体的な保護の取り組みもいくつか報告されている。第一は生活排水の流入しない安全性などを売り物としたブランド化により農業経営を安定させ、景観を維持しようというものである。第二は棚田での耕作作業等を都市住民に開放し、地域社会との交流の場として保存をはかる試みなどである。後者の場合、棚田の稲作風景は保持できても、農業景観は都市住民のためのレクリエーション景観に変化する。保存するのは、地形の形態か、稲作とともにう農業景観か、景観の意味を含む社会システムかという問題を、農業経営者あるいは都市住民

がそれぞれ生活者としての視点から論じる必要がある。

**万葉ゆかりの地の現在** 万葉集に詠まれた和歌山市の景勝地「和歌の浦」では、市末川河口に架けられた江戸時代末の石造アーチ橋である不老橋の隣に車道橋の建設が計画されたが、住民団体はこれを歴史的景観の破壊であるとして、公金の支出差し止めを求める訴訟を起こした。県側は海苔漁業と観光の沈没からの脱却のため、体系统的な交通システムの確立が必要で、新しい橋は新たな魅力の創造と主張した。また、歴史的風土特別保存地区の大和三山では、松が松くい虫などの被害でほとんど立ち枯れ状態となり、県側は松にかわってサクラやモミジを植え、四季を通じて楽しめる山にする計画をまとめたところ、万葉学者らは古代人の詠んだ三山は松やかな緑であるから常緑樹を植えるべきと主張し、風景観の違いを鮮明にした。さらに、万葉歌人志貴皇子の陵墓とされる田原西陵、古事記編纂者太安麻呂の墓などが茶畠の中に点在する奈良市東部の田原にはヘリポートが計画され、静寂と歴史的環境を守ろうとする反対運動があった。これらの3例は、地域の将来像をどのように合意形成し、景観をどのようにコントロールしていくかという広域の景勝地保存の課題を示すものといえよう。

**研究の課題** 造跡、遺物、歴史的建造物など文化遺産は、その価値を理解しやすいが、棚田景観や文学に表現された景観については、情緒的な侧面が強く、社会的、経済的な要請に対抗し得るだけの保存理論が構築されてこなかった。風景の科学的な研究では、風土を自然と歴史に分け、さらに、目に見える景観構成要素のみを分類、数量化して、いかにも客観的な手法で風景を評価する方法をとってきた。そのため文学というメディアを通して形成されたイメージなどは、近年まで景観研究の対象外であった。これらを文化的景観の対象とし、自然と歴史を一体的に把握する研究手法の開発が急がれよう。

(内田和伸／平成宮跡発掘調査部)

## 遺跡探査で何がわかるか

遺跡探査という場合、通常は地下に埋没している遺構、遺物を地上から非破壊の方法で推定することをいう。しかし、最近では地上に遺存する石造、木造の建造物の内部診断や、発掘で検出された遺構の性格を推定する化学的方法もそれに含めて、文化財探査というように、ひろく理解することが始まっている。

地下の遺構、遺物を推定する物理探査の方法には各種あり、そのときの対象によって採用する方法も選択されるが、できる限り複数の測定原理の異なる方法を用いて、それらで得た結果を照合することが望ましく、それによって探査成果の信頼度もたがまる。

いずれの物理探査でも、求めているのは「土」と「土」の何らかの差異である。それを知ることにより、周囲と異なる土の範囲、形態や深さを限定する。あるいは、土中の「異物」の存在を推定する。この場合の異物としては、周囲の土と大きく質が違う、金属や空洞、孤立した大きな石などがあげられる。

土の判別が最も困難な対象例としては柱穴や竪穴住居がある。柱穴では、掘削に際しては内部の土は周辺に一時おき、柱を立てた後にその土を再度埋め戻す。すなわち、柱穴の内部と周囲の土には基本的差がない。竪穴住居でも、通常、住居の中に堆積している土は周囲より徐々にもたらされたもので、内外の土質の差は小さいといえる。

物理探査の方法の中で、電気探査では、地下に電流を流すことにより土を判別する。周囲と異なる土質状態にある部分では、例えば濁や溝がある個所ではそのためには水分が多く、したがって比抵抗が低かったり、礫や砂などが多ければ抵抗が高くなるわけである。

磁気探査では、土と土の差異は、土壤帯磁率の違いや熱残留磁気を帯びている個所を限定することにより求められる。帯磁率をみると、土壤の内外で鉄など磁性体の含有量に差があれば、その違いで土が判別できると考える。熱残留磁気を帯びた個所は、地磁気に大きな影響を与えており、地磁気の異常な部分として観測される。

地中レーダー探査では、電波を地中へ強制的に送り込

み、その反射、屈折、減衰の状態から、土の差異や異物の存在を知る。電波は媒質の違う部分から多く反射する。金属や空洞あるいは孤立した大きな石など、周囲の土質と質が著しく異なる個所では大きな反射がおこり、土層が違う境界面でも反射する。

以上のように、各種探査方法はそれぞれ異なる物理的原因から土を判別したり、異物の存在を推定する。言葉を換えていえば、求めているのは何らかの要素で判別できた現象や、その規模や形態が知られるのみで、如何なる遺構であるのかの性格、どのような材質の遺物であるのかの判断は、遺跡調査にたずさわる者がしなくてはならない。

そのためには、調査者は探査で限定できた要因が、何に起因する可能性があるかを知る必要がある。すなわち、各探査の方法で求めている物理的要素から考えられる可能性を限定しなくてはならない。たとえば、線状に連続する幅狭い土質の異なる構造が捉えられた場合、電気探査でみたとき、その部分が低比抵抗であれば溝や濠である可能性があるし、高比抵抗であれば道路とか石からなる構造物を考えなくてはならないだろう。

このような探査の方法や原理を理解することのはかに、探査を採用した遺跡における考古学的基礎調査を照合することも重要である。散布している遺物からの年代推定や立地と地形観察により、遺跡の性格も限定して考えられる。周辺遺跡における既往の調査成果を検討することも、欠かすことのできない基礎作業である。

ある現場へ臨んで探査を採用する実際においては、当然ながら、目的をもってそれをおこなう。古墳であれば、主体部を探るとか、周濠の規模や形態を求めるとか、葺石の存在位置を知りたいなどである。この例では、求める対象がある概略の位置はわかるし、測定すべき範囲も限定できる。

しかし、住居跡すなわち集落を対象とする場合には、個々の住居の位置は予め推定できない。また、それ以外の溝や土坑など各種の遺構が存在することも仮定しておかなくてはならない。

一度の探査で、多数の性格の異なる遺構や遺物を対象とするのは難しいといえるのである。

(西村 康／埋蔵文化財センター)

## 発掘調査支援機械システムの試作研究

本研究は、遺跡発掘作業の「迅速化」「省力化」「精密化」を図ることを目的として、発掘調査支援に有効な機械システムを新たに考案し、試作と実験をおこなうものである。平成5年度から「掘削」と「測定」の2点に重点を置いて研究を進めている。

**掘削機械** これまでに、遺物包含層の掘削を対象とし、平刃やワイヤーブラシなどを用いた回転掘削刃および、排土処理装置を試作して実験をおこない、その性能と問題点について検討を進めてきた。これらの検討の中で、1)掘削中に出現する遺物を損傷または破壊してしまう可能性があること、2)掘削後の遺構面の状態が従来の手堀りによる状態と異なること、の2点が課題となつた。そこで遺物を傷つけず、掘削後、遺構表面を確認しやすくなる方法として、手による掘削動作をそのまま機械で実現する方向を検討した。

本体内部には、中子を介して前後に往復運動する掘削刃が4本設置されており、刃先は掘削面と一定の角度で接する。実験上、動力源(AC100V)を圧縮空気とした。空気圧シンクダの動作により、掘削、掘削刃跳ね上げ、排土ワイヤーの操作をおこなうが、これらの制御は本体に搭載されたマイコンによる。掘削実験では、従来の手作業とほとんど変わらない掘削面を再現できたが、凹凸の激しい掘削面では対応が難しい問題点が残り、掘削刃押し付け力の自動調整機構の付加などが課題となつた。

また、遺構面清掃にともなう排土の処理や、降雨後遺構上に残存する水の速やかな排出など、掘削作業に付随する作業の機械力による効率化も試みている。遺跡発掘作業全体の支援のためには、掘削作業以外での効率化を

いかに図るかを再検討することも重要な課題である。

(内田昭人／埋蔵文化財センター)

**発掘調査支援データベースシステム** 従来より開発を進めてきた本システムは、現状で「CG平板測量システム」と「遺構データ管理システム」の2つのサブシステムからなる構成をとっている。主な使用機器は、発掘現場作業用の自動追尾トータルステーション、ペンノート型パソコン、屋内作業用のデスクトップ型パソコンである。

CG平板測量システムは、従来、調査員の実測や空中写真によって作成してきた遺構図を、発掘現場において、直接、3次元データとしてモニタリングし、デジタルマップを作成するシステムである。また、同時に遺物の取上げ位置や属性情報などのデータも記録する。

遺構データ管理システムは、発掘現場で採取したデジタルデータを管理するものである。地形図や既存の発掘調査の成果(遺構図、発掘調査所見、遺物データ、画像データなど)をあらかじめ入力しておくことによって、新たなデータと既往調査の関係を即座に確認することができ、日々の調査の検討に役立てるものである。

一般に普及率の高いMS-Windows用のCADをシステム全体の中心にしていることから汎用性は高く、必要なアドインソフトウェアの開発をおこなうことで様々な発展の可能性をもっている。たとえば、遺構のデジタルマッピングデータをもとに、CGによる発掘遺跡復原のシミュレーション、整備基本計画の作成や造成土量の計算など、遺跡復原整備設計支援ツールを加えたシステムに発展させるなど、発掘調査支援の範囲を広げることができる。現在、システム自体やGUIを改良とともに、発掘調査現場での段取りや調査の進行状況において、このシステムをどの過程にどのようなかたちで導入すれば、より有効な発掘調査支援をおこなえるのかを検証している。

(平澤 賢／平城宮跡発掘調査部)



掘削実験装置の外観



装置内掘削刃部



「CG平板測量システム」機器



測量準備状態

## 文化財建造物写真ガラス乾板のデジタル・データ化

奈文研では、かつて文化庁建造物課が保管していた文化財建造物の写真ガラス乾板を約32,000枚所有している。

写真是戦前から昭和30年代に撮影されたもので、なかには戦災等で焼失した建物の写真、過去の修理前・修理中の写真など、現在ではみられない姿を撮影したものがあり、これら乾板は高い資料価値をもっている。しかし、乾板は当研究所に移された時点で、すでにガラスが割れたり、画面の剥離、銀化等、劣化が甚だしかった。現在は空調設備の整った保管庫に保存しているものの、今後とも乾板の劣化を完全にくいとめることは不可能である。

乾板の整理・保管に際しては、台帳の作成と同時に35ミリ撮影をおこなって検索用アルバムを作成した。現段階では、台帳・アルバムを一般には公開していないが、関係機関からの要請があれば、必要な写真的焼き付けを提供している。焼き付けは、ガラス乾板からの密着焼き付けをおこなっているが、ガラスが脆弱なうえに、原板が四ツ切もしくはキヤビネサイズと大きく、その作業を慎重におこなっているものの、作業時における破損の危険性が大きい。

このような状況のもと、将来的な乾板の劣化、焼き付け作業時の破損を回避するため、さらには、資料の公開を目指して、ガラス乾板のCD-ROM化に着手し、本年度は約700枚の乾板をデータ化した。

画像データの保存形式は、現在広く一般に利用されているTIFF形式とし、原板がすべてモノクロ写真であるところから、モノクログレースケール(解像度は、フォトCDの64ピース相当)が最適と判断した。今後、ハードやソフトが進化しても、データはそのまま利用可能である。

デジタルデータから得られる精度の高い焼き付けは、フィルム出力したもののプリントである。フィルムを作成することによって、大きなサイズへの引き伸ばしにも対応できる。また、デジタルデータからのプリンター出力についても、プリンターの性能に大きく左右されるが、レーザー露光熱現像転写方式のプリンターを使用すれば、再現域が若干狭いものの、原板からの焼き付けに近い調質が得られる。したがって、今後原板の劣化が

上：乾板からの焼き付け

中：デジタルデータをフィルム出力したものの焼き付け

下：デジタルデータからのプリンター出力したもの：プリンターはビクトログラフィーを使用  
(いずれも1/2縮小)

進んでも、このデータが保存されている限りは半永久的な資料となり得る。今後も、この作業を継続し、データ検索システムにのせたうえで、関係機関には公開をおこなって、資料要求にも応える予定である。

(井上直夫・島田敏男／飛鳥春原宮跡発掘調査部)

## 華中・華北の後期旧石器文化

平成8年12月、中国江蘇省の蘇州市博物館を訪れる機会に恵まれ、太湖三山島の旧石器を見学することができた。この石器については、陳淳氏らが、フリントなどを用いたもので、小形の剥片や石核が多く、狹義の石器には削器、尖頭石器、石錐、敲打器があること、多くの剥片に鋸歯状の使用痕がみられる点が特徴と報告している。今回の見学でも、一般的に小形であり、剥片の多くには打面調整や頭部調整、さらには二次加工もほとんどみることができないことを確認した。さまざまな調整を用いない単純な手法で剥離した剥片を、そのまま利用するという石器使用のあり方を推定できる。筆者がかつて実際に観察した資料では、広西チワン族自治区白蓮洞、台湾・八仙洞の石器群と類似していた。また、江西省仙人洞下層や福建省漳州などの石器群も同様の特徴をもつようで、この種の石器群は、中国大陆の華中以南の海寄りの地域に展開しているといえる。ここでは、これらを華中型石器群と仮称する。この華中型石器群は、発達した骨角器が共伴した可能性が高く、こうした石器の単純さは、石器への依存度が低く、石器の役割が比較的限定されていたことを反映していると考えている。華中型石器群の年代は、白蓮洞や仙人洞の年代測定値から約2万年前以後、後期旧石器時代末である。この時期、淮河—秦嶺山脈以北では細石刃文化が展開する。細石刃文化では、石器は華中型石器群と大きく異なり、様々な器種に分化しており、道具の中できわめて大きな位置を占めていたとみなすことができる。

こうした南北の石器の差はなぜ生じたのだろうか。一つには、それぞれの石器群がおかれた環境差と、それに起因する生活様式の違いによると考えている。華中型石器群が分布する地域は、より低緯度で、海にも近いことから、比較的の温暖で氷期の影響も少なく、森林が優勢であったとされている。華中型石器群の遺跡では、遺物量の比較的多い洞穴遺跡が多く、出土する動物種も多種で、食用にした淡水性巻貝の貝殻をもつ例もしばしばみられる。これらから、さまざまな資源を利用しつつ、比較的長期にわたる固定的なベースキャンプを中心とした生活

様式を想定できる。比較的多種の資源が分散して存在していたと考えられる森林環境下で、華中型石器群を残した人びとは、ある特定の資源を偏重することなく、多様な資源を利用することで、さまざまな危機を回避する戦略を選んだようである。逆に、細石刃文化が盛行した地域は、最終氷期の影響が強く、乾燥化が進み、草原が優勢であったところである。細石刃文化では、河北省の燕山南麓や山東・江蘇両省の馬陵山、山西省の下川など、小規模な遺跡が密集して分布するケースが多く、遺跡からはシカ・ウマ・ガゼルなど、比較的限定された種類の動物骨が出土する。これらから、細石刃文化の集団は、特定の動物の狩猟に依存、頻繁な移動を繰り返す生活を送っていたと判断している。草原という、少種の資源がパッチ状に分布したであろう環境下で、細石刃文化の人びとは、少数の資源に依存度をため、これを効率的に利用する戦略をとったと考えられる。こうした生業様式の差が、石器・石材に対する依存度の差を生み、大きな外見上の差異が顕示されたのだろう。

ここで興味深いのは、山東省の泰山西南麓や河北省黄骅などから、華中型に類似した石器群が検出されていることである。後期旧石器時代末期に、細石刃文化が展開していた地域の一部で、細石刃文化から華中型石器群への転換、つまり生活様式の転換がおこなわれていた可能性を示すからである。また最近、華中型石器群・細石刃文化いずれでも、1万年前以前にさかのぼるきわめて古い土器が共伴することが判明してきた。華北の新石器文化の源流がどちらにあるかを考える上でも、この現象は重要であろう。華中・華北の後期旧石器文化には多くの未解決で興味深い問題が残っている。今後とも、研究を続けたい。

(加藤真二 平城宮跡発掘調査部)



関連遺跡分布図

# 古代壁画の色と再現

中国古墳壁画の調査・保存に関する  
中日共同研究

中国唐代の古墳壁画は、地下を掘りだしてつくった墓道や墓室の壁面に描かれている。墓道の壁面には漆喰を塗って、その上に絵を描いている。なかには、漆喰を塗らずに土面にじかに絵を描いている例もあるという。墓室には、墓道と同じ手法で絵を描いている例もあるが、多くの場合、墓室は塙を積み上げてつくっており、塙の表面に漆喰を塗り、絵を描いている。唐代の古墳壁画では、房陵公主、永泰公主、章懷太子、懿德太子などの墓から発見されたものがよく知られている。

陝西省では、こうした古墳壁画の保存について、壁画面を薄く剥ぎ取って室内に持ち帰り保存する方式をとっている。70年ほど前からこの手法で剥ぎ取り保存しており、現在までおよそ800点の壁画を保存し、あるいは博物館で展示公開している。ヨーロッパでも、フレスコ画を同様の手法で剥ぎ取り、保存してきたが、最近ではこの種の保存作業はあまりみられないようである。

陝西省考古研究所では、恵莊太子墓（玄宗皇帝の第三子）の発掘調査と壁画の剥ぎ取りを実施した。図1は、発掘調査中の恵莊太子墓の全景、図2は、墓道内の壁画の剥ぎ取り状況を示す。桃ヤニ（桃脱）を水で溶いた接着剤を塗布し、布を張りつけて画面を補強し、剥ぎ取る。この接着剤は水に可溶なので、必要に応じて、一度張りつけた布を、容易に取りはずすことができる。

古墳の墓道は、当初から土で埋めもどしている。そのため、壁画は土中に埋まった状態にあり、やや湿潤な環

境を保っているのが普通である。土中では光を受けるとともに、温度も低く安定しているので、顔料に対しての保存環境はむしろ良好といえよう。しかし、いったん掘り出され、室内に運ばれた段階から、褪色がはじまり、顔料が剥落するものもある。

当研究所は、平成8年度から中国・陝西省文物管理局・陝西歴史博物館・陝西省考古研究所・陝西省文物保護中心と「中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究」（代表者・田中琢）に関する共同研究をおこなっている。壁画の保存問題は、なんに保存環境の制御というばかりでなく、保存技術や保存材料そのものの改善改良、あるいは開発も必要である。

共同研究では、以下のような研究課題をとりあげることにした。すなわち、①光、とくに紫外線の顔料に及ぼす影響の究明、紫外線に対する抵抗力の小さい顔料、逆に比較的の抵抗力がある顔料などの確認をおこなうこと、②壁画の下地である漆喰は、長年月の間に地下水などの影響を受けて化学的变化を起こす可能性があり、化学的な変化が顔料に及ぼす化学的影響がありえるかどうかの実験的解析、③壁画は単色で描くばかりではない。複数の色を混ぜた混色も使う。混色の褪色に関するメカニズムの解明、④顔料の剥落が顔料の新しい層を披瀝し、さらに褪色を促進する。つまり、顔料の剥落が壁画全体の色相や色調を微妙に変化させることがある。剥落の対策の研究も重要課題である。

褪色試験に先立ち、まず從来の古代壁画顔料の同定結果をもとにし、また美術史関連資料などを参考にしながら、古代に使われていたであろうすべての顔料をリストアップした。そして、実際に絵を描く要領で、方形の和紙片（縦6cm×横5cm）に各種の顔料を塗り、試験用の色見本を作成した。これらの試験片は、研究室内で暴露し、褪色状況を観察し、逐次分析することにしている。色見本は、同一のものを2セット作成し、中国陝西省と当研究所において暴露し、褪色状況の観察と逐次分析をおこなう。また、②の問題点を究明するため、板に漆喰を塗り、その上に各種の顔料を塗り、和紙の色見本と同様に褪色試験を実施中である。

わが国における古代壁画の代表例は、奈良県法隆寺金堂の壁画であろう。1990年、法隆寺のものとはほぼ同時期の古代寺院壁画が鳥取県上淀庵寺跡から出土した。それ

図1 発掘中の恵莊太子墓

表1 古代の使用顔料一覧(山崎一雄氏作成の表に追加)

種類	九州装飾古墳	高松塚	法隆寺	上淀庵寺
赤	不純なベンガラ 朱	ベンガラ 朱	ベンガラ 鉛丹	ベンガラ 鉛丹
黄	黄色粘土	黄土	黄土 密陀僧	黄土 密陀僧?
緑	緑色岩石粉末	緑青	緑青	緑青
青	—	群青	群青	群青
白	白色粘土	不明 下地漆喰	白土	白土
黒	炭素 マンガン鉱物	墨	墨	墨

表2 各種顔料の熱変化

顔料名	化学成分	火災による変化
ベンガラ 朱・鉛丹・代萩 (鉛丹)	鉻酸鉄( $Fe_2O_3$ )	不变(鉻酸鉄)
黄土 (密陀僧)	四三酸化鉛( $Pb_3O_4$ ) 硫酸水銀(HgS)	密陀僧(PbO)に変化 揮発分解し、消失する
緑青	含水鉻酸鉄( $Fe_2O_3 \cdot nH_2O$ ) 一酸化鉛(PbO)	水分を失い、赤色に変化 溶融するが、変色せず
群青	塩基性炭酸銅 ( $Cu_2O \cdot Cu(OH)_2$ ) 鉱物名:孔雀石	酸化第一鋼、酸化第二鋼
墨	炭素	消失する
白土	珪酸アルミニウム	水分を失うが、外見は不变

図2 惠花太子墓壁画顔料作業室

までは日本の古代仏教壁画の道筋は法隆寺金堂壁画しかなく、数少ない壁画資料の発見となつた。しかしながら、上淀庵寺の壁画は火災のために熱を受けて変色したものであり、中国の古墳壁画にみられるような、長年月の時空を経て褪色したものとは異なっている。

褐色した顔料の分析をもとに当初の色の再現を試みることも、壁画研究には重要なことである。第一段階として、上淀庵寺出土の壁画片を分析試料として顔料の同定を試みた。顔料は熱をうけると変質し、あるいは消失する。上淀庵寺出土の壁画片からは、鉄や酸化鉄を検出した。古代の赤色顔料には、酸化鉄を主体にしたベンガラがあり、それは熱をうけても変化することなく、安定した酸化鉄のままである。赤色顔料のうち、鉛丹は熱をうけると密陀僧に変化する。したがって、鉛成分を検出すれば、そこに鉛丹か密陀僧が存在したことがわかる。壁画のモチーフ別に美術史的な観点から検討して、いずれかを推定した。朱は揮発分解して消失するので、化学分析をしても主成分の水銀などを検出することはない。しかし、古代壁画の実例をもとに、あるいは美術史的な見地からすると、たとえば、神持像の髪部分には朱を塗っている例が多い。被災した像の髪部分から水銀を検出しなかつたことが、逆に朱の存在を示しているということもできる。

被災したものに限らず、分析化学だけでは壁画の同定

には限界がある。美術史や画家などとの共同作業によつてこそ、より確かな分析的研究を可能にする。その他の顔料についても同じように分析し、各分野との共同作業を得て、上淀庵寺出土壁画については、赤・黄・緑・青・白・黒の6系統9種類の顔料を同定することができた。

法隆寺金堂壁画では、金堂が焼損する前に、顔料の同定作業がおこなわれており、白・赤・黄・緑・青・紫・黒色の7系統11種類の顔料が確認されている。白色系の顔料では、白土(珪酸アルミニウム)・胡粉(炭酸カルシウム)の2種の顔料を同定している。以下、赤色系では朱(硫酸水銀)・鉛丹(四三酸化鉛)・ベンガラ(酸化鉄)の3種、黄色系では黄土(含水酸化鉄)・密陀僧(一酸化鉛)の2種、緑色系では岩緑青(塩基性炭酸銅)、青色系では岩群青(塩基性炭酸銅)、紫色系では明白ではないが、何らかの混合物である。黒色系では墨(炭素)が使用されていることを確認している。

日本の古墳壁画では、高松塚古墳の壁画が有名である。そのほか、装飾古墳にみられる壁画がある。とくに、九州北部地方に装飾古墳が集中して存在している。およそ、5世紀から6世紀にかけてつくられたものである。これらの装飾古墳をはじめ、極彩色の高松塚古墳壁画、法隆寺金堂壁画、そして、上淀庵寺出土壁画に認められた顔料を表1にまとめた。また、表2には、各種の顔料が熱を受けた場合の変化を示している。(沢田正昭/理歴文化財センター、田中琢磨/所長、町田聰/平城宮跡発掘調査部)

## アンコール遺跡群の調査

奈良国立文化財研究所は、文化庁が平成5年度より開始した「アンコール文化遺産保護共同研究事業」において、カンボジアでの現地調査と、日本における研究の実際を担当している。

事業を開始した当初の3年間は、予備調査の期間と位置づけて、現地調査では、諸外国を含む各調査隊がおこなっている現状の研究と実績を点検し、従来取り組んでいない課題、あるいは研究として希薄な点を洗いだし、独自に貢献できる項目の選定に努めてきた。

その結果、われわれの取り組む事業としては、当分の間、1)基準点測量や写真測量を含む測量調査、2)遺跡探査、3)柱穴など詳細な土壤判別が要求される精密発掘調査などに目標をおき、事業を推進することにしている。

遺跡探査では、乾期と雨期と季節を越えて実験測定を実施して、探査の実際における問題点をあきらかにしながら、探査成果も得ている。

ここで今までに採用した探査の方法は電気探査、磁気探査、地中レーダー探査である。

**電気探査** イギリスGeoscan社製のRM15型装置を用いた測定で、2極法を基本に検討した。乾期には地表面と上層50~60cm程度までが極度に乾燥しているために、電極と地面との十分なコンタクトがとれず、有効な測定はできない。しかし、雨期であれば目的通りの測定が可能なことが判明した。

**磁気探査** これもイギリスGeoscan社製の装置であるFM18型のラックスゲートGradiometerを採用した。磁気傾斜を求める本装置による測定では、遺跡が低緯度に位置するために、磁気異常の変化が小さく観測されることにまず気がついた。

改めて考えれば当然のことながら、測定には細心の注意が要求され、熟練した測定者でないと、信頼できる観測値が得られない点が注目される。

また、現地は雨期、乾期をとわず常時気温が高いので、その熱によりラックスゲートのセンサーとアンプは影響を受けることも注意される。そのために、測定値はドリフトして、短時間の測定でも変化する。

そして、このドリフトはどうやら直線状の変化ではなく、不規則であることも確認した。したがって、通常おこなう補正の方法は有効ではなく、独自の手法を用いる必要があった。

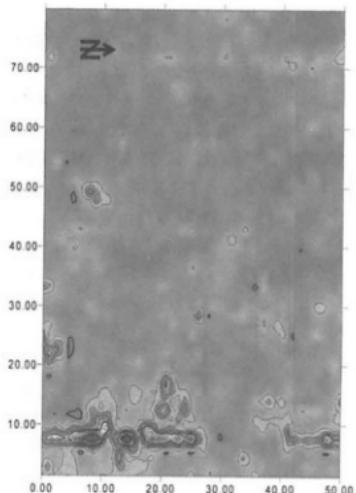
**地中レーダー探査** アメリカG.S.S.I.社製SIR-2型装置で、300MHzアンテナを用いて検討した。

この方法では、乾期のみの測定であるが、深さ約2m程度までであれば、有効な測定ができるることを認めた。また、乾期であっても石造の構造物が明瞭に捉えられることが確認できている。

測定の一例がスラ・スラン沐浴の西側における測定である(口絵参照)。ここでは、小規模な火葬墓を探すこと目的として実験的に探査したものであるが、結果には南北方向に連なる、反射の大きな構造物のあることを認めた。探査位置の北方で、先年、発掘調査をしたフランス隊の結果を参考にすると、この構造物は石組みの溝であることは、ほぼ間違いないといえる。

アンコール遺跡において、はじめて探査の方法で確実な遺構をあきらかにできたのである。

(西村 康/埋蔵文化財センター、杉山 洋/飛鳥資料館)



スラ・スラン沐浴西側での探査結果  
(地中レーダー平面図 20-30ns)

# II

## 事業の概要

<b>II-1. 調査と研究</b>	42
飛鳥藤原京の発掘調査	42
平城京の発掘調査	42
建造物の調査と研究	43
書跡資料の調査	43
埋蔵文化財センターの研究活動	44
国際学術交流	45
1. 国際学術交流の現状	45
2. 中国社会科学院との第2次友好共同研究	45
3. 唐大明宮含元殿の保存整備事業への協力	46
4. 遼寧省文物考古研究所との共同研究	46
5. 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究	47
6. アンコール文化遺産保護共同研究事業	47
在外研修の成果	50
公開講演会	51
研究集会	52
文部省科学研究費助成研究	54
学会・研究会等の活動	56
調査研究彙報	57
<b>II-2. 研修・指導と教育</b>	58
埋蔵文化財センターの研修と指導	58
京都大学大学院人間・環境学研究科	59
<b>II-3. 遺跡整備・復原事業と展示</b>	60
平城宮跡・藤原宮跡等の整備	60
1. 朱雀門の復原事業	60
2. 東院庭園の復原事業	61
3. 宮内省菜地跡および南門の復原事業	62
4. 第一次大極殿の基本設計と構造実験	63
5. 施設整備その他	64
飛鳥資料館特別展と山田寺回廊再現	65

## II-1. 調査と研究

### 飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥・藤原地域では1996年度に30件の発掘調査をおこなった。以下、主要な調査を概観する。

藤原宮関係の調査は7件。西方官衙南地区の調査（第82次）では、藤原宮期には造構が希薄であることを確認、宮に先行する条坊造構（西二坊坊間路、五条大路）も検出した。坊間路側溝からは「評」木簡が出土。下層の古墳時代の水田、川などは四分道跡・北辺の状況を示す。

藤原京関係は9件。右京一条一坊西北坪の調査（第81次）では、南北棟を主体とする小規模な掘立柱建物、井戸、土坑等からなる造構群を検出し、工房関係遺物や和同銭など注目される遺物が出土し、宮北方における坪内の様相をうかがう好資料を得た。左京七条（第81-1次）では、東三坊坊間路とその東側溝、および側溝を埋めて設けられた南北堀を検出している。

飛鳥関係は12件。水落遺跡（水落遺跡第9次）では、水時計跡の東南に隣接して、飛鳥時代の大規模な四面庇付東西棟掘立柱建物を検出。飛鳥寺西門地区の調査（飛鳥寺1996-1次）は、40年ぶりに西門跡を再検出し、構造、規模を再確認するとともに、門西方で、土管暗渠、石組み大溝、掘立柱南北堀や、石列など7世紀の前半から後半に至る詳細な変遷をあきらかにした。飛鳥寺寺域内の調査（飛鳥寺1996-3次）では、西面大垣、暗渠などを確認。飛鳥寺東南部の調査（第84次）では、7～8世紀代の東西溝、周囲に石敷をめぐらす井戸などを検出。飛鳥寺寺域区画施設や飛鳥池工房（1991年調査）との関連が課題で、調査は1997年度も継続する。川原寺寺域西部の調査（川原寺1996-1次）では、木樋暗渠、築地などを検出し、寺域西南部の調査（川原寺1996-2次）では、寺の創建に関わるとみられる掘立柱建物を検出した。山田寺南面東回廊の調査（山田寺第10次）は、保存良好な地覆材や屋根瓦の状況から回廊の建設から廃絶に至るプロセスを解明し、坂田寺（坂田寺1996-1次）の調査では、西面回廊の石組の内側雨落溝を検出した。

以上のほかに、桜井市吉備における調査（第81-14・16次）で、7世紀半ばの大規模な寺院跡を確認し、「吉備池庵寺」（きびいけばいじ）と命名した。金堂と推定される

巨大な版築基壇や、出土瓦などから、舒明天皇が建立した百濟大寺の可能性が高い。以上の調査成果の詳細については、年報IIを参照されたい。なお、発掘調査とともに現地説明会は、以下の日時におこなった。

（千田剛道）

6月15日 山田寺第10次（南面東回廊）佐川正敏・藤田豊児  
10月5日 飛鳥寺西門地区 花谷浩  
3月1日 吉備池庵寺 小澤毅

## II-1. 調査と研究

### 平城京の発掘調査

1996年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は、平城宮跡6件、平城京跡17件、京内寺院・その他3件であった。この26件の調査のうち、学術発掘および史跡整備にともなうものは7件8570m<sup>2</sup>、住宅建設などにともなう緊急調査は19件4562m<sup>2</sup>であった。部長・写真専門員をのぞく調査部員は23人であり、平均すると、一人あたり1.13件・575m<sup>2</sup>の発掘を担当したことになる。

おもな調査は以下のとおりである。平城宮跡では、東区朝堂院南門東築地（第267次）、東院西辺部（第270次）、東院園池（第271・276次）、式部省東方官衙（第273次）と、調査が宮の東南部に集中した。第267次調査では、東区朝堂院南限を区画する塀・門の改築の状況をほぼ解明した。第270次調査では、奈良時代末期に内裏正殿につぐ大規模な建物が存在したことなど、宇奈多理神社西方地区の様相をあきらかにした。第271・276次調査では、東院園池および東面・南面大垣の詳細を把握することができ、進行中の整備事業に貴重な知見を提供了。第273次調査では、調査部が継続的におこなってきた式部省東方官衙の調査をほぼ終了し、この地区的官衙の建物

配置や性格の変遷を解明することとなった。

京城では、宮北方の市庭古墳周辺の調査が比較的多かった。第269-1・13次調査では、海龍王寺周辺の変則的な条坊配置があきらかになった。また、長屋王邸（第269-4次）、東一坊坊間路（第269-5次）に関しても新たな知見を得ることができた。さらに、多量の縁釉瓦と公的もししくは宮的な色彩の強い建物群を検出した左京二条二坊十一坪の調査（第279次）も特筆すべきものである。外京城・京外では、大乗院の調査（第275・278次）と頭塔の調査（第277次）をおこなった。前者では、大乗院庭園および御所北辺の中世末～近代の状況をあきらかにした。とくに第275次調査では、日本ナショナルトラストによる大乗院庭園整備（57頁参照）に基づいて資料を提供できた。後者では、下層・上層頭塔の構造と変遷を詳細に把握できた。また、心柱礎石やその抜取穴から差し銭を発見するなど、重要な資料を得た。さらに、古墳時代後期の横穴式石室や江戸期の墓がみつかり、多方面にわたる新情報を提供した。以上の調査成果の詳細については、年報IIIを参照されたい。なお、発掘調査とともに現地説明会は、以下の日時に開催した。

（加藤真二）

6月8日 平城宮第267次（東区朝堂院南面築地）吉尾谷知浩

8月24日 平城宮第270次（東院）箱崎和久、清野孝之

12月7日 平城宮第273次（式部省東方官衙）平澤毅

3月8日 平城宮第279次（左京二条二坊一坪）井上和人

する監修協力において、古代建造物の技法及び実施上の諸問題などの検討をおこなった。朱雀門・東院中央建物・宮内省の復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成ならびに木材加工、瓦などの原型製作などの機会に細部技法について検討した。その他、飛鳥資料館において展示することになった山田寺回廊再現にあたり、部材の復原考察と展示のあり方や方法などの検討に参加した。

**滋賀県近世民家調査** 3ヶ年継続事業の2年度目となり、第2次調査をおこなった(30~31頁参照)。

**鳥取県近代化遺産総合調査** 2ヶ年継続事業の初年度にあたり、県内市町村による悉皆調査によって100件ほどの詳細調査候補をリストアップし、1回目の詳細調査を実施した(57頁参照)。

**建造物保存修復の理念及び方法に関する日独共同研究** 2ヶ年継続研究の初年度にあたり、ドイツ各地の都市の町並み、さらに教会、宮殿、近代建築など個別の建造物について、保存修復および活用の状況を現地調査した。ドイツからも研究者を招聘した。 (木村勉)

## 建造物の調査と研究

**南部を中心とする古代建築の調査研究** これまでに蓄積された調査研究の成果をもとに、古代建築の各部材や組物の大きさと寸法の比例関係、ならびに構造力学からみた架構や軸組の構造などの研究をすすめている(20~21頁参照)。また、建物復原に直接関連して、鶴尾、風鐸その他飾り金具、扁額、扉安置、築地の版築などディテールの調査をおこなった。

**遺跡の建造物復原方法の研究** 全国の建造物復原事業の実態を、都道府県の協力を得てアンケートをとり、とくに主要な事業については現地調査をおこなったうえ、研究集会を開催した(52頁参照)。また、類似性のある韓国の大殿建築等の復原状況も調査した。

**平城宮建物復原実施にともなう調査研究** 大極殿の復原基本設計に関する監修や、東院西建物復原実施設計に関

## 書跡資料の調査

南都諸大寺を中心として継続しておこなっている書跡資料の調査は、今年度は薬師寺、法隆寺、興福寺などについて実施した。薬師寺は、東大史料編纂所との共同調査である。今年度は25~27函の調書作成と、20、22函の写真撮影をおこなった。木製の文書箱は全部で28箱あるが、その最終段階で大型の箱に多種多様のものが大量に収納されており、なかなか調書作成のスピードアップがはかれない状態である。しかし、調査終了分からでもデータ公開と中世史料分の取りまとめをしようと考えている。法隆寺は、文書記録の整理目録化の作業をおこなっており、また興福寺は「興福寺典籍文書目録第二巻」収録分以後の経箱の調査が課題である。

南都以外では、仁和寺の文書の釈文作成と御経蔵所蔵分の目録作成の作業をおこなっている。1960年代から調査してきた仁和寺調査の史料刊行の継続事業として、近いうちに何らかのかたちで活字化する計画である。以上のほか、各教育委員会の依頼により、奈良の西大寺元版一切経、京都の興聖寺一切経、滋賀の源永寺文書などの調査と、文化庁美術工芸課の醍醐寺文書、東大寺修二会

資料などの調査に協力した。

また、1992年に北浦直人氏から寄贈された北浦定政関係資料を、岩本次郎調査員を中心として継続して整理してきたが、96年度に、その目録と一部資料の翻刻、関連論稿2編を収録した『北浦定政関係資料』(97年3月)を刊行した。江戸時代末期の平城京、御陵、条里の研究者であった北浦定政は、数多くの調査図面、調査日誌、古文献の写本などを残しているが<sup>5</sup>、その内容紹介をも含んだ目録と、寄贈資料に含まれている書状や和歌などの目録をあわせ収録した。定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」は、南都に残っている条里、条坊関係の古文献を獵涉した成果と、かれの実地踏査成果とが<sup>6</sup>、あいまって図面の上に結実したもので、文献と自然科学を取り込んだ学際的研究といえるものであり、条坊復原の基本をなしていふと高く評価できよう。今後、この北浦定政が遺した学術的成果は、測量技術との関係などの再確認の作業を通して、より評価されるのではないかと思われる。今後は、これら定政関係資料を関連分野で協力して、活用する研究が課題となろう。

(綾村 宏)

の場の提供だけではなく、各種データベースを作成して活用をはかっている。また、新たにインターネット経由での情報公開と活用のために機器の整備を進め、「奈文研ホームページ」を立ちあげて、外部への公開を開始した。奈文研の既往の調査研究の紹介だけではなく、発掘調査の速報など、新鮮な情報の提供に心がけている。

**全国不動産文化財情報システム構築の現状** 平成7年度末に整備されたハードウエアを活用して初期データをインターネット経由で公開するための準備作業をおこなった。これと平行して遺跡情報の収集とデータベースの変更・更新を続行している。データ公開のためのハードウェア・ソフトウェアは進歩が著しい分野であり、最適な手法の選択のために調査をおこなった。

**解析図化システムによる文化財計測法の開発** 発掘調査で検出した遺構のデジタルマッピングもようやく軌道にのり、属性付けも方針が定まった。あとは、異なる図化機の違うOSのもとで作られたデータを変換して奈文研のマシーンで可読できるデータにすること、データ保存の媒體を統一規格にすることなど、各測量会社と縦密な打ち合わせの上、決定していく作業を進めるのみ。

**古代地方官衙遺跡の調査研究** 郷の支配や収奪に関わる末端官衙をめぐって、①郷の編成と村落結合、②人的組織論、③郷衙（郷家）論、④荷札木簡論、⑤郡衙出先施設論、⑥首長居宅論、という視覚から、これまでの研究の現状と問題点について整理し、それと併行して郷関係官衙遺跡の文献目録を作成して、200ヶ所以上の遺跡の発掘調査例を収録した。また、古代の倉庫遺構について、茨城県平沢官衙遺跡などにみられる総柱式倉庫の周囲をめぐる柱穴例を取り上げ、その性格を検討し、軒支柱とみる考察をおこなっている。

**動物遺存体による生業活動の復原的研究** 長崎県福江島にある大浜遺跡では、従来より弥生時代のウシが出土していたが<sup>5</sup>、県教委の今年度の調査でもウマ、ウシの骨が出土しており、上層に須恵器を含む層があることからその歯を採集し、年代測定中。君津市にある6世紀の市宿横穴遺跡出土の骨角器および動物遺存体を分析した結果、出土遺物中、弓付、骨鎌、刀装具などが田辺市磯間岩陰や、石巻市五松山洞穴遺跡の出土品と共通性をもつことから、黒潮を南北に行き来した海入集団が存在することがあきらかとなった。

(工業普通)

## 埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターでは、発掘技術者養成のための研修や、各地の埋蔵文化財調査等に対する指導・助言をおこなうほかに、各研究室および各人が課題を決めて進めている研究がある。それらは次の通りであり、そのうちのいくつかは別頁で報告しているので(\*印)、ここでは他のいくつかについて紹介しよう。

埋蔵文化財情報の収集と調査／全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究／解析図化システムによる文化財計測法の開発／デジタル画像による発掘調査記録法の開発研究／編年版年の学史的研究／日本古代の稻作農耕様式の変遷に関する研究／古代地方官衙遺跡の調査研究／古代倉庫遺構の集成的研究／東アジア古代都城の比較研究／東アジア古代の庭園遺構の比較研究／東アジアの古代想像・壁画の技法的研究＊／動物遺存体による生業活動の復原的研究／残存職質分析による生業環境の復原的研究／古気候の復原的研究／年輪年代法による古墳時代初期時期に関する研究＊／年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明／飛鳥・藤原・平城宮跡等出土品の保存処理／古代石造物の製作技術、ならびに保存科学的研究／金銅製造物の保存科学的研究／広域遺構探査法の開発研究＊／復原遺物の構造安定性に関する研究／石造文化財の経年変化に関する研究／発掘調査支援機械システムの開発研究＊

**埋蔵文化財関係情報処理の現状** 文化財情報の収集と公開にはパソコン通信も引き続き利用している。意見交換

## 国際学術交流

### 1. 国際学術交流の現状

当研究所が年次におこなっている諸外国との国際共同研究には、特別研究として次の2件がある。

1) 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

2) アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力

また、文化庁が実施する「アンコール文化遺産保護共同研究」も当研究所で協力しており、文部省科学研究費補助金として次の2件を国際共同研究として実施した。

1) 中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究

2) 陶磁器文化の交流に関する科学的研究

当研究所が外国の諸機関・研究者とおこなう交流も近年多岐におよび、ほとんど全世界的なものとなってきた。1996年度をみてもそれらの研究推進のため、当研究所が招聘した研究者および先方の研究目的での来訪者は計21ヶ国、延べ73人、当研究所から外への出張者は16ヶ国、延べ71人にのぼっている。来訪者は奈文研の特別研究、科学研究費国際学術研究、国際交流基金、日本学術振興会、ユネスコ、日本国際協力センターの招きによるもののがほか、先方からの訪問者である。

**自治体職員協力交流事業特別研修** 地方公共団体、自治省および自治体国際化協会がおこなう「自治体職員協力交流事業」にもとづき、海外から、文化財保護関係機関・博物館・美術館等に勤務する職員を受け入れて、研修事業を実施するにあたり、文化庁および諸機関が協力するという趣旨のものである。当研究所も1996年度から受け入れの依頼があり、奈良・広島・山口の各県が受け入れた中国人研究者3名が、9月2日から6日まで特別研修を受けた。わが国における文化財行政の現状、保存科学、遺跡探査等について研修したほか、平城宮跡、飛鳥藤原宮跡、飛鳥資料館等の見学をした。

**財日本国際協力センターが実施する「博物館技術コース」への協力** 財團法人日本国際協力センターが開発途上国を対象に、毎年実施している標記の研修の一部を引き受け、12月2日より12月6日までの1週間当研究所で実施した。内容は、日本の各種文化財の保存の現状や遺跡

発掘、保存修復・整備、建造物見学などであった。参加者はブータン、ボリビア、ガーナ、インドネシア、モルディブ、パプアニューギニア、シンガポール、ザンビア、ケニア、ベトナムからの各1名であった。このうち、ボリビアのグスタボ氏は、翌年2月にも1週間、保存科学等の特別研修を受けた。

**文化庁の外国人文化財専門家招聘事業による来訪者** 以下の3名の外国人研究者を招聘した。

①韓国から李健茂氏（1997年2月27日～3月5日）：国立光州博物館長で韓国の青銅器研究の第一人者。過去にも訪問経験があるが、最近のわが研究所の研究状況等について意見交換し、大阪市で韓国の青銅器研究などについて講演した。

②アイルランド共和国からB.ラフティー博士（1997年3月8日～3月23日）：ダブリン大学考古学科の教授で、同国で多くの低湿地遺跡の発掘調査を手がけている。関西を中心に岡山、九州を訪れて講演をおこない、また精力的に低湿地遺跡の植物遺物、遺構の研究、日本の有機遺物の保存施設の視察をおこない交流を深めた。

③ドイツからH.チンマーマン博士（1997年3月18日～4月7日）：ドイツ北部のニーダーザクセン州立沿海歴史調査研究所の副所長をつとめる考古学者。北欧と日本における掘立柱建物の変遷に関する比較研究のために来日し、わが研究所と大阪で講演したほか、各地で多くの研究者と交流した。

**国際学会への出席** 以下の国際学会へ出席した。発表したのは10件、参加者は延べ21名である。

ヨーロッパ物理探査学会（ハーフ）/低湿地遺跡研究会（コペンハーゲン）/文化財保存学会-HIC（ローベンハーゲン）/博物館会議-ICOM（デンマーク）/石造物保存学会（ベルリン）/東アジアの低温文化（ソウル）/韓国保存科学学会（ソウル）、聖徳太子神籠石ボジウム（ソウル）/アジア文化財保存セミナー（奈良）/シンボジウム農耕と文明（奈良）

以上のように、国際的な学術交流は、きわめて活発に展開しており、その勢いは年々増大する傾向を示している（48～49頁参照）。しかし当研究所には、国際交流を専門に担当する部署や事務官が存在せず、各研究者の負担が増しているのが現実といふはかない。（工芸善通）

### 2. 中国社会科学院との第2次友好共同研究

当研究所では、日本古代都城の源流を探るため中国・

朝鮮における古代都城に対する大きな関心を寄せてきた。その趣旨に添って、1991年6月に中国社会科学院考古研究所と当研究所の間で「友好共同研究議定書」をかわし、都城を中心とする共同研究を実施し、北魏洛陽永寧寺の共同調査などの成果をあげてきた。

1996年度、当研究所の特別研究予算として「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」が認められるとともに、「友好共同研究議定書」を更新する年度にあたった。それと本年度からの共同研究計画を確認するため、田中所長・町田章・浅川温男が北京に赴き、共同研究をさらに5年間延長する議定書に調印した。6月13日のことである。今年の中心テーマとして漢長安城における宮殿遺跡を発掘調査することとし、あわせて発掘届けを国家文物局に提出した。しかし、中国側の事情により、年度内には調査不可能と判断して、遼寧省考古文物研究所との共同研究に変更せざるを得なくなつた。これについては4.を参照されたい。

### 3. 唐大明宮含元殿の保存整備事業への協力

ユネスコ・日本外務省が中国西安市に所在する大明宮含元殿の保存整備事業について本格的に着手したのは1994のことであり、それにともなって「大明宮含元殿日中保存事業協力委員会」が結成され、当研究所から町田が参加している。95・96年には中国社会科学院考古研究所が整備に先立ち、遺跡の範囲をほぼ全面的に発掘調査した。1959・60年の第1次調査では、含元殿基壇と東西にそびえる闕楼の調査が中心であり、基壇の南に展開する広場に想定した龍尾道と含元殿左右の遺構については、なお問題点が残されていた。今回の第2次調査では、これまで台基の中央部に3本の龍尾道を想定したのは誤りで、東西の闕楼下に龍尾道が存在することがあきらかになり、含元殿の左右に角樓・回廊があり、北方からの出入口として左右に門を開くことがわかった。また基台の東には建築用いた瓦塔類を焼いた窯跡もみつかった。

96年11月1日、西安市において「大明宮含元殿日中保存事業協力委員会」が開催され、上記の発掘成果の報告を受けるとともに、それに基づく遺構の保存整備案を検討した。この委員会では基壇上面までの復原整備という点における共通認識に立脚するものの、発掘調査で不明確な部分は復原せず、できるだけ現状維持の整備に留め

### 遼寧省文物考古研究所での調査風景

ようとする中国側委員の意見と、遺物が出土している欄干などは積極的に復原すべきだとする日本側委員の意見とが大きく対立することになり、再度整備案を模索することになった。いずれにせよ、97年度からは本格的な整備事業が開始することから、ユネスコは西安市側の整備事業責任者である高木恵氏を、12月から97年1月まで当研究所に派遣した。同氏は短期間ではあったが、平城宮跡で実施している保存整備の実際を体験するとともに、各地の実施例を視察した。また、96年11月には日本に滞在中の楊鴻勦氏（保存整備案の設計者）を当研究所に招いて、大明宮含元殿の研究発表会を開き、平城宮第一次大極殿と含元殿との深い関係が認識された。（町田 章）

### 4. 遼寧省文物考古研究所との共同研究

日本と中国との国際学術交流の一環として、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究—」という研究課題で、中国遼寧省文物考古研究所と共同研究をおこなうことになり、3月10日～29日、日本側が現地に赴いた。まず、遼寧省文物考古研究所、朝陽市博物館等で遺物を調査・観察した後、これらが出土した三燕時代のラマトン（刷輪洞）、十二台營子等の遺跡を視察した。その後、討議を経て、今回の最も研究対象となったラマトン遺跡出土遺物を中心に、保存処理に先駆けて詳細な観察と実測、写真撮影をおこなった。

ラマトン遺跡は、遼寧省北票市にあり、大凌河北岸の東西にのびる丘陵の南斜面に立地する3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地で、遺跡から大凌河を約30km遡ると、三燕（前燕・後燕・北燕）時代の都城である屯城に至る。三燕時代の墓としては、前燕の奉春郡尉墓、北燕の馬具・馬頭・馬銜・馬具等、日本や韓国との4～5世紀の

#### アンコール・ワット全貌（北西からみる）

古墳から出土する遺物と共通するものがあり、年代が先行することから、日本や韓国の馬具・武具の源流を考える上で、候補地の一つとなりうるものである。しかし、両者の関係を解明するには、今後、周辺地域も含めた、詳細な研究が必要になってくるであろう。（小林謙一）

#### 5. 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

この研究はミャンマー連邦文化省考古局との共同研究の3年目にはいった。主として研究者の交流をおこなっており、本年は、考古局バガン研究所所長アウン・チャイを1996年11月19日～12月3日まで、考古局研究員チョウ・トウ・アン・ミン・ウェイの両氏を11月19日～1997年1月7日まで招請し共同研究をおこなった。ここでは寺院・宮殿の建築遺構の発掘方法について相互の意見を交わし、飛鳥藤原宮跡発掘調査部において掘立柱の検出や測量方法について、具体例を前にして検討をした。今後、南アジアにおいて木造建築の発掘が予想でき、それに対応できよう。

一方、奈文研から、猪熊・巽・森本・村田の4研究員が1997年1月7日～20日にミャンマー政府考古局と遺跡を訪れ、各地で意見交換をした。バゴー、マンダレー、モラーミン、メッテラー、バガンなどである。とくに、97年から開始予定のマンダレー地区バイレ村ミンザイの古代都市跡は発掘計画段階から日本との共同研究の応用が生かされている。バガン遺跡群では、当研究所の発掘用具が摸され、現場で使用されるなど、早くも学術交流

の一端があらわれている。国際共同研究として、理想的な方向に進みつつある。

（猪熊兼勝）

#### 6. アンコール文化遺産保護共同研究事業

文化庁では、海外での文化財保護に積極的に貢献することを目指して、さまざまな施策を実行している。その一環として、伝統文化譜を所管とするアンコール文化遺産保護共同研究事業が平成5年度から始まった。アンコール文化遺産は、カンボジア王国中部のトレンサップ湖北岸に広がるクメール王朝の都城と寺院を中心とする遺跡群で、東西25km、南北13kmの範囲に、約1000ヶ所の遺跡がある。そのうちの62ヶ所が重要遺跡とされ、ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。なかでもアンコール・ワットとアンコール・トムは、東南アジア有数の大遺跡である。本事業は、アンコール文化遺産諸遺跡の保護に関して共同で研究を実施することを主たる目的としている。具体的には以下の6項目に重点をおく。

(1) 遺跡探査に関する共同研究 (2) 道路・遺構の写真測量に関する共同研究 (3) 石造建造物等の劣化対策に関する共同研究 (4) 発掘調査に関する共同研究 (5) 修復技術および保存科学に関する共同研究 (6) 広域遺跡整備に関する共同研究

各々の項目について、日本から調査団を派遣し、現地でカンボジア人研究者と共同して調査をおこなうとともに、日本にカンボジア人研究者を招聘し、当研究所を中心に研修をおこなっている。

（杉山 洋）

1996年度  
海外から奈文研への  
主要訪問  
研究者一覧

- 樺 錦南(韓国／寧越工業専門大学建築科助教授) 1996年7月29日～7月31日
- 洪 亨雨(韓国／国立文化財研究所遺跡調査研究室学芸研究員) 1996年9月9月～9月30日 奈文研招聘
- 鄭 慶國(中国／北京文物研究所)、韓國河(中国／鄭州大学文博学院)、張 徒軍(中国／山東省文物管理局) 1996年9月2日～9月9日 自治省招聘
- Kyaw Oo Lwin(ミャンマー／考古局研究員) 1996年5月20日～11月20日 奈文研招聘
- 張 正男、丁 現鶴(韓国／国立慶州文化財研究所) 1996年12月3日～12月8日
- 楊 鴻勳(中国社会科学院考古研究所) 1996年11月18日～11月19日
- 高 本惠(中国／西安市大明宮遺跡保管所長) 1996年11月21日～1997年1月31日 ネットスコ招聘
- Dorji WANGCHUK(ブータン／国立博物館学芸員)、Vu Huu Minh(ベトナム／フェ遺跡保存センター文化財専門官)、Gustavo Felix Sumavi LARICO(ボリビア／国立民族・民俗博物館学芸員)、Joseph Gazari SEINI(ガーナ／中央博物館長)、Aris Ibnu DAROJAD(インドネシア／博物館部展示課長)、Ali WA-HEED(モルディブ／国立博物館主任学芸員)、Joseph Lava KAIYO(エジプト／国立博物館アートギャラリー主任学芸員)、Shabri Bin Mohd SHAH(シンガポール／国立文化遺産局教育技官)、Tendayi CHIPANGANO(ザンビア／ルサカ国立博物館図書館司書)、Frederick Karanja MIRARA(ケニア／国立博物館教育長) 1996年12月2日～1996年12月6日 JAICA招聘

- Kyaw Tun Aung(ミャンマー／考古局ミャウー文化遺産支局副局長)、Min Way(ミャンマー／考古局研究員) 1996年11月21日～1997年1月10日 文化庁招聘
- Aung Kyaw(ミャンマー／考古局バガン文化遺産支局長) 1996年11月21日～12月3日 文化庁招聘
- 金 玉牛(韓国／釜山大学博物館学芸士) 1997年1月20日～2月9日
- Chhun Nak, Kinal Keo, Chan Kanha(カンボジア／王立芸術大学) 1997年1月8日～3月28日 文化庁招聘
- 張 群喜、郭 薩、單 峰(中国／陝西省歴史博物館) 1997年2月3日～3月4日 奈文研招聘
- Gustavo F.S. Larico(ボリビア／国立民族・民俗博物館) 1997年2月10日～2月14日 JAICA招聘
- 張 团林、万 欣(中国／遼寧省文物考古局)、謝 猛(中国／河北省文物研究所長) 1997年2月18日～3月29日 奈文研招聘
- 劉 建國、高 立兵(中国社会科学院考古研究所) 1997年2月16日～3月28日、奈文研招聘
- Ly Vanna(カンボジア／アブサラ助手)、So Sokuntheary(カンボジア／鉱工業エルギー省技官) 1997年2月17日～3月28日 文化庁招聘
- 李 健茂(韓国／国立光州博物館長) 1997年2月27日～3月5日 文化庁招聘
- 王 小慶(中国／陝西省考古研究所) 1997年3月7日～1997年3月31日 奈文研招聘
- 朱 岩石(中国社会科学院考古研究所) 1997年3月8日～3月29日 奈文研招聘
- 楊 志軍(中国／黒龍江省文物管理局副局長) 1997年3月1日～3月7日 東洋文庫招聘
- 黃 慎文(中国科学院古人類研究所主任) 1997年3月20日～3月29日 文化庁招聘
- 趙 大昌(中国科学院瀋陽应用生態研究所長) 1997年3月23日～3月28日 奈文研招聘
- V. Boldin, Y. Nikitin(ロシア／ウラジオストック極東研究所) 1997年3月9日～3月12日 青山学院大学招聘
- Raftrey Barry(アイルランド／ダブリン大学教授) 1997年3月8日～3月23日 文化庁招聘
- 趙 荣济(韓国／慶尚大学校博物館館長)、柳 昌煥(同館学芸研究員) 1997年3月15日～3月28日 奈文研招聘
- Richard Evershed(連合王国／プリスクル大学講師) 1997年2月27日～3月7日 奈文研招聘
- W.Haio Zimmerman(ドイツ／ニーダーザクセン州立沿岸歴史調査研究所副所長) 1997年3月18日～4月7日 文化庁招聘

1996年度  
奈文研研究者の  
海外渡航一覧

- 西村 康 1996年5月4日～5月17日／オランダ・連合王国「ヨーロッパ物理探査学会出席及び研究調査」(文部省科学研究費)
- 沢田正昭・肥塚隆保 1996年5月7日～5月11日／中国「中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究」(文部省科学研究費)
- 深澤芳樹 1996年5月18日～5月21日／韓国「韓国出土の無文土器時代遺物の調査研究」
- 田中 琢・町田 章・浅川温男 1996年6月12日～6月16日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)
- 杉山 洋 1996年6月17日～7月5日／タイ「タイ国におけるクメール陶器及びその窯跡の調査」(日本学術振興会)
- 光谷拓実 1996年6月30日～1996年7月6日／韓国「韓国における年輪年代学の調査・指導」(大韓民国文化財研究所)
- 猪熊兼勝 1996年7月3日～18日／ペルー共和国・チリ共和国「南北、南太平

### 洋の石像物調査

◆浅川滋男 1996年7月6日～7月21日  
／中国「中国黒龍江省におけるツングース系諸民族住居の調査と資料収集」(住宅総合研究財团)

◆沢田正昭 1996年7月20日～7月24日  
／中国「唐代壁画の保存修復のための資料収集」

◆白井 熊 1996年8月5日～9月2日  
／ロシア「アムール河下流遺跡一般調査」

◆沢田正昭 1996年8月9日～8月17日  
／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」(文部省科学研究費)

◆古尾谷知浩 1996年8月10日～8月27日／カンボジア王国「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆高妻洋成 1996年8月19日～8月25日  
／中国「ニヤ収集本製品の調査」(文部省科学研究費)

◆沢田正昭 1996年8月24日～9月15日  
／連合王国・デンマーク「文化財保存学会出席、発表」

◆西村 康 1996年8月25日～1996年9月1日／カンボジア王国「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆浅川滋男 1996年8月27日～9月1日  
／韓国「朝鮮半島東南部における古国家調査」

◆加藤允彦 1996年8月30日～9月4日、10月1日～10月4日、11月15日～11月20日、12月16日～12月18日／中国「遺跡公園に設置する石像製作に係る石材調査など」(大字陀町)

◆佐川正敏 1996年9月1日～12月15日  
／中国「中国旧石器時代の研究」(日本学術振興会・中国科学院)

◆町田 章 1996年9月4日～9月17日  
／中国「中国遼寧省における道路整備の指導」(国際交流基金)

◆松井 章 1996年9月6日～9月20日  
／デンマーク「国際低湿地遺跡研究会出席」

◆沢田正昭 1996年9月28日～10月10日  
／ドイツ「国際石造物保存会出席」

◆工楽善通 1996年9月30日～10月12日  
／ドイツ「ドイツにおける新石器時代の

考古遺物の材質・製作技法に関する調査」(文部省科学研究費)

◆木村 勉 1996年10月7日～10月18日  
／韓国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究・大韓民国文化財研究所)

◆川越俊一 1996年10月16日～12月15日  
／イタリア・フランス・連合王国「西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡の遺物の研究」(文部省在外研究員)

◆玉田芳英 1996年10月17日～10月21日  
／韓国「韓国内の遺跡の調査・研究」

◆工楽善通 1996年10月24日～10月27日  
／韓国「国際学术大会「東アジアの鉄器文化」出席」(大韓民国文化財研究所)

◆木村 勉・長尾 充 1996年10月28日～11月9日／ドイツ「建造物保存修復の理念と方法についての現地調査」(文部省科学研究費)

◆肥塚隆保 1996年10月28日～11月3日  
／韓国「水没出土木材の保存処理についての研究調査」(国立海洋遺物展示館)

◆沢田正昭・村上 隆・高妻洋成 1996年10月31日～1996年11月3日／韓国「韓国保存科学学会出席」

◆町田 章 1996年10月31日～11月6日  
／中国「大明宮含元殿整備会議出席及びアジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(ユネスコ・奈文研特別研究)

◆高瀬要一 1996年11月15日～11月19日  
／中国「遺跡保存活用状況調査」

◆杉山 洋 1996年11月18日～11月23日  
／韓国「国際学术大会出席及び研究調査」(国立慶州博物館)

◆木村 勉 1996年11月23日～12月8日  
／ブータン「ブータンの歴史的建造物・集落の保存のための現地調査」(文部省科学研究費)

◆小野健吉・加藤真二・小澤 敏・島田敏男 1996年12月9日～12月22日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)

◆杉山 洋 1996年11月25日～12月1日  
／カンボジア「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆沢田正昭 1996年12月8日～12月15日

／中国「中国古墳壁画に関する総合的調査と保存法に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝 1996年12月18日～12月22日  
／韓国「韓国における長鼓形古墳の研究」  
◆高瀬要一 1996年12月22日～12月30日、1997年2月25日～3月8日／ペトナム「ホイアン日本人墓地修復に関する調査」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝・賀津一郎・村田健一・森本晋 1997年1月7日～1月20日／ミャンマー「南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究」(奈文研特別研究)

◆西村 康 1997年2月17日～2月28日  
／カンボジア「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆沢田正昭・賀津一郎・肥塚隆保 1997年2月24日～3月1日／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆花谷 浩 1997年3月4日～3月17日  
／カンボジア「アンコール遺跡の調査研究」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝 1997年3月10日～3月15日  
／韓国「南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究」(奈文研特別研究・国立慶州博物館)

◆田中 雄・町田 章・毛利光後彦 1997年3月10日～3月16日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)

◆小林謙一 1997年3月10日～3月23日  
／同上

◆村上 隆 1997年3月10日～3月13日  
／同上

◆飯 幹雄・清野孝之 1997年3月10日～3月29日／同上

◆寺崎保広 1997年3月10日～3月16日  
／中国「中国古墳壁画に関する総合的調査と保存法に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆金田明大 1997年3月10日～3月29日  
／同上

◆西村 康 1997年3月16日～3月22日  
／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」(文部省科学研究費)

\*（ ）付き特記のないものは私費渡航

## 在外研修の成果

### 西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡の遺物の研究

川越俊一／平城宮跡発掘調査部

上記の研究題目のもとに平成8年10月から平成8年12月にかけて、ローマ、ヴェネツィア、パリ、ケンブリッジ、ロンドンの関係機関を訪れる。この研究は、日本と西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡からの出土遺物の比較研究を目的としたものである。ローマではまず、古代遺跡のスケールの大きさと遺存状態の良好さに驚かされる。ローマでは古代のローマングラスに関する資料、ヴェネツィアでは中世のヴェネツィアングラスに関する資料の調査をおこなった。また、フランスでは主に近世以降のガラスについて調査した。今回の研修の主要滞在国であるイギリスでは、ケンブリッジ大学考古博物館と大英博物館で英国内出土資料のみならず各國の出土品を調査し、世界各地のガラスおよびガラス製品の生産に関して理解を深めた。なかでも興味深かったのは、ルツボの形態である。古代の日本では、砲弾形をしたガラスルツボが用いられるのに対して、ヨーロッパ・中近東では平底ルツボが主流となること、ルツボの容量も日本が400cc以下であるのに対して、ヨーロッパ・中近東ではその10倍以上になることなどである。また、製品にしても、日本が玉類などの小型の装飾品が中心になるのに対して、一方は容器類が中心になるなど対照的な相異点があきらかになった。各機関の研究展示も芸術的な容器中心となっていたことへの物足りなさは残るが、今回の研修では各地のガラス製品にふれることができ、有意義であった。

### 中国前・中期旧石器文化の研究

佐川正敏／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

日本学術振興会の推薦で、中国科学院古脊椎動物古人類研究所（黄慰文教授受け入れ）において、1996年9月1日から12月15日まで3万年前以前の前・中期旧石器文化の研究をおこなった。目下、列島最古の上高森遺跡の年代は、60万年前に追うとしている。原人が列島に渡来できるチャンスは、60万年前のミンデル氷期か、100万年前のギュンツ氷期である。もし後者であれば、列島ではさらに古い遺跡が将来見つかることになる。中国の華北地方には、東谷塚遺跡や藍田原人出土の公王廟のように、古地磁気法で100万年前を若干越える遺跡があるので、不思議ではない。しかし、世界の多くの人類学者はそれに懷疑的である。それは、原人が東アフリカで180万年前に出現し、140万年前に中東経由でユーラシアへ拡散し始めたとする仮説に矛盾する事態を、受け入れられないからである。

黄土の標準地層のある洛陽に近い西安市にある中国科学院黄土・第四紀地質国家重点实验室は、年代測定機器を含む最新の設備をもつ共同利用施設で、中国内はもちろん欧米を中心とする国外の研究者も各種のプロジェクトに参加している。中国の第四紀地質学の成果は、国際的に認められているので、年代への懷疑は第四紀地質学への懷疑につながる。原人起源拡散仮説は、年代とルート、道具の内容を含めて近い将来修正されるだろう。97年度から文部省重点領域研究「日本人および日本文化の起源」（代表：尾本恵市教授）がスタートするので、成果の詳細はそこでご披露申し上げよう。

## 公開講演会

### 第78回公開講演会「薬師寺は移築したか」

1996年6月1日

平城京の薬師寺が藤原京の本薬師寺を移築したものか否かという問題は長い間の論争が続いているが、未だに決着をみていない。近年、奈文研では、両寺の発掘調査を継続しており、いくつかの知見を得ている。そこで、これまでの論争を整理して問題点をあきらかにし、発掘の成果からどこまで問題解決がはかれるかを論じた。

#### ◆寺崎保広：薬師寺移築論争と平城京の

##### 薬師寺の発掘調査

研究史のうち、美術史・建築史・考古学の各分野の最近の論考を検討した。とくに一部の移建・新造説が近年注目をあつめているが、それに対して疑問を呈した。平城薬師寺の発掘では、とくに講堂の成果をもとにして、伽藍が建築途中で設計変更をすることとなり、そのため回廊が単廊として完成する前に複廊に変更された、とするこれまでの成果の見直しを主張した。結論としては、平城薬師寺は、本薬師寺を移築したものではなく、新たに造営されたとする説に妥当性があることを述べた。

#### ◆花谷 浩：掘った！出た！わかった？

##### 本薬師寺の発掘調査

本薬師寺の最近の発掘調査成果から、1)本薬師寺の中門は三間門で回廊は単廊だった、2)本薬師寺創建軒瓦は平城薬師寺のそれと違う、3)本薬師寺の建設は藤原京条坊設置より遅れる、ことなどを指摘した。中門・回廊の構造が平城薬師寺と違うので移建は不可能。出土した瓦も7世紀後半の創建瓦が大半を占め、これも移建を否定する。同様の状況は東塔の瓦にもあてはまる。東塔も移建されなかった。本薬師寺創建軒瓦が判明したことにより、平城薬師寺では軒丸瓦は本薬師寺用を流用、軒平瓦は紋様を似せて新たに作成したと考えた。二つの薬師寺間の瓦の供給関係は複雑で、同瓦の出土を単純に移建と結びつけるのは危険。本薬師寺の造営がいつ開始されたか、これまでには平城薬師寺東塔棟鏡の解釈によって天武朝と持統朝との二説があった。本薬師寺金堂創建軒瓦の紋様は藤原宮軒瓦との関係からは天武朝とみたほうがよい。となると、藤原京条坊の設置時期が天武朝の古い

段階にまで遡ることとなる。本薬師寺の発掘調査は薬師寺論争だけでなく古代都城制の問題とも深く関わる。

### 第79回公開講演会「原始・古代の実年代にせまる」

1996年11月4日

奈文研では、かねてより年輪年代法による考古遺物・木造建物等の年代測定をおこなってきているが、1996年4月に大阪府池上・曾根遺跡出土の弥生時代中期後半とみてよい柱根が52年B.C.に伐採されたものであることが判明し、弥生時代から古墳時代へかけて、実年代をどうあてはめるかが世間の話題となった。そこで、「原始・古代の実年代にせまる」というテーマを設けて、光谷拓実が「年輪で歴史をよむ」、工楽善通が「考古資料から年代をよむ」という演題で講演をした。

#### ◆光谷拓実：年輪で歴史をよむ

出土した木材や古木の年代を測ることによって、遠い過去の実年代を知り得るのか、という年輪年代法の原理をやさしく解説するとともに、暦年標準パターンの作成手順などを述べた。その研究成果から、1996年11月現在、スギ材は1313年B.C.まで、ヒノキ材は912年B.C.まで測定が可能になった。そして、コウヤマキ材も、まもなく紀元前1千年代に達するだろうことを解説した。また、年輪年代法は、過去の年代を知るだけでなく、製作年代のちがう遺物をみぬいたり、古材の産地を同定しうる場合もあることを説明した。以上について、多くのスライドを映写してその実例を紹介した。

#### ◆工楽善通：考古資料から年代をよむ

相対的な古さしかわからない発掘資料に、実年代に近い値を与えるにはどのような方法があるのか。とくに弥生～古墳時代の遺物に対して、年代のわかる大陸からの搬入品、および土器の様式編年からの年代の割り出しを解説した。池上・曾根遺跡以外にも、年輪年代法で弥生時代の実年代が古くなりそうな出土材があるが、いまところはまだ、考古資料の交差年代をもつとめたうえで年輪年代を応用すべきこと、良好な年輪年代の測定値をさらに多く入手する必要を述べた。コウヤマキ棺材での紀元前後頃の実年代が確定すれば、弥生～古墳時代の実像を描くのに大きく寄与するだろう。年輪から東北島海山の噴火年代が466年B.C.であると判明したのは、東日本の縄文晩期の年代を考えるうえで重要な定石となる。

## 研究集会

帝文研主催の研究集会を開催した。ごらんのとおり、多岐多様!

### ◆日本古代律令国家における末端支配機構の研究

1996年12月5~6日

この研究は、都以下の末端支配のあり方を探ることを目的としたものである。考古・文献史学の研究者46人の参加を得て研究集会を開催し、郷の編成と村落結合、郷長や兼任などの人的組織、郷レベルの官衙（郷衙）の有無、都衙と郷との本筋授受關係、都衙出先施設、といった論点を中心して研究報告と討議をおこなった。郷の役所については、国衙・都衙と並ぶ官衙の存在を考える見解と、都衙施設の分派など都衙諸施設の多様な在り方を示すものと見る意見とに分かれ、結論は得られなかつたが、都以下の支配の実態をめぐる研究の現状と問題点が整理され、今後共に取り組むべき課題を明確にすることができた。また、末端支配の拠点と村落あるいは集落群との係わりも議論され、末梢官衙道跡論と古代集落道跡研究との接点を浮かび上がらせたことも大きな成果といえよう。

（中山敬史）

### ◆薬師寺移建論に意見あり

1997年3月29~30日

報告と講演は、寺崎保広「薬師寺移建論争の概要と問題点」、花谷浩「本薬師寺の発掘調査」、藤井恵介（東大）「建築史からみた薬師寺」、田辯征夫（東博）「平城京遷都と寺院移建」。寺崎は近年の薬師寺論争の方向と問題点をさくった。薬師像に関する岩永省三、東塔については宮上茂隆の論考を紹介。平城薬師寺回廊の復原への「設計変更」が「改革」に近いかと推測した。花谷は本薬師寺跡発掘調査の成果を述べ、3段階の造営順を指摘。西塔以外は移建を否定。西塔は創建が遅れ、文武2年時点での完成を疑問視した。藤井氏は薬師寺論争における建築史の発言を研究史的に論述。東塔問題の解決には解体修理しか道はなく、薬師寺建築様式の特殊性と唐の建築との関係探求も課題

とした。田辯氏は古代の遷都のうち田都の寺院が大学して移ったのは平城遷都だけであり、平城京寺院として大安寺の重要性とそれを主導した道徳の役割を指摘した。

（花谷 浩）

### ◆書跡資料調査保存の現状と課題

1997年3月29日

古文書、経典、典籍などの調査や保管の現場において、各関係者の立場により、調査や保管についての認識が若干の異なるところがあったと思われる。たとえば、文書の調査法、調査の形式、ラベル貼付、使用用語の不統一、目録の体制、保管の方法等々の問題である。この研究会は、書跡資料関係者間ではできるだけそれらに関して共通の認識をもつようになることを意図したものである。今年度は、①奈文研の書跡資料の状況と課題、②滋賀県での古文書調査の実態、③調査成果とその情報処理に関する報告、をおこなった。初回で、現状報告とそこでの課題の提起が主であったため、参加者の共通認識の形成までにはいたらなかった。しかし、調査現場では明確化しきれない違いをお互いにはっきりと認識することにより、今後より議論が深化する前提にはなったと考えられる。

（藤村 宏）

### ◆古代都城における行政機構の成立と展開

1997年2月22~23日

第1回目の宮城中権部の諸問題について、今年は官衙の諸問題を検討した。官衙（曹司）の意味はひろく多様である。  
①構造：8世紀の姿をもとに、曹司を官人の事務および生活空間とすると、官衙は政府、附属舎、倉、宿所、厨などの諸施設をもつ。横出構造と官衙を結びつけるには遺物、史料を含めた総合的な検討が必要で、プランから直ちに官衙を推定することは難しいようである。  
②起源：岸俊男は、朝堂院がもつ朝參（挨拶）、朝儀（儀式）、朝政（火務）の3機能うち、朝政の機能が肥大化したと考える。曹司の起源は朝堂院の成立とともにあり、朝堂院の衰退に反比例して発展したというのである。これに対し、吉川真司は、朝堂と曹司の政務は機能的に別物であり、当初より併存したと報告した。諸宮の調査事例からみると、吉川説が合

理性をもつようである。

③展開：津御原宮の内部が内裏とすると、宮の周りにあるのは内廷機構で、後の八者にあたる外廷機構はやや離れた場所に点在する。外廷機構を宮城内部に取り込むの方1キロの宮城が成立する藤原宮殿階である。ただし、遷都当初の姿は不詳で、比較的整うのは大宝令以後であろう。後期藤原宮の官衙は平城宮に影響を及ぼすが、官衙を含め、宮城全体の地割り方法は長岡宮段階で一変し、平安宮に移行する。この段階で、平安宮の諸司町（官外官衙）の粗型が成立するのである。このように前・後期の藤原宮と長岡宮が、官衙展開の大きな画期となる。なお、報告集「古代都城における行政機構の成立と展開」をご参照いただきければ幸いである。

（金子祐之）

### ◆遺跡の建造物復原方法の研究

1997年3月14日

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段であるが、まだ歴史が浅いものもある、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等をおこなうことによって、問題点を整理し、今後の復原整備事業のあり方の方法をさぐるものである。木本真（文化庁）、江面鶴人（文化庁）、吉岡泰英（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の第2年次で、全国の遺跡における建造物復原事業実態調査を都道府県教育委員会の協力を得ながら実施した。研究集会においては、復原事業の基本計画から復原実施までのプロセスの中に内在する問題点について意見交換をおこなった。

（田村健一）

### ◆日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウム『平地住居と高床建物』

1998年1月18~19日

1995年度の「堅穴住居の系譜」に引き続き、96年度は表記のシンポジウムを開催した。近年、日本各地で続々と出土している绳文・弥生時代の掘立柱建物を対象に、以下の3セッションをおこなった。

## 「平地住居と高床建物」シンポジウム

### I. 説文集落と掘立柱建物

報告：石井寛 大工原豊 宮本長二郎

コメント：大貫静夫 小山修三

### II. 异生時代の大工掘立柱建物

報告：武末純一 廣瀬和雄

コメント：都出比呂志 浅川温男

### III. 南方と北方のクラ

報告：浅川温男 佐藤浩司 太田邦夫

コメント：宮本長二郎 植木久

掘立柱建物の場合、通常、旧生活面が削平されているため、機能・構造とも不明な点が多く、議論全体に消化不良の感がいためにならなかった。今後、報告書を作成するなかで考察を深めていきたい。

(浅川温男)

### ◆ 通路土壌の微細生物、生化学物質

#### の研究 1997年2月26日～3月1日

1) 脱質分析の成果と問題点、2) DNAによるイヌとブタの系統、の2つの問題をめぐって研究集会をおこなった。参加者は約30名であった。1) 脱質分析については、R.エバーケッド（ブリストル大学）による、土器の器壁に染み込んだ植物に起因するワックス分からキャベツなどを煮込んだことがわかる例などの報告に続いて、中野益男（帯広畜産大学）の脱質分析と免疫抗体反応による最近の遺跡での成果について報告があった。コメントーターとして、小林正史（北陸女子短期大学）から、種々の脂肪酸が土中に相対的な比率を守りながら分解していくことは考えにくく、特定の脂肪酸が他の比較されやすいのであるという意見、堀内晶子（国際キリスト教大学）より土器に吸着させた脱質の分解の進行と回収率について実験的な方法からのコメントを得た。DNAについては、石黒直隆（帯広畜

産大学）から、在来ブタ、ニホンイノシシ、西洋ブタなどの遺伝子データーベースを構築し、遺跡出土のブタ／イノシシの骨から抽出した試料とを比較した結果、野生遺跡出土のブタ／イノシシのなかには在来ブタに共通するミトコンドリアDNAをもつものが存在することがわかった。イヌについては、人為的交雑がすんでいるためか、Dループ、Cytbについてもクラスターにばらつきが大きく、古代家犬の品種別分類は困難であるとの中間報告を得た。（松井章）

### ◆ 文化的景観の研究 1997年1月29日

1992年の第16回世界遺産委員会において文化遺産の範疇に文化的景観Cultural Landscapeの概念が導入され、国内でも関心が高まっている。日本では明治以来、法制度的に保存されてきた「名勝」がこの概念に包括されるが、その成立の歴史的背景、保存制度の特徴、保存政策のあり方など研究課題は少くない。そこで第1回研究会では「文化的景観とは何か」という点に的を絞って議論した。報告は以下のとおり。丸山宏（京大）「近代における京都の名勝保護政策について」、小野佐和子（千葉大）「イギリス湖水地方と比較した月ヶ瀬梅林の近代における変容について」、赤坂信（千葉大）「歴史的環境保存の問題点」、安原啓司（文化庁）「名勝の指定および整備の現況について」、本中真（文化庁）「世界遺産と文化的景観について」、内田和伸「遺跡に重なる文化的景観について」。（内田和伸）

### ◆ 戦国時代の庭園遺跡 1997年3月21日

近年、発掘調査による情報が増大している戦国時代の地方武将の居館の庭園について、研究集会を開催した。大内氏館跡（山口県）、江馬氏館跡（岐阜県）、一乗谷朝倉氏館跡（福井県）、萬代院跡（広島県）、長氏館跡（群馬県）の各庭園構造について、発掘担当者等の報告を受け、庭園の意匠的特色を中心にして討議をした。これら戦国時代の武将居館の庭園は、建物からの觀瞻を主とした座觀式の庭園であり、池は浅く護岸の石組を全周にまわる室町時代の庭園一般の意匠的特色を備えている。ところが、必ずしも庭園築造に適した場所とはいえない防衛上の拠点

に立地したためか、池に遊水池的な役割、あるいは築山に土星的な役割をもたせるなど、武将居館としての機能的要請による意匠が認められることもありかにならなかった。（小野健吾）

### ◆ 保存科学における色の諸問題

1997年2月20日  
埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。今回の研究集会は、文化財における色の問題をテーマとし、顔料・染料・考古遺物・伝世品あるいは壁画・壁体といった様々な観点から、8名の講演者による口頭発表をおこなった。また、情報交換の場ができる限り多く設定することを目的として、ポスターによる発表も企画したところ、赤色顔料に関する5件の展示がなされた。総合討議では、とにかく赤色顔料の产地・製法に関する問題について活発な議論がおこなわれ、新たな見解や問題点がクローズアップされた。また、古代壁画の復元や整備に関連して、顔料推定における従来の分析法の限界とそれを打破するための新たなアプローチについても提言があった。（肥塚雅保）

### ◆ 遺跡地図情報システムの研究

1997年2月14日  
奈文研では、遺跡の調査研究において現況地形図、条幅復原図、調査区割図、遺構実測図といった地図の情報の整理を手作業でおこなっており、効率的システムの必要性を感じている。そこで、国土地理院を中心とする空間データ基盤整備事業について理解を深めるとともに、文化財研究への応用を進めつつある機関の事例を検討するため、遺跡地図情報システム研究会（第1回）を開催した。まず国土地理院の中嶋義郎氏が、空間データ基盤整備とGIS（地理情報システム）について、GIS研究会やGIS関係者会議連絡会議の報告を中心に紹介した。ついで、太宰府市、京都市、奈文研が事例を報告した。過去のデータを活用するため、データ型式などの標準化の必要性を強く認識した。今後は都城への応用を統一的に議論すると同時に、都域外地域についてもデータの扱い方を検討する必要があり、継続的な研究が求められる。（森本晋）

## 文部省 科学研究費助成研究

国際学術研究2件、重点領域2件、基盤研究13件、奨励研究3件、データベース1件の計21件が採択された。

### ◆中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究

代表者・田中 琢 国際学術研究 新規中国・陝西省西安市周辺には、唐代を中心とした古墳壁画が多く現存する。古墳内部から剥ぎ取った多数の壁画が陝西歴史博物館その他の機関に保管されている。これらの中には移設した壁画について、壁体の強化方法、顔料の褪色・剥落防止対策の研究、ならびに考古学・美術史学・建築史学の総合的な調査研究をおこなう。

### ◆陶磁器文化の交流に関する科学的研究

代表者・沢田正昭 国際学術研究 新規日本・韓国・中国・東南アジア地域で生産された陶磁器について、その胎土や釉薬を分析し、考古学・美術史学の調査をおこない、陶磁器文化の交流圏の確認と交流の実態を究明する。わが国では、全国各地にこれらの陶磁器が大量に出土し、あるいは伝承している。また、スミソニアン研究機構関連機関でも数多くの東洋陶磁器を所蔵しており、分析・調査に関する共同研究をおこなう。

### ◆二条大路木簡データベース

代表者・町田 章 データベース 繼続長屋王家木簡データベース作成グループは、長屋王家木簡に引き続き、1994年度以来研究成果公開促進費(データベース)の支給を受け、7万点余にのぼる二条大路木簡のすべてについて、文字情報と画像とをリンクさせたデータベースを作成すべく、作業を進めている。

### ◆遺跡探査法の総合的開発研究

代表者・西村 康 重点領域1) 繼続表記研究の総括班として、研究推進と公表、普及を任務としてきた。平成4年度に開始した本領域研究は平成8年度をもって終了したが、研究に参加した研究者が中心となって、日本文化財探査学会の設立、第2回国際遺跡探査学会の日本開

催などに取り組む予定である。

### ◆集落・埋納遺跡の探査

代表者・西村 康 重点領域2) 繼続

広域遺跡である集落・寺院・官衙構造を効率良く正確に推定して、遺跡調査とその保存に役立つ資料を提供すること、弥生時代を中心とする青銅造物の所在推定とを目的とする。地中レーダー探査の方法を中心に、電気探査、磁気探査、電磁誘導探査の方法を併用すれば、必要な地下情報を採取できることを確認できた。

### ◆トイレ遺構の総合的研究

代表者・黒崎 直 基盤研究A 繼続

トイレ遺構の認定手法および研究の方法を考古学を中心にして、関連する諸分野と共同研究する。3年継続の2年目。総合研究会を開催し、発掘された遺構や遺物について検討した。加賀地方の一例では、水洗式からくみ取り式への転換がなされ、それは人糞肥料の利用開始を暗示する。また土器に付着する「尿酸塩」の析出から「しびん」の存在を考え、寄生虫卵とともに古墳時代の木構造が出土した。

### ◆常時微動測定による古建築の構造安定性に関する研究

代表者・内田昭人 基盤研究B 繼続

伝統的木造建築物の振動特性を把握することを目的とし、法隆寺建築4棟について常時微動測定をおこなった。五重塔は1次の固有振動数0.90Hz(ヘルツ=1秒間の振動数)で水平に揺れながら、同時に2次2.50Hzの振動数で弓形にしなる動きをしていた。減衰定数は4.0%である。1次、2次の固有振動数と減衰定数は、金堂:1.80Hz・4.4%、2.07Hz・1.7%、中門:1.56Hz・4.4%、1.80Hz・2.6%、大講堂:1.70Hz・2.5%、2.10Hz・1.9%である。

### ◆古代東アジアにおける冠位制度の考古学的研究

代表者・毛利光俊彦 基盤研究C 繼続

前年度から継続していた日本・朝鮮冠の資料集成についてはほぼ完了し、今年度は中国東北部・蒙古・西域の資料を多く収集した。主研究としては伽耶冠を取りあげ、洛東江以西の諸小国では新羅の影響を受けて、6世紀前半に冠位制の原形

が形成されたが、洛東江以西の諸小国(大伽耶連盟)では562年の滅亡時まで未成熟であったことを推論した。成果論文に『朝鮮古代の冠～伽耶』(『堅田直先生古稀記念論文集』1997年3月)がある。

### ◆北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究

代表者・渋川温男 基盤研究C 繼続

2年目の本年度は、主として中国東北地方におけるツングース・満州語派の狃い手たちの住居に関する資料を収集した。また、住宅総合研究財團の助成金により、黒龍江省の小興安嶺一帯で、エヴエンキ族およびオロチヤン族の住居を調査した。その結果、満州族系の平地住居にみられる万字炕(コ字形の床暖房施設)と神棚の配置関係が、円錐形テントの空間構造を踏襲したものであることなどが、あきらかになった。

### ◆和鏡の生産と流通～出土鏡・鑄造遺跡から見た考古学的考察

代表者・杉山一洋 基盤研究C 繼続

3年にわたる研究によって、下記のような点が明らかになった。1)まず研究の第一として、全国にわたる和鏡の出土例を調べ、そのデータベース化を行った。これによって、近年の発掘調査の進展によって、多くの和鏡が発掘されるとともに、その出土の現状が把握されるようになった。成果として、全国歴史時代鏡一覧表を作成した。2)これらの出土資料の中から、最も研究上重要である2遺跡、三重県鳥羽市神島と宮崎県南郷村神門神社の出土鏡を調査し、写真撮影を中心とする調査をおこない、資料を作成した。3)第二に全国的に検出例の多くなってきた和鏡の鑄造遺跡を報告書等で抽出するとともに、出土品の実査をおこなった。その結果、京都市内における検出例の豊富さから、中世京都における和鏡鑄造が七・八条周辺を中心に活発であったことが判明すると共に、鑄型の構造などに、時代による変化のあることが判明した。

### ◆弥生時代と古墳時代の祭祀の比較研究

代表者・岩永省三 基盤研究C 繼続

古代国家形成期であった弥生・古墳時代における社会の動態の一面を、祭祀の分析からあきらかにし、とくに集團祭祀の

出現・展開・消滅の様相と、首長權承儀礼の出現・展開の様相との有機的連関を追究した。集団祭祀の動向は、首長層の政治的権力者としての成長と密接に関連するが、最終的消滅は各集団内部での自律的契機によるものではなく、西日本の広域にわたる首長層の連合の結成にともなう疑似的集団祭祀としての集団再生祈願儀礼の成立を前提とする。

◆古代の地方末端における官衙遺跡の研究 代表者・山中敏史 基盤研究C 雄略郡衙以下の「官衙的遺跡」を整理すると、いざれも、国郡衙から相対的自律性をもった郡衙とは見なしがたく、郷長や郷雜任らが郡司の指揮下に郡衙機構の機能の一部を分掌した場であり、郷雜任や郷長らの活動の拠点は、本来的には郡司の直接的な管轄下に置かれた郡衙出先施設や居宅などに併設された官衙補完施設であったと考えられる。

#### ◆郷衙・郷長宅に関する考古学的研究

代表者・松村惠司 基盤研究C 新規律令制下地方行政組織の最末端に位置する郷に、「郷衙」とよぶべき行政の拠点施設が存在したか否か、その論争の再検討を目的とする。「郷長」「里長」墨書き土器、刻書防錆車などを手がかりに、郷長の居宅の構造をあきらかにし、古代集落遺跡の中にみえる官衙の要素を抽出し、その性格を考究する。初年度は郷長関連文字資料と13遺跡の構造分析をおこなったが、郷長の経済的優位性は認められず、郷長居宅に付随するような官衙的施設も抽出できなかった。これらの事実は、郷長が自下から任用され、律令官人機構の中に組込まれなかつた事実と符合する。

#### ◆製作技法と同范関係からみた中世瓦の本格的研究

代表者・山崎信二 基盤研究C 新規全国の中世瓦を製作技法を中心として8期に細分した。近畿では京都系・大阪(摂津・和泉)系・大和系の三者が独自性をもち、播磨・紀伊・河内ではこの三者の系統が地域によって交錯した状況を示す。関東も同様で、鎌倉のものをぞくと、武藏系・上野下野系・常陸系に分かれ、それぞれ近畿の大坂系・京都系・大和系に対応するが、時期によっては他系統

へ移るものがある。

#### ◆古代におけるガラス及びガラス製品製作に関する基礎研究

代表者・川越慶一 基盤研究C 新規日本における古代のガラス及びガラス製品生産の歴史的位置付けをあきらかにするために、砲弾形ガラスルツボと小玉用鉢型の出土資料を中心に分析をおこなう。分析を通して、砲弾形ガラスルツボは7世紀後半に出現し、祖形は朝鮮半島に認められること、鉢型は3世紀から8世紀まで変化のないことが判明した。その結果、日本でのガラス製造・製品生産は、7世紀後半に変革期が認められ、その技術は中国大陆や朝鮮半島を通して導入されたとの見通しをもつた。

#### ◆歴史的建造物保存修復技術の考え方と方法 ～地方文化財修復指針案の作成

代表者・木村 魁 基盤研究C 新規建造物保存修復技術の基本的な考え方と方法について、重要文化財の場合と比較検討しながら、各地の地方文化財の状況を実地調査して分析する。地方文化財にふさわしい保存・修復のあり方を、事業の体制、当初の計画、修復時の調査、調査結果の分析と修復方針の検討、実施計画と修理工事、記録の作成などの項目によって検討のうえ、指針案『地方文化財保存修復技術の考え方と方法』を作成する予定。調査を明治以降の洋風建築にしばり、1996年度は北海道・東北地域を調査した。

#### ◆日本古代の湧湯、流れ遺構の研究

代表者・高瀬要一 基盤研究C 新規近年、奈良県を中心とする地域において発見された7ヶ所の4~8世紀代の湧水施設と、そこから流れ出る水を導いた水路の遺跡について、その形態、構造、立地、水源、石組み、祭祀遺物などを分析し、遺跡の特色、性格をあきらかにすることを目的としている。初年度は7ヶ所の遺跡について現地調査と資料収集、整理作業をおこなった。

#### ◆中世近世における金工材料と製作技法の歴史的変遷に関する研究

代表者・村上 雅 基盤研究C 新規中世近世の遺跡から出土する金工品を対象とする材料科学的な見地からの調査に

より、当時の金工製作に用いられた材料とその技法を探ることを試みている。たとえば、黄銅タイプの合金が、小柄などの刀装具やキセルなどに対してすでに16世紀中頃には使用されていたことを確認できた。伝世資料を中心とした従来の美術工芸史的視点に、本研究の成果を加えることで、日本における金工技術史を体系化することを目的としている。

#### ◆飛鳥奈良時代における畿内と東国との交流の研究

代表者・次山 淳 考古研究A 新規律令国家による地方支配の実態を解明するうえで、東国経営の形態、とくに蝦夷と呼ばれた人々との相互の交渉のありかたを分析することは重要な視点のひとつである。本研究では、飛鳥石碑遺跡に東国からもたらされた内面黒色土器や「夷」字墨書き・刻書土器等の考古資料を中心に関連する資料の集成と分析をおこなった。また、この成果により飛鳥資料館特別展示『齊明記』の一部を構成した。

◆太政官公文録中の建築仕様書からみた明治初期木造洋風建築の設計寸法に関する研究 代表者・長尾 充 考古研究A 新規本研究は、洋風建築とともに日本に紹介されたメートル法、ヤード・ポンド法などの洋式尺度の建築設計寸法への採用状況と、伝統的な設計寸法への影響を、官庁関連の建築仕様書を通して解明することを目的とした。対象とした木造建築の仕様書136通には、洋式尺度を記す仕様書は皆無で、和式尺度への換算値もみいだせない。明治初期官庁營繕では、洋風建築も和式尺度で設計され、伝統建築への影響もきわめて小さかったことがあきらかになった。

#### ◆近世中期における江戸の緑地学的研究

代表者・平澤 駿 考古研究A 新規本研究の目的は、近世中期の江戸を対象として、都市の緑地の空間利用のあり方を主に文化史・制度史の面からあきらかにすることである。とくに、享保期の江戸における公園の空間の成立は注目したい。これらの空間は、火除地広場や公共の園地に代表されるものであり、享保改革の地域政策と密接な関連をもつて発展する過程をあきらかにした。

## 学会・研究会等の活動

奈文研を会場にして、下記の学会・研究会等が開催された。

### ◆木簡学会

木簡学会は、1996年12月7～8日の両日、第18回研究集会を平城宮跡資料館で開催した（参加者約170名）。今回は韓国出土の木簡をテーマとし、田中俊明（滋賀県立大学）「韓國木簡出土の現状」、李成市（早稲田大学）「韓國出土の木簡について」の報告があつた。また、最近の国内出土事例の報告は以下のとおり。山下信一郎「1996年全国出土木簡概要」、山田真宏（鳥取市埋蔵文化財調査センター）「鳥取市岩吉遺跡出土の木簡」、加賀見省一（兵庫県日高町教育委員会）「竹布ケ森遺跡と出土木簡」、清水みき（向日市教育委員会）「長岡京東一坊大路西側溝出土の木簡」。なお、大会に合わせて「木簡研究」18号を発刊した。（鎌野和己）

### ◆長屋王家木簡検討会

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、1990年度以来、長屋王家木簡検討会をもち、大量に出土した長屋王家木簡・二条大路木簡の仮説にあたるとともに、年に2回の研究会をおこなっている。96年度は2度の仮説検討会と、以下の研究会をひらいた。12月13日：門脇植二（京都橘女子大学）「長屋王家の『家産』経営」・古尾谷知浩「長屋王家の没官」。3月26日：和田翠（京都教育大学）「南山の九頭竜」・佐藤宗諱（奈良女子大学）「長屋王家木簡小考－所とその機能」。なお所外研究者は、堀池春峰（東大寺）・岩本次郎（甲子園短期大学）・鬼頭清明（東洋大学）・東野治之（大阪大学）各氏が仮説検討会と研究会に、直木孝次郎（甲子園短期大学）・門脇植二・狩野久（岡山大学）・間根真隆・佐藤宗諱の各氏が研究会に毎回参加されている。（鎌野和己）

### ◆条里制研究会

条里制に関わる学際的な研究会で、現在会員数は考古学・地理学・文献史学の研究者など約350人。毎年1回の研究大会を開くとともに、研究報告や発掘事例報告

などを収めた会誌『条里制研究』を刊行している。97年3月8～9日には「条里と開拓」をテーマに第13回大会を奈文研で開催した。今後は都市の問題も積極的に取り上げる研究会として発展させようとする提案もなされている。（山中敏史）

### ◆官営工房研究会

12月24日に研究会を開き、柳木謙周（京都府立大学）「首都における手工業の展開」の報告後、質疑・討論をおこなった。柳木氏は、官営工房に限定せず、都城の手工業の問題を、手工業生産の首都への集約という観点から、首都としての特質を見据えつつ、平安時代まで展望した。この報告をめぐって、長屋王家木簡に見える工人たちが長屋王家専属なのか、工人たちの活動軌跡を造構として確認できるのか、官営工房の専属労働者と雇用労働者の賃金支給方法の違いはなぜ生じるのかなどの点を議論した。今後も考古学と文献史学の共同による個別の事例研究を重ねていく予定である。なお、昨年度の研究会の成果を『官営工房研究会会報4』として刊行した。（渡邉晃宏）

### ◆中国建築史研究会

田中淡氏（京大人文研）を中心とする中国建築史研究会を4回開催した。発表は以下のとおり。7月22日：何培斌（香港中文大学）「唐代仏寺－『紙園寺圖經』と敦煌壁畫『淨土變相』小考」、11月18日：楊鴻勛（中国社会科学院考古研究所）「唐長安大明宮含元殿の考古発掘と復原研究の新収穫－平城宮第1次大極殿との相同点－」、3月6日：楊志軍（黒龍江省文物管理局）「渤海海上京龍泉府遺跡の発掘と整備」、3月11日：栗原伸治（総合研究大学院大学博士課程）「窓洞の再分類および固有性」・坂田昌平（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程）「黒龍江朝鮮族の集落と住まい」。（瀬川謙男）

### ◆建築史談話会

建築史談話会は関西の建築史研究者・修理工技術者等の研鑽と交流の場である。以下の研究発表および見学会をおこなった。6月1日：金剛峰寺不動堂修理工事現場見学会。7月13日：酒井一光（大阪市立博物館）「尼張式社殿配置の研究」・黒田龍二（神戸大学）「神戸市北区前中家住宅



講演する柳鴻勛先生（中国建築史研究会）

の解体調査」。10月18日：富島義幸（京都大学大学院）「法成寺の塔について」・藤田盟児（名古屋造形芸術大学）「岡山市域の近世寺社大工の階層性について」。11月8日：本願寺飛雲閣修理工事現場見学会。12月7日：講口正人（名古屋市立大学）「中世即位式と平安宮大極殿」・光井涉（神戸芸術工科大学）「山岸常人著『日本建築の方法論』を斬る」。（箱崎和久）

### ◆古代の土器研究会

歴史時代の土器の様相の解明を目的として活動をおこなっており、1991年からは年1回の割合でシンポジウムを開いてきている。今年度は9月24・25日に第5回シンポジウムを開催し、土師器の煮炊具に関して各地域の事例を検討した。都城で使用する煮炊具は「都城型」と呼べる定型化したもので、その生産者集団は都城の移動にともなって移住せ生産をおこなうことや、地方との交流が明確となるなど多くの成果を得た。（玉田秀英）

### ◆東アジア旧石器研究会

1997年3月23日、奈文研で講演会「東アジア最古の人類文化を求めて」を開いた。講演者は、黄慰文教授（古脊椎動物・古人類研究所）と謝飛所長（河北省文物研究所）。黄教授は広西百色遺跡と貴州大洞遺跡での最新の発掘成果を報告し、謝所長は、泥河湾地区で実践しつつある旧石器研究の方法論と前・中期の旧石器遺跡の調査状況を語った。いずれも最新の中国旧石器研究の成果と問題意識の高さを示した。（加藤真二）

### ◆埋蔵文化財写真技術研究会

7月5～6日の両日、第8回研究会をおこなった。参加者約100名。研究会の時期にあわせ、西安碑林博物館の羅忠民氏を招聘し、講演していただいた。「埋文写真研究」vol.7を刊行。（佃幹雄）

## 調査研究彙報

この1年、以下のような調査・研究・整備事業にもかかわってきた。

旧江戸堀電所（鳥取県江府町）

◆桂離宮の発掘調査 桂離宮庭園整備基本工事にともなう発掘調査を、宮内庁からの委嘱をうけて平成6年度から実施している。平成8年度は、修理対象となつた池の乱抗護岸付近に7ヶ所の小トレンチを設定して、おもに断面観察により護岸の築成状況等の調査をおこなった。この結果、各調査区とも護岸石の抜取り穴等がないことから、それらの部分の護岸はもともと乱抗ないしは草止め等のソフトな材料を用いていたことが判明した。また、大部分の調査区で、当初の護岸より池側に張り出しかたちでの改修がおこなわれている状況があきらかになった。このことから、池全体は築造時よりも、わずかではあるが、抜まっていると推定できる。遺物としては、「千代原 半右衛門」の刻印のある軒平瓦が出土し、江戸時代後半のものとみなされるから、桂山荘への瓦の供給業者についての知見を得ることができた。  
（小野健也）

◆鳥取県の近代化遺産調査 鳥取県の近代化遺産調査は、平成8年から2ヶ年計画ではじまった。近代化遺産とは産業・交通・土木に関わる幕末～戦前の遺産であり、平成2年度から文化庁の国庫補助事業として、各県で調査を進めている。奈文研としては、秋田県につづく2県目の調査になる。初年度はまず、県内市町村全域で悉皆調査をおこない、39市町村から610件の対象物件をリストアップした。これをもとに平成9年1月31日に調査委員会を開き、約100件の詳細調査候補を選びだした。第1回の詳細調査は、3月11日～15日、里西の米子市を中心におこなった。このうち、江府町の旧江戸堀電所は、ルスティカ風の石壁と木造トラス架構の屋根をもつ堂々とした外観の建物である。ところが調査の結果、この石壁は意匠材ではなく構造体であり、大正7

年に建造されたことがあきらかになった。発電関係の備品は撤去されているものの、純石造建造物として貴重な近代化遺産である。平成9年度は2度の詳細調査を実施し、報告書を刊行する予定である。

（稲崎和久）

◆中国黒龍江省におけるオロチヨン族とエヴェンキ族の住居調査 住宅総合研究財團の助成研究「北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究」の第3次調査として、中国黒龍江省の小興安嶺一帯をおとづれ、オロチヨン族とエヴェンキ族の住居を調査した。小興安嶺のツングースは、もともと「仙人柱」とよばれる円錐形テントをもって遊牧する狩猟民だったが、1950年代末からの定住化政策によって、近年は満州族・漢族系の平屋建物に住むようになっている。そこで、各地の平屋建物を実測調査するとともに、狩猟時において今なお使われている「仙人柱」を作ってもらい、その製作過程を記録にとった。興味深いのは、平屋建物の西の協間に作られるコ字形の万字炕と神棚マルの位置関係が、テント内におけるコ字形の座と神像のそれに対応していることである。調査の詳細は、「住宅総合研究財團研究年報」23号で報告した。

（瀬川滋男）

◆ベトナムにおける日本人墓の発掘調査と保存整備 ベトナムのホイアン市には、17世紀中期の日本人墓が残っている。その現状を把握するため、まず実測調査と写真撮影をおこない、さらに墓を発掘調査した。その結果、墓本体がシックイでつくられた3段構造であること、最下段が墓室で現地表下80cmの深さにおよぶこと、第2段までは本来、円形の土盛りに覆われていたこと、現状の第3段は当初のものではなく、内部に当初のものと考えられる亀甲状の第3段が埋め込まれていること、墓石前面には2段のテラス

があつたこと、などがあきらかになった。これらの成果をふまえて、以下の保存整備計画を立案し、ホイアン市の同意を得た。

1)砂岩製の墓石およびシックイ製の墓本体を合成樹脂で強化したうえで、

第2段目までの土盛りを復原する。

2)周囲に墓の保護を兼ねた見学路を新設する。

3)越・仏・英・日4ヶ国語の説明板を設置する。  
（高瀬要一）

◆中ノ庄道跡の整備 奈良県宇陀郡大宇陀町に所在する中ノ庄道跡は、柿本人麻呂が「安智子の件」をして安智野に逐をし、「かぎろひ」をみた頃の建物遺構・池塘構などが確認された道跡である。道跡地は当初、町民プール建設の予定であったが、道跡公園として整備することになり、建物復原・池塘構造整備などとあわせて、故中山画伯の豊作「安智野の朝」の騎馬人麻呂像を原寸の石像彫刻として設置することになった。石像製作の概略手順は、次のとおりである。寸法計画→1/6計画圖→1/6粘土模型→1/6細部模型→原寸粘土模型→型取り→石膏模型→石像彫刻。石材は山東省産の黒雲母の少ない花崗岩とし、原寸模型以降は中国上海市内で製作した。問題は、壁画のイメージを損なわぬ、馬体・装飾などをどこまで7世紀後葉に近づけられるか、一石の鄭刻の荷重を馬の4本足でいかに支えるかであった。半年あまりの短期間であったが、無事竣工をみた。

（加藤允典）

◆名勝「旧大乗院庭園」の整備 3年目となる旧大乗院庭園の整備事業は、合計約600mを引き継ぎ発掘し（年報III参照）、あわせて南3中島の整備を実施した。中島の整備は、3島の景観を残しつつ水際線では1島とする考えもあったが、江戸時代の形状をできる限り尊重する整備方針にしたがって、現状どおり3島として整備することにした。昨年度と同じく、粘土叩きழめ、杭丸太打ち込み、撒き石による渓浜状化性を施した。中島の植栽はサルスベリを残して、その他は伐採し地被に野芝を張った。なお、景石は現代の表土層に据えられているが、当分の間存置することとした。

（加藤允典）

## II-2. 研修・指導と教育

### 埋蔵文化財センターの研修と指導

1996年度は、主に地方公共団体の埋蔵文化財行政担当者を対象にして、下記一覧表の研修を実施した。また、右段の遺跡・建造物等について、調査もしくは整備・修復の指導・協力をおこなった。

(沢田正昭)

区分	課 程	内 容	担当室	実施期日	回数	件数
一般 研修	一般 課 程	遺跡の発掘調査に関する基礎的な知識と技術の研修	研究指導部	7月16日～8月9日	25	30
専 門 研 修	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影に関する必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月20日～9月11日	23	21
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関する必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	9月18日～10月16日	29	6
	遺跡探査課程	遺跡の探査に関する必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	10月22日～10月31日	10	8
	保存科学課程	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	遺物処理室	11月7日～11月21日	15	18
修 整 研 修	環境考古課程	古環境復原研究のため必要な専門的知識と技術の研修	考古学研究室	11月27日～12月11日	15	20
	専門開進遺跡調査実践課程	考古学者が遺跡を復原するため必要な専門的知識と空間的系統を研究する	考古学研究室	1月23日～2月6日	15	35
	遺跡保全課程	遺跡の整備に関する必要な専門的知識と技術の研修	保存工学室	2月13日～3月6日	22	10
特 別 研 修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当する上に必要な遺跡・遺物に関する基礎的な知識の研修	保存工学研究室	7月3日～7月10日	8	34
	遺跡調査課程	石垣遺跡の調査研究に関する必要な専門的知識と技術の研修	考古学研究室	12月17日～12月20日	4	34
	報告書作成課程	読みやすく使いやすい報告書を作成するノウハウの研修	考古学研究室	1月8日～1月17日	10	40
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関する必要な基礎的知識の研修	発掘技術研究室	3月12日～3月19日	8	21
国外人研修	日本文化財と日本の特有ある調査・研究方法の知識の研修	研究指導部	6月6日～6月10日	5	12	

### 日本各地の道路・建造物等に関する指導・協力一覧

#### 発掘調査指導・遺物鑑定・遺構探査

御所野遺跡(岩手)、大戸古窯群(福島)、上郷田府推定地(千葉)、北代遺跡(富山)、般坂大塚古墳・江馬氏城跡下路跡(茨城)、内野二本ヶ谷石塚古墳・ケイセイ遺跡・勝間出城跡(静岡)、三河国分寺(愛知)、西郷手下道跡(福井)、城之越遺跡・宮路跡・長者屋敷遺跡(三重)、栗津洞底遺跡・大鳥山古墳(滋賀)、長岡京跡・紫香楽宮跡・内里八丁遺跡・住友有効園(京都)、池上曾根遺跡・野々上遺跡(大阪)、伊達家墓域(奈良)、武庫庄遺跡・上船跡・大市山遺跡(兵庫)、上長浜貝塚・見石銀山遺跡・加茂岩倉遺跡・三田谷遺跡・古八幡付近遺跡(鳥取)、泰摩寺開通窯跡・万德寺大寺瓦窑跡・門田貝塚(岡山)、冠遺跡(広島)、長登銅山跡・常徳寺庭園(山口)、弘福寺領瀬岐田郡山田村・川原井ノ又遺跡(香川)、栗佐池古墳・伊予国分寺跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、満慈館跡・興福寺御所藏物(福岡)、原の庄遺跡(長崎)、西田植設設地・宇宙貝塚(鹿児島)、内宮田遺跡・塚原遺跡・寺崎遺跡(宮崎)、具志原貝塚(沖縄)

#### 遺跡整備指導・保存処理

福山城(北海道)、御所野遺跡・盛岡城跡・志波城跡(岩手)、私田跡(秋田)、慧日寺跡・上入堀庵寺跡(福島)、平沢官衙道跡(茨城)、飛山城跡・法界寺跡(栃木)、淀沢城跡(群馬)、北代遺跡(富山)、七尾城跡・石堂山大宮跡・山代再興九谷寮跡(石川)、般坂大塚古墳・松崎魔寺遺跡・元生鬼柴院跡(岐阜)、駿河山古墳・三浦平古墳・横須賀城跡・長浜城跡(静岡)、朝倉氏跡(福井)、夏見廃寺・赤城本跡・田平子跡・利賀跡・徳川家幕所・上野城跡(三重)、安土城跡・大君山古墳・芦浦觀音寺・木井古墳群・近江国守跡(滋賀)、丹波国分尼寺・大覚寺御所跡・椿木井山古墳・津田岡古墳(京都)、心合寺山古墳・千里城跡・楠木城跡・赤阪城跡(大阪)、赤穂城・感狀城跡(兵庫)、大安寺・中之庄道跡・常陸守家雀大路・藤ノ木古墳・夫乘院庭園・ナガ山古墳・キトラ古墳・須坂・水落石神遺跡(奈良)、桜山古墳・伯耆御所跡・尾高浅山遺跡・鳥取城跡・糸田太平(鳥取)、津山城跡・同山城跡・鬼城山・山町堀遺跡(岡山)、奥阿武守刑判跡(山口)、有岡古墳群・丸龜城跡・石清水山古墳群(香川)、宇和島城・丸龜城跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、大野城跡・太宰府城門・日拝塚古墳・前原市文化財整備(福岡)、名護屋城跡(佐賀)、大村横穴群・つづじヶ丘横穴群(熊本)、元町石仏・石造文化財・龜塚古墳(大分)、清水磨崖仏(鹿児島)、都城市出土遺物(宮崎)、フルスト原遺跡・鳴場御殿・伊礼伊森原遺跡(沖縄)

#### 建造物・庭園の修復と整備

天神社(秋田)、加多志波神社(福井)、兵主神社庭園(滋賀)、鹿苑寺庭園・滴翠園(京都)、旧トマス住宅剥離対策・明石公園石垣害復旧(兵庫)、興翠園(和歌山)、黒知事公舎解体(鳥取)

## 京都大学大学院 人間・環境学研究科

文化財に関する高等教育は、これまで考古学・建築史学・文献史学・庭園史学・美術史学、あるいは理科系の関連分野など、大学における各教育部門によって個別におこなわれてきた。しかし、文化財の調査研究者を育成するためには、各専門分野の枠を超えた学際的な研究、文化財の実物にじかに接した調査・観察や分析をともなう教育がますます必要になっている。文化財学の類の大学教育課程が新設され始めたのは、そうした動向を反映しているが、文化財に関する教育の場としてはまだ一部に限られており不十分である、という現状にある。

そうしたなかで、当研究所も、文化財行政に資する研究機関として埋蔵文化財、建造物、文献史料、庭園などの調査研究を推進しながら、その成果を学生らに習得させる活動を一部でおこなってきた。しかし、文化財の高等教育に対する近年の社会的要請の高まりに応じ、教育機能を充実させることも急務の課題となっていた。そこで1994年、京都大学に大学院人間・環境学研究科が設置されるのを機会に、文化・地域環境学専攻の環境保全発展講座の客員分野を京都国立博物館とともに担当することになったのである。1997年4月現在、奈文研からは6名が客員教授・助教授に併任され、住環境保全論（山中敏史・浅川滋男）、考古環境学論（町田章）、文化財保存科学論（沢田正昭）、文化財保存調査方法論（光谷拓実・松井章）、各講義・演習・実習を担当している。

講義や演習の内容は次のとおりである。山中：日本歴史考古学の分野から、日本古代の遺跡の分析を通じて、律令国家の歴史的特質や各地域の諸環境と国家による地方支配との関わりについて考察する。浅川：民族・考古・建築史学の分野から、日本およびアジア諸地域の歴史的居住環境の現状を把握し、その保全の実態と方向性を論じる。町田：中国考古学の分野から、洛陽永寧寺の発掘調査報告書を取り上げ、中国における発掘・遺跡の保存について検討する。沢田：文化財保存科学の分野から、文化財資料の理化学的分析・保存修復に関する研究の方針を論じる。光谷：木材組織学・年輪年代学の分野か

ら、出土木材の樹種同定、年輪年代測定作業を通じて、考古学との共同研究を推進するとともに、古環境復元をおこなう。松井：環境考古学の分野から、動物遺体・土壤分析に関する研究書の講読や資料分析により、人間の生活・環境を復元する。講義は、各自原則として週一回京大でおこない、他講座の学生も受講している。演習・実習などは主に当研究所などでおこなっている。実習としては、平城宮・藤原宮などの発掘調査や遺物の整理、アジア少数民族住居などの現地調査、全国各地の文化財資料の理化学分析や保存修復、樹種同定や年輪測定、自然遺物などの採取や種の同定作業などをおこなっている。

入学希望者はあらかじめ志望する指導教官を決めて、前期または後期の試験を受ける方式となっている。奈文研客員分野の学生定数は各学年2名であり、毎年数名が入学している。1997年4月現在の学生数は、山中：修士課程2年1人、浅川：研究生1人、町田：博士課程1年1人、修士課程1・2年各1人、研究生1人、沢田：博士課程2年1人、修士課程1・2年各1人、松井：博士課程2年1人、修士課程2年2人、修士課程1年1人、である。研究生はいずれも留学生である。修士論文の作成などにおいては、現状では各教官が自分の所に志望してきた学生をそれぞれ個別に指導するシステムになっている。そのため、担当授業科目名と実際の授業内容との隔たりや教官の専門分野の違いなどによって学生にとまどいが生じないように、できるだけ受験以前あるいは入学以前に志望学生と教官との意志疎通を図るよう心がけている。今後もそうした場を設けることが必要であろう。

この大学院教育が始まって3年を過ぎ、学生数も増え、奈文研における文化財教育の役割は増大している。そして、実際の資料に接した教育の必要上、奈文研客員分野の学生は修学期間の大半を当研究所内で過ごすことになる。こうした実態を踏まえ、教育効果を高めるためには、今後、学生を早く受け入れる体制が「研究所全体としてハーフ面でもソフト面でも十分整備されることが望まれる。また、奈文研の各研究員が、学生のニーズに応え、各自の専門分野を活かし相互に補完しあいながら教育にあたれるとすれば、当研究所で文化財の高等教育を実施する大きなメリットとなると思われ、こうした体制づくりも必要であろう。

(山中敏史)

## II-2. 研修・指導と教育

### 埋蔵文化財センターの研修と指導

1996年度は、主に地方公共団体の埋蔵文化財行政担当者を対象にして、下記一覧表の研修を実施した。また、右段の遺跡・建造物等について、調査もしくは整備・修復の指導・協力をおこなった。

(沢田正昭)

区分	課 程	内 容	担当室	実施期日	回数	件数
一般 研修	一般 課 程	遺跡の発掘調査に関する基礎的な知識と技術の研修	研究指導部	7月16日～8月9日	25	30
専 門 研 修	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影に関する必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月20日～9月11日	23	21
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関する必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	9月18日～10月16日	29	6
	遺跡探査課程	遺跡の探査に関する必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	10月22日～10月31日	10	8
	保存科学課程	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	遺物処理室	11月7日～11月21日	15	18
修 整 研 修	環境考古課程	古環境復原研究のためには必要な専門的知識と技術の研修	考古学研究室	11月27日～12月11日	15	20
	専門開進遺跡調査実践課程	考古学者が遺跡を復原するためには必要な専門的知識と実務的な実習を研修	考古学研究室	1月23日～2月6日	15	35
	遺跡保全課程	遺跡の整備に関する必要な専門的知識と技術の研修	保存工学室	2月13日～3月6日	22	10
特 別 研 修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当する上に必要な遺跡・建造物等に関する基礎的な知識の研修	保存工学研究室	7月3日～7月10日	8	34
	遺跡調査課程	石垣遺跡の調査研究に関する必要な専門的知識と技術の研修	考古学研究室	12月17日～12月20日	4	34
	報告書作成課程	読みやすく使いやすい報告書を作成するノウハウを研修	考古学研究室	1月8日～1月17日	10	40
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関する必要な基礎的知識の研修	発掘技術研究室	3月12日～3月19日	8	21
外 国 人 研 修	日本文化財と日本の特徴ある調査・研究方法の知識の研修	研究指導部	6月6日～6月10日	5	12	

日本各地の道路・建造物等に関する指導・協力一覧

#### 発掘調査指導・遺物鑑定・遺構探査

御所野遺跡(岩手)、大戸古窯群(福島)、上郷田府推定地(千葉)、北代遺跡(富山)、般坂大塚古墳・江馬氏城跡下路跡(茨城)、内野二本ヶ谷石塚古墳・ケイセイ遺跡・勝間出城跡(静岡)、三河国分寺(愛知)、西郷手下道跡(福井)、城之越遺跡・宮路跡・長者屋敷遺跡(三重)、栗津洞底遺跡・大鳥山古墳(滋賀)、長岡京跡・紫香楽宮跡・内里八丁遺跡・住友有効園(京都)、池上曾根遺跡・野々上遺跡(大阪)、伊達家墓域(奈良)、武庫庄遺跡・上船跡・大市山遺跡(兵庫)、上長浜貝塚・石見銀山遺跡・加茂岩倉遺跡・三田谷遺跡・古八幡付近遺跡(鳥取)、泰庵寺開通室跡・万德寺大寺瓦窑跡・門田貝塚(岡山)、冠遺跡(広島)、長登洞山跡・常徳寺庭園(山口)、弘福寺領瀬岐田郡山田村・川原井ノ又遺跡(香川)、栗佐池古墳・伊予国分寺跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、満慈館跡・興福寺宝物所藏物(福岡)、原の庄遺跡(長崎)、西田植設設地・宇宙貝塚(鹿児島)、内宮田遺跡・塚原遺跡・寺崎遺跡(宮崎)、具志原貝塚(沖縄)

#### 遺跡整備指導・保存処理

福山城(北海道)、御所野遺跡・盛岡城跡・志波城跡(岩手)、私田跡(秋田)、慧日寺跡・上入堀庵寺跡(福島)、平沢官衙道跡(茨城)、飛山城跡・法界寺跡(栃木)、淀沢城跡(群馬)、北代遺跡(富山)、七尾城跡・石堂山大宮跡・山代再興九谷寮跡(石川)、般坂大塚古墳・松崎魔寺遺跡・元生鬼柴院跡(岐阜)、駿河山古墳・三浦平古墳・横須賀城跡・長浜城跡(静岡)、朝倉氏跡(福井)、夏見廃寺・赤城本跡・田平子跡・利賀跡・徳川家幕所・上野城跡(三重)、安土城跡・大君山古墳・芦浦觀音寺・木井古墳群・近江国守跡(滋賀)、丹波国分尼寺・大覚寺御所跡・椿井大塚山古墳・丹波国古墳(京都)、心合寺山古墳・千里城跡・楠木城跡・赤阪城跡(大阪)、赤穂城・感狀城跡(兵庫)、大安寺・中之庄道跡・常陸守家雀大路・藤ノ木古墳・夫乘院庭園・ナガ山古墳・キトラ古墳・須坂・水落石神遺跡(奈良)、桜山古墳・伯耆御所跡・尾高浅山遺跡・鳥取城跡・糸田太平(鳥取)、津山城跡・同山城跡・鬼城山・山陽町遺跡(岡山)・奥阿武守刑判跡(山口)、有岡古墳群・丸龜城跡・石清水山古墳群(香川)・宇和島城・丸龜城跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)・大野城跡・太宰府城門・日拝塚古墳・前原市文化財整備(福岡)・名護屋城跡(佐賀)・大村横穴群(熊本)・元町石仏・石造文化財・龜塚古墳(大分)・清水磨崖仏(鹿児島)・都城市出土遺物(宮崎)・フルスト原遺跡・鳴場御殿・伊礼伊森原遺跡(沖縄)

#### 建造物・庭園の修復と整備

天神社(秋田)・加多志波神社(福井)・兵主神社庭園(滋賀)・興善寺庭園・満翠園(京都)・旧トーマス住宅庭園対策・明石公園石垣害復旧(兵庫)・興翠園(和歌山)・黒知事公舎解体(鳥取)

## II-3. 遺跡整備・復原事業と展示

### 平城宮跡・藤原宮跡等の整備

平城宮内では、4年度目をむかえた朱雀門と東院庭園の復原事業が佳境に入った。また、宮内省の築地と南門の復原が完了したほか、若干の施設整備をおこなった。

#### 1. 朱雀門の復原事業

昨年度までに、二重の組物まで組立が完了した。本年度は引き続き二重の組立をおこなった。まず隅木、地垂木、飛檐垂木を取り付け、軒廻りの組立をおえた。次に軒の垂下を防ぐための桔木をえ、その上に小屋組を組み上げた。年度末までに野垂木を打ち上げ、野地板を打ちおえた。塗装工事として、初重の組物廻りの丹土塗りをおこなった。屋根工事として、平瓦、丸瓦、軒先平瓦、軒先丸瓦等を必要量焼きおえ、現場に搬入した。素屋根の北側にある仮設作業場において、鶴尾や降棟、隅棟の

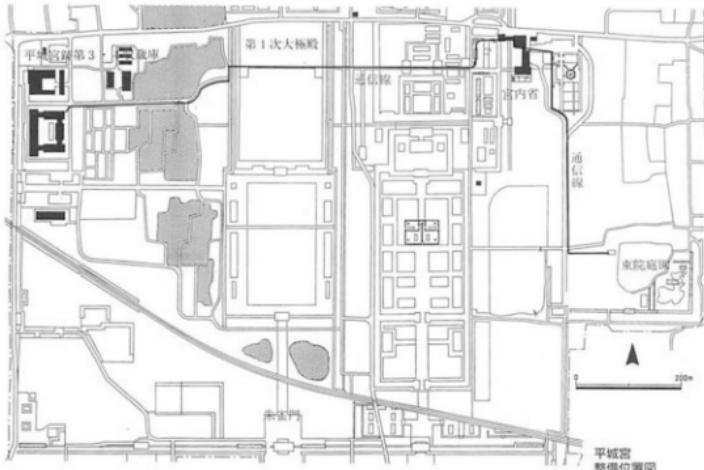


朱雀門復原工事（二重尾根下地まで組立完了）

納まりを検討するため、二重の妻部分の実大屋根模型を作成した。この結果、降棟の先端の鬼瓦は中世以降は平瓦の筋に据えられるが、発掘鬼瓦の形状から丸瓦筋の可能性が強いことが判明し、次年度の施工時においてもこれを実施することとするなど、いくつかの新知見を得た。また、構造補強工事として、初重の耐震壁廻りの鉄骨、小屋組の筋かい廻りの金物の製作をおこなった。このほか、研究所の方で鶴尾、風鐸、隅木口等金物の模

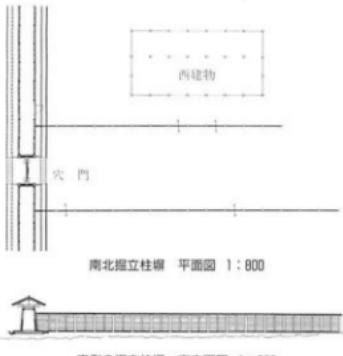
型を作成し、形状などについて検討をおこなって実施案をかため、次年度発注に備えた。なお、復原工事現場の一般公開を春（5月3～5日）と秋（10月8～11日）の2回実施し、いずれも1万人をこえる訪問客でにぎわった。

（村田健一）

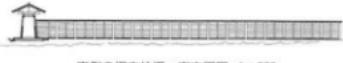




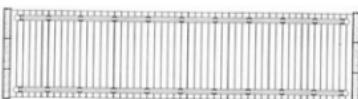
東院庭園全体図 1:4000



南北掘立柱構 平面図 1:800



東側の掘立柱構 東立面図 1:800



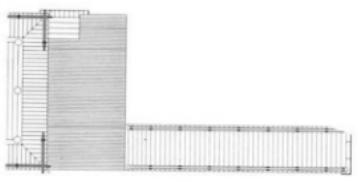
反橋 平面図 1:200



反橋 断面図 1:200



平橋 平面図 1:300



平橋 断面図 1:300

## 2. 東院庭園の復原事業

**庭園の整備** 園池を中心とする庭園の復原整備をおこなった。復原するのは後期東院庭園で、建物を含めた庭園空間全体の復原を目指す。基本の方針はつぎのとおりである。まず、園池部分では北築山や各出島・岬の景石を現状のままの露出展示とし、他の園池部分は上層（後期東院庭園）の造構面+10cmを仕上げ面とした実物大復原とする。それにともない、計画水面高は造構園池の推定水面高+10cmの標準61.25mとする。景石補充は、あきらかに景石の抜取穴と判断できる穴のみをおこなう。園池周縁部や陸部など、上層造構面が削平されていた部分については、地形を推定復原し造成する。植栽は、樹種を出土植物遺体や文献史料等から選定し、位置を樹木抜取穴と推定できる穴および庭園の景観上適切な場所とする。

上記の復原整備方針にもとづき、本年度は、以下の具体的な手法で復原整備工事を実施した。

①造構面保護：園池造構面には全面に透水性土木シートを敷く。②地形造成：発掘調査で下層まで掘り下げていた部分は上層造構面のレベルまで嵩上げ造成。造構が削

平された園池周縁部や陸部は、復原建物のレベルと調整しながら推定復原造成。③園池仕上げ：原則として上層造構面+10cmが仕上がり高となるよう疊敷き。このさい、造構で確認できる渕浜の勾配や疊の寸法に基づいた施工につとめる。④景石の取扱：北築山をはじめ各出島・岬等に残存する景石は、合成樹脂による保存処理をおこなったうえ露出展示。景石補充は、残存する景石の石質や形状を参考に、石を選定し据え付ける。⑤園池給排水：給水は地下水汲上げ（宇奈多理神社西方の井戸）と循環の併用。給水量は750L/min。給水口は造構園池本末の北東部からの給水のほか、滯水がないよう園池内に給水管を9箇所埋設。排水は南東部の本末の排水路のみとし、ポンプによる循環とオーバーフロウによる放水を併用。

**東院庭園の復原建物** 1996年度は中央建物が竣工し、平橋・反橋・南北掘立柱構・西建物の復原をすすめた。西建物の復原検討については別項（24～25頁）とし、復原建物の概要を記す。なお、これらの復原造営基準尺は南北板塀で1尺=30.0cm、それ以外は1尺=29.6cmである。⑥平橋：第99次調査で検出したSC8465である（『年報



宮内省全景（西南よりみる）

1977<sup>1)</sup>)。桁行4間、梁間1間の掘立柱による東西橋で、柱間寸法は梁間8尺、桁行12尺等間で東端間のみ10尺となっている。中央建物露台とその東面壁をつなぐ平橋である。柱は中央建物縁東の出土柱根にならう八角形断面とし、径は8寸とした。橋の偏心止めのため火打梁を入れた。床板は『信貴山縁起絵巻』に描かれた橋にならう面取りを施した。高欄は東大寺法華堂・薬師寺東塔、親柱は平等院鳳凰堂にならう擬宝珠は第32次調査出土の瓦製擬宝珠にならう瓦製とした。基礎はRC造で柱穴掘形を利用した独立基礎とし、基礎相互はステンレス綱で緊結した。柱脚との接続はアンカーボルトによった。

②反橋：第99次調査で検出したSX8453である。桁行5間、梁間1間の掘立柱による南北橋で、柱間寸法は桁行中央および両脇間9尺、両端間8.5尺で、梁間9.5尺である。これを北東建物の南に南北に架かる反橋と考えた。反橋とする根拠は、平橋と桁行総長はほぼ同じだが、桁行を5間に分割し柱間を狭くする柱配置が、反橋の曲折点を反映する可能性があると解釈したためである。古代の反橋は現存例がないが、正倉院御物『黒繪山水図』に描かれており、奈良時代にも反橋が存在したことがわかる。柱は八角形断面で径は6寸、橋の反りはR=30mとした。基礎は柱穴掘形に埋設したRC造の独立基礎とし、基礎相互は梁間方向は枕で、桁行方向は見え隠れとなることからステンレスプレートを用いて緊結した。柱脚との接続は柱脚根元に貫を通し、それを柱両側の基礎に緊結してある枕にとりつけた。

③南北掘立柱堀：第120次調査で検出したSA9289、SA9320Bである（『年報1980』）。両掘立柱堀は庭園の西を区

画する施設であり、南端は南面大垣にとりつく。全長は東の堀SA9289で16間（48.15m）、西の堀SA9320Bで13間（39.15m）。柱間寸法はいずれも10尺等間で、柱径は出土柱根から1尺とした。構造形式は伊勢神宮内宮板垣にならう、頭貫上に笠木をのせた形式の板塀とする。柱間には中束をいれ、壁体は横板落込み式とした。棟高は10尺である。扉口は庭園内遊歩者の動線や視線などを考慮して、東の堀では南端から2間目と11間目、西の堀では同じく8間目と10間目とした。（小野健吉・西山和宏）

### 3. 宮内省築地塀および南門の復原事業

昨年度の築地塀版築部分の施工にひき続き、今年度は築地塀の屋根部分と南門の施工をおこない、両端部をのぞいて南面部分を完成させた。南門復原にあたっての建築的な考察と整備方針は、前年度に述べたとおりである。門、築地塀とともに施工の仕様はさきに復原した北面にならったが、築地塀の版築については、新たな実験的要素を加えている。ひとつは、地下からあがる水分に対して適度な遮湿性をもたらせるため、一部をのぞいて築地底部の両側へ幅0.5mにアスファルト舗装用遮水層のシールコートをほどこしたことである。もう一点は、版築の施工性、仕上がり、耐久性などを探るために、築土の配合を築地塀の各間にによって変えたことである。今後、長期にわたって観察していく予定である。（木村 勉）

## ハーフタイム M E M O

### ◆おめでとうございます！

・中山敏史さん（埋蔵文化財センター）は、「古代官衙に関する考古学的研究」により、第9回浜田青陵賞を受賞されました。

・光谷拓実さん（埋蔵文化財センター）は、「樹木年輪による年代測定法」の完成により、第31回吉川英治文化賞を受賞されました。

・館野和己さん（平城宮跡発掘調査部）は、論文「日本古代の交通と社会」によって、京都大学から博士（文学）の

学位を授与されました。

・肥塚隆保さん（埋蔵文化財センター）は、論文「日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究」により、東京芸術大学から博士（美術）の学位を授与されました。

### ◆所員の出版物アカルト

至文堂の「日本の美術」シリーズから、金子裕之「まじないの世界I」、巽淳一郎「まじないの世界II」、岩永省三「弥生時代の装身具」、町田章「古墳時代の装身具」など、所員の著作が続々

と刊行されています。そのほか、以下のような著作が刊行されました。

- ・金子裕之「本簡は語る 歴史発掘12」講談社、1996年5月
- ・岩永省三「金属器登場 歴史発掘7」講談社、1997年1月
- ・町田章（編）「考古学による日本歴史5 政治」雄山閣、1996年11月
- ・田中琢（編）「古都発掘」岩波新書、1996年11月
- ・田中琢（共編）「新版角川日本史辞典」角川書店、1996年11月

#### 4. 第1次大極殿の基本設計と構造実験

**基本設計と構造実験** 前年度の成果をふまえて基本設計全体計画の見直しをはかり、設計最終年となる本年度におこなうべき調査検討項目を定めた。今後、具体的な実施計画をすめるにあたっての検討材料となる市場調査、仮設計画と防災計画の検討、原案に基づく構造実験、原案の構造チェックと問題点の指摘、補強案の検討などである(表参照)。設計及び構造実験を簡文化財建造物保存技術協会に委託し、実験は農林水産省森林総合研究所、財日本住宅・木材技術センターの協力を得た。

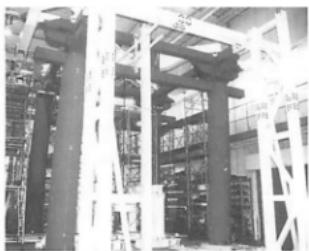
**基本設計における原案検討の成果と課題** とくに耐震対策面から、実施の構造・工法にふたつの方向が考えられた。ひとつは従来の耐震工法である。吹き放ちとなって

いる正面の主要な独立柱を鉄骨に置き換える、残る三面の壁は金属板併用の積層耐震壁とし、さらに全体的に重度の補強が必要とされた。もうひとつは基礎部分に免震装置を採用する方法である。この場合はおおむね原案の木構造が保たれ、補強も前者に比べて軽度化が可能との結論に至った。大極殿復原の根本方針は当時の建築そのものの再現をめざすものである。本米の構造形式による古代建築を計画し、そのうえで、避けては通れない現代建築としての安全対策を、基礎の免震装置によってかなりの部分を負わせることができる後者の方向で今後の設計をすすめることとした。

ただし、原案には細部に構造や納まりの問題点、力学上からの弱点などもあることが同時に指摘された。尾垂

表 平成8年度第1次大極殿基本設計成果概要

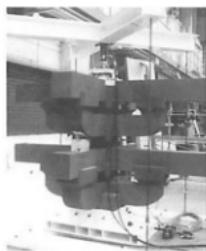
項目	目的	検証	結果
市場調査	石材、木材、瓦等の市場動向を調査し材料入手の可能性、状況をさぐる。	各組合、林野庁等に問い合わせ。	・石材：規格外の巨石は多数の入手が困難。 ・木材：蓄積量はあるが、短期に大量入手は不可能。計画購入が必要。
仮設計画	問題点のあらい出し。①計画の基礎資料の作成 ②造構の保存対策評定に対する準備・検討。	工事にもなるよう計画。	背後が狭く、素屋根工法の検討が必要。搬入道路の検討、環境調査が必要。
防災計画		現在の復原のみでは用途が特定されないので、法的拘束は必要なし。	自動的計画が必要。 今後、活用にもなるよう検討が必要。
構造実験 実大実験体による耐力実験	伝統的木組がもつていてる耐力の測定。	実大試験体によって耐力実験を行い、基礎データを得る。	期待していた耐力の確認。ねばり強い復元力をもつている。はじめてこの種の構造の力の伝達等のデータも得た。想定耐力を得、木材の損傷も少なくできる。有効利用が可能。
新工法の開発	接合部のボルトによる断面欠損を減らすためのカーボン繊維による補強。	実験によって破壊状況や耐力等のデータを得る。	想定している栓材がもつていてる耐力は、農林規格より高く、その値の採用を検討。
材料試験	材料を選択する上によって農林規格を上回る耐力を得れば採用しない。	実験によって確実なデータを得る。	計画中。
地盤の振動調査	長周期の振動特性と深層部分の地質構造の解明・把握。	地下100mでの地震計の設置。	
原案の構造チェック・構造計画の検討(構造診断・風洞実験等のデータの追加)	H7年度の設計に基づく構造的問題点、対応策をさぐる。	全体のバランス的かつ戦略的な構造解析。	・原案の弱点、方針の検討と補強案 ・免震装置の有効性



梁橋の実大実験による耐力試験



同左 頂部組物部分



組物のみ全体の実大実験

木の断面不足により軒が垂れる、母屋と庇の柱頭を繋ぐ組物形式や柱位置にずれのある上・下層の軸組は力の伝達が著しく不安定、屋根荷重が小屋梁や虹梁にかかり変形が生じやすいなどの点である。今後、これらを建築歴史的な構造技法面から再検討することにした。

(木村 勉)

### 5. 施設整備その他

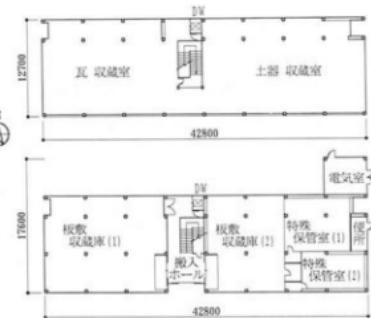
**平城宮跡通信線改修工事** 平城宮跡における通信（防災・防犯・情報）システムは老朽化による通信障害が頻発しており、緊急時に支障を及ぼす懼れがあるため改修をおこなった。平城宮跡通信システムは宮跡内の施設換点となる資料館地区・覆屋地区と今回整備をおこなった東院地区を地中埋設線にて本庁舎へ接続し集中管理する計画である。朱雀門地区については、鉄道線が障害となるため、別途電話回線を介して本庁舎に接続する。本事においては、造構保護と配線保護の両面からセラミック製多孔陶管を敷設し、このなかに通信システム配線と電力供給配線を集約設置した。

**本庁舎漏水防止等工事** 本庁舎は昭和39年に建設され、その後昭和53年に改修工事が施されているが、その改修から17年が経過しており、経年劣化による損傷は建物全体におよんでいる。とくに建物南面斜路部分外壁の損傷がいちじるしく、漏水による内装材剝離等を生じている。これは、外壁仕上げ吹付材の劣化およびモルタル層のひび割れ・浮きに起因しているものであり、本事において、外壁の漏水防止および内装改修をおこなった。改修工法は、周辺研究・研修施設への騒音・塵埃等の影響を考慮し決定した。

- 外壁：モルタル層のひび割れ部改修【ひび割れ部カット工法】  
Uカット・シリコン系シーリング材充填
- 外壁：モルタル層の浮き部改修【浮き部アンカーバーニング工法】  
ステンレスアンカーバー・エボキシ樹脂注入
- 外壁：仕上げ材【外壁面替え工法】  
高圧洗浄・可とう形薄塗材（弹性リシン）
- 内装：床 ピニル床シート／ノンスリップ形  
壁天井 合成樹脂エマルションペイント

**飛鳥資料館第2展示室改修工事** 第2展示室は山田寺回廊再現展示室として計画したが、ドーム状曲面天井のため残響過多による音響障害が生じていたので、天井・壁仕上げを改修し吸音処置を施した。空室の状態で2.5~3秒程度であった残響時間を、1.9秒程度に抑制した。

天井：ロックウール吸音板 壁：ロックウール吸音板



飛鳥藤原宮跡発掘調査部第2収蔵庫平面図  
1階平面図(下) 2階平面図(上)

**飛鳥藤原宮跡発掘調査部第2収蔵庫新営工事** 発掘調査の進展にともない出土遺物がいちじるしく増加したため収蔵庫を増築した（上図参照）。平成7年度現在において出土遺物量は、32,600箱に及んでいる。全体計画では、延べ床面積2,430m<sup>2</sup>、収蔵面積2,218m<sup>2</sup>（収蔵量26,600箱）を計画していたが、平成7年度の補正予算によって、全体計画の約半分にあたる延べ床面積1,101m<sup>2</sup>、収蔵面積938m<sup>2</sup>（収蔵量11,300箱）が竣工した。これにより、現在未収蔵の4,760箱をおさめるだけでなく、今後約3年分の収蔵が可能となる。建物外観・形状・仕上は、周辺既存建物との景観調和を基本に、また、平面配置・利用動線・内部仕上仕様等は、効率的運用を考慮した。

- ◆工事概要  
鉄筋コンクリート造2階建 延べ床面積：1,101m<sup>2</sup> 建築面積：564m<sup>2</sup>  
構造形式：ラーメン構造・直接基礎
- ◆外部仕上  
屋根：瓦葺き 外壁：中空押出成形セメント版外装薄塗材  
せっせつ器質タイル100角張り 柱笠・梁型コンクリート打放  
外装薄塗材E・アルミニウム製具
- ◆内部主要諸室仕上  
模数収蔵室：床天然木化粧合板 壁コンクリート打放塗料  
天井軽量石膏吹付  
特設保管室：床・壁天板張り 天井特殊合板張り  
搬入ホール・階段：床磁器質タイル200角張り  
壁せっせつ器質タイル100角張り モルタル塗内装薄塗材E

**平城宮跡第3・4収蔵庫屋根改修工事** 第3収蔵庫は昭和50年に建設され20年が、第4収蔵庫は18年が経過しており、鉄骨造鉄板葺であることから劣化が進んでいる。とくに屋根の損傷がいちじるしく、漏水により収蔵に支障をきたしているため、平成7年度補正予算で改修をおこなった。工法はカバー工法とし、既設屋根鋼板のうえに屋根用折板（フッ素樹脂塗装銅板）葺きとした。

(今西康益・栗林貞弘・上垣内茂樹)

## 飛鳥資料館特別展と 山田寺回廊再現

### ◆春期特別展示「山田寺東回廊再現にむけて」

展示は1996年4月16日～5月26日の期間に実施した。山田寺の歴史的調査は1976年に始まり、塔跡から金堂、講堂跡と進行、1982年東回廊を発掘したところ、回廊の建物本体が、横倒しに地中に埋もれた状態で姿をあらわした。回廊は東から西にむかって倒れ、そのまま粘土と砂の層に封印されて、奇跡的に1000年以上も地中に保存されたもので、最初期の日本仏教寺院の貴重な実物資料となる。その後の数次にわたる発掘作業の結果、1000点以上の建築部材が出土したが、すべての部材は長い年月のあいだに、脆弱になり多量の水分を含んで、このまま乾燥すれば、収縮、変形して原形を失う状態になっていた。貴重な資料を後世に伝え、研究資料として活用するためには、科学的保存処置が必要とされた。PEGを含浸する処理には10年以上の歳月が費やされ、主要な部材の保存処置は1995年になって、ようやく完成する。保存処理の終わった部材は、飛鳥資料館で組立て、地上に建っていた姿を再現する計画があり、その準備作業も含めて、発掘から10余年ぶりに全貌をあらわした山田寺東回廊の部材を、地面に横たわった出土時の状態にならべ、細部の観察が可能なかたちで一般の観覧に供するとともに、回廊発掘調査の経緯を振り返る展示をおこなった。

### ◆秋期特別展示「齊明紀」

展示は1996年10月8日～11月24日の期間で実施した。齊明天皇の治世は、大化の改新（乙巳の変）後の飛鳥の政治制度の大きな変換点となる時代だった。同時に国内的には阿倍比羅夫の遠征の記録が示すように、東北地方の経営が精力的に進められていく。国際情勢も、唐、新羅の勢力に対抗して百濟を救援しようとする動きなどにみられるような、激動のさなかにあった。

飛鳥の地には、板蓋宮、饗宴の広場とみられる石神遺跡、わが國最初の水時計の遺構、水落遺跡、両櫛宮との関連が注目される酒船石周辺遺跡など、齊明天皇にゆかりが深い遺跡が数多く残されている。この展示では、こ

ういった飛鳥の遺跡のいくつかを取り上げ、その意味するところを考えるとともに、遺跡や出土遺物を通して、この変動と改革の時代の雰囲気を再現する展示を試みた。

### ◆山田寺東回廊再現

回廊は、資料館第2展示室の常設展示として再現された。全長で87m、23間あった東回廊のうち、部材の残りが最も良好だった、北から数えて13・14・15番目の3間分を再現展示している。この部分では、柱・連子窓・頭貫などの軸部は、部材がよく残っていて、展示は当初の形式をほぼ完全に復原している（口絵参照）。虹梁から上の架構部については、部分的に残された資料から、想定復原をおこなって新材におきかえている。PEGをしみこませた部材は非常に重く、本来の強度も失われている。一点一点の部材は銅鉄の枠からばした腕できさえ、上部の加重をうけない形にする必要があり、連子側柱筋内側に設けた支持枠はかなり大きなものとせざるを得なかった。柱や東の一部など、まだ科学的な保存処理のすんでいない部位については、将来、処置の完了をまってこの展示に組み込んで、展示の充実をはかっていきたいと考えている。

### ◆特別講演会その他

特別展示にあわせ、以下の特別講演会を開催した。

- 1996年5月11日 工藤圭章「山田寺の建築と保存」
  - 1996年10月26日 猪熊兼勝「齊明朝の飛鳥」
  - 1996年11月2日 今泉隆雄「齊明朝の東北」
- また、特別展示の図録として、『山田寺』『齊明紀』の2冊の図録を刊行した。このほか、陳列品として『猿石』を購入した。

今年度の総入館者数は85,161人で、その内訳は下表を参照されたい。なお、飛鳥資料館では、インフォメーション・ルームにおいて、観覧者の質問に応じている。

(岩本圭輔)

入館者数(1996.4.1～1997.3.31 開館日数314日)

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	27,012	9,441			
高・大生	3,230	8,934			
小・中生	5,891	24,539	79,047	6,114	85,161
計	36,133	42,914			

◆ほんの紹介◆

# 『古都発掘—藤原京と平城京—』

田中 琢編（岩波新書468、1996年11月刊、242頁、680円）

岩本 次郎

年報編集者からこの著作紹介の執筆要請をうけたときには、戸惑いを感じ得なかった。しかし、かつて太平の間、禄を食んでいた者としては、報恩の一端にでもなろうかということと、年報の記録性に惚れて、研究所員のみの執筆による刊行物を記しておこことは、意義があることと考えた。そこで要請をひきうけたしだいである。まず、本書の構成に触れておこう。テーマに統いて括弧内に内容の要点と執筆者名を示す。

## ◆第1部 藤原京

1 都市の時代がはじまる（藤原京は大宝令の制定、和同開珎の発行、道唐使の復活が行われ日本最初の本格的計画都市 黒崎 直） 2 造営はいつから（645年の遷都の約10年前から黒崎 直） 3 宮の位置をめぐる論争（大宮土壇=藤原宮大極殿への定着 上原真人） 4 大きさはまだ決まらない（伴我男親と「大藤原京説」 大輔 順） 5 都市名はなかった？（『日本書紀』に「藤原京」の語なし 横木義則） 6 消えた古墳（横穴墓を埋して造営 次山 淳） 7 造営用材の調達（近江・田上山から水路経由 上原真人） 8 ミンステルリート=朱雀大路（路幅27.7m、東西両側溝幅7.1m、側溝中心距離24.8m 深澤芳樹） 9 宅地のありさま（右京7条1坊の貴族邸=深澤芳樹） 10 市は二か所か、二か所か（宮の北側の米川沿いに二か所西口生田） 11 ティレはこうしていたか（くみ取り式と水洗式 黒崎 直） 12 瓦葺きの宮殿（日本最初の宮殿使用 佐川正敏） 13 瓦工場の軒元（香川県一温賀県の6地域10か所以上 花谷 達） 14 宮を開む大垣（高さ5.5m、総延長約3.7kmの一本柱土壁 黒崎 直） 15 金剛が教える門号（宮城十二門の名前確定 西口生田） 16 構造がわかった二つの役所跡（西方官衙馬寮と内裏司・官衙馬連の松村忠司） 17 どんな役所があったか（六院・膳職などから八省へ 古尾谷知浩） 18 医療を担当する役所（薬事本草と内裏司・膳職 黒崎 直） 19 論争に決着をつけた木簡（詳から都へ 錦野和己） 20 皇子の邸宅（天武天皇の諸皇子の宮跡 藤井兼勝） 21 貢入の墓（京の南から南北に配置 金子裕之） 22 大郡が始めた理由（任地から脇の脇元 上原真人） 23 初めての貨幣（無文銀銭→和同開珎・銀銭→和同開珎・銅錢 大橋潔） 24 魔除け・福招の銭貨（「富本」銭の意味 金子裕之） 25 最古の人形（削製人形は天武の病氣治療祈願 金子裕之） 26 まじない札の発見（陰陽道のループを示す 松村忠司） 27 藤

原京はなぜ短命だったか（道唐使の最新情報を探用 黒崎 直） 28 道唐使と都の建設（704年福朝の粟田真人の収容 佐川正敏） 29 新羅の場合（山城に囲まれた慶州 黑崎 直） 30 藤原京焼死説（「扶桑略記」が伝える焼死の痕跡は未検出 黒崎 直） 31 二つの薬師寺（平城京への移建はなかった 花谷 浩） 32 水田耕地と化した都（地中に没した都市計画地圖 上原真人）。

## ◆第II部 平城京

1 京城の復原（地表に遺存する都市計画地圖 司田 章） 2 「平城」の呼び名（「ナラ」の意味と「平城」の発音 山下信一郎） 3 古道と都のマイントリスト（路幅67.5m、東西両側溝幅約7.0m、下道を3倍に拡大 小澤 裕） 4 造営に用いた尺度（大尺・1尺=35.5cmと小尺29.6cmの使用 井上和人） 5 宮城十二門をめぐって（東院南門の検出で門号確定か 長尾 実） 6 儀式と執務の場=朝堂院（首都の朝堂院 十二堂 金子裕之） 7 「移軒」か「併存」か（内裏は固定、大極殿は移転、朝堂は併存 君永省三） 8 大嘗宮の発見（大嘗会の回数は三度か五度か 山崎 信二） 9 内裏・菅司・東院（天皇と役人の執務の場の変化と皇太子の居處 金子裕之） 10 建築資材のリサイクル（柱・レンガ・瓦の再利用 島田敏明） 11 瓦からみた中央と地方（国分寺に平城宮式の軒瓦使用 佐川正敏） 12 瓦の発注と納品（3ヶ月以内に30,000枚の瓦納入 佐川正敏） 13 「増瑞瓦」と「玉宮」（施釉の瓦とレンガが東院から約300点 毛利光後選） 14 技巧に満ちた庭園（日本庭園の発展点を東院にみる 小野健吉） 15 貢使と庶民の住宅（身分の差で宅地は60,000m<sup>2</sup>から500m<sup>2</sup>まで 小林謙一） 16 長屋王郡の入りと（妻子・親族・役人・技術者が同居 錦野和己） 17 二つの家政機関（長屋王とその父高市皇子の組織か 山下信一郎） 18 鼠を進上する木簡（鼠は獣狩の獵の獵森 公章） 19

板に描かれた樓閣山水図（中国の山閣部の離宮か山莊 浅川謙男） 20 市のありさま（東西両市の盛衰 川越俊一） 21 土器が教える人びとの生活（地方から漆・塗・塵の出し汁を運ぶ玉田芳英） 22 賢金工場跡が都の中の手工業（鉄物・銀治工場は宮にも京にも存在 秩山洋） 23 宮のなかで倒れた職人たち（1日500基製作の百万塔の仕上げ具合 森本 晃） 24 出土品からみた国際交流（大安寺出土の陀螺は唐から渡来 千田剛嗣） 25 なぜ錢貨を埋めるのか（子供の成長、建物の安泰を願う土地神への供え物 金子裕之） 26 署をめぐる話（701年に支干から年号へ 古尾谷知浩） 27 税収方法を解説する（郡単位で徵税品をとりまとめ、郡と国を経て都へ 寺崎保臣） 28 役人たちの勤務評定（木簡で判る下級役員の昇級 錦野和己） 29 封書のはじまり（木簡に見る二通りの封 渡邊宏光） 30 平城京の街路風景（街路樹は柳・橘・エンジュ、側溝は下水道 小野健吉）。

字数の関係で、要点のまとめ方が意恋的、かつ的外れになつたかと懸念するが、お許しいただきたい。各テーマ名から察しよるとおり、叙述は平易であるが、内容を的確に理解するには、相当の予備知識を要するようと思われる。そうした意味から、できれば平城京柔佛の全体図。

天皇家・藤原氏・長屋王家の家系図などが該当箇所の余白にあり、天武朝末年～8世紀に亘る略年表と、各項目に関わる参考資料（概報・報告書の類）などを巻末に付載してあればよかったですと考える。また、些細なことは、平城京の5つで「『日本紀』にみえる目的について言及がないこと、同じく22で、賢金工場跡が立つことが気になかったこと、後に著者はその説明は難しいものの、立地からして官営もしくは公認の工房であつた可能性もあるろう。

以上、内容の要点、そして若干のコメントを述べてきたが、本書が藤原京と平城京の今日的課題とその解説の提示において、高い水準を保ちながら、啓蒙書としての使命を十分に果たしていることは論をまたない。編者ならびに執筆者各位の労を多とするものである。

1952年の創立、そして1959年に平城宮跡、1970年に藤原宮跡、それぞれの本格的発掘調査の開始があり、それ以降、着実に躍進な成果をあげてきた奈良国立文化財研究所が、2002年には創立50周年を迎えることとなる。発掘・研究調査以外にも、国際交流・展示会・史跡整備・研修指導など多岐に分かれています。業績は今後ますます多忙になるとと思われるが、所員各位のますますのご活躍と研究所のさらなる発展を期待して筆をおくこととする。

（甲子園短期大学）



# 奈良国立 文化財研究所 要 縱

## I 組織規定

### 文部省組合令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

#### 第2章 文化庁

##### 第3節 施設等機関

###### （施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののはか、文化庁に次の施設等機関を置く。  
(中略)

###### 国立文化財研究所

###### （国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は文部省令で定める。

### 文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

#### 第5章 文化庁の施設等機関

##### 第4節 国立文化財研究所

###### 第1款 名称及び位置

###### （名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

##### 第2款 奈良国立文化財研究所

###### （所長）

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

###### （内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

###### （庶務部の分課及び事務）

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

###### 一 庶務課

###### 二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の受取及び公印の保管その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。

一 予算に関する事務を処理すること。

二 経理及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 庁内の取締りに関する事務。

第126条 削除

###### （建造物研究室等の事務）

第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

###### （平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に關し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

###### （飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に考古第一調査室、考古第二

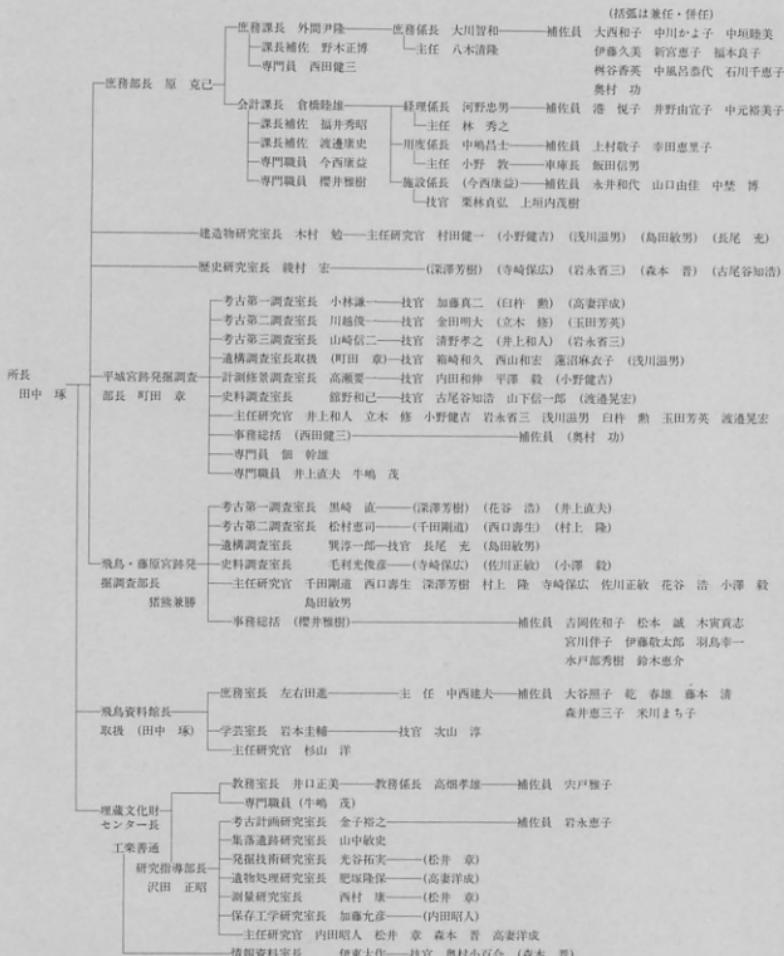
- 調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に關し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるとところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれららの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれららに關する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- (飛鳥資料館)
- 第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、国民の理解を深めるため、この地域に關する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれららに關する調査研究及び事業を行う。
- (飛鳥資料館の館長)
- 第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。
- 2 館長は、館務を掌理する。
- (飛鳥資料館の二室及び事務)
- 第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。
- 2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に關する事務を処理する。
- 3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。
- 一 飛鳥地域に關する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。
- 二 飛鳥地域に關する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。
- 三 飛鳥資料館の事業に關する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。
- (埋蔵文化財センター)
- 第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。
- 一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
- 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共團体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に對して、専門的、技術的に研修を行うこと。
- 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共團体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。
- 四 埋蔵文化財に關する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共團体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。
- (埋蔵文化財センターの長)
- 第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。
- 2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。
- (埋蔵文化財センターの内部組織)
- 第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。
- (教務室の事務)
- 第136条 教務室においては、研修の実施に關する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に關する事務をつかさどる。
- (研究指導部の六室及び事務)
- 第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。
- 2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に屬するものを除く。）をつかさどる。
- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に屬するものを除く。）をつかさどる。
- 4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- (情報資料室の事務)
- 第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。
- (客員研究員)
- 第139条 奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。
- 2 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に參画する。
- 3 客員研究員は、非常勤とする。
- 改正
- 昭和43年6月15日 文部省令第20号／昭和45年4月17日 文部省令第11号／昭和48年4月12日 文部省令第6号／昭和49年4月11日 文部省令第10号／昭和50年4月2日 文部省令第13号／昭和51年5月10日 文部省令第16号／昭和52年4月18日 文部省令第10号／昭和53年4月5日 文部省令第19号／昭和53年9月9日 文部省令第33号／昭和55年4月5日 文部省令第14号／昭和55年6月25日 文部省令第23号／昭和58年10月1日 文部省令第25号／昭和59年6月30日 文部省令第37号／昭和63年4月8日 文部省令第12号

## II 職 員

### 定 員

区分	指定職	行政職(一)	行政職(二)	研究職	計
1996年度	1	22	1	61	85
1997年度	1	22	1	61	85

現在の職員一覧 (1997. 7. 1 現在)



### III 施設 (1997.3.31現在)

#### 土地

奈良国立文化財研究所所管	47,890m <sup>2</sup>
本庁舎	8,860m <sup>2</sup>
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515m <sup>2</sup>
飛鳥資料館	17,092m <sup>2</sup>
都山宿舎(2)	80m <sup>2</sup>
飛鳥資料館宿舎	1,343m <sup>2</sup>
文化庁所管(関係分)	1,451,058m <sup>2</sup>
平城宮跡地区	1,085,675m <sup>2</sup>
藤原宮跡地区	360,342m <sup>2</sup>
飛鳥稻瀬宮殿跡地区	5,041m <sup>2</sup>

#### 建物

本庁舎	35,584m <sup>2</sup>
-----	----------------------

区分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥 資料館	藤原 宮跡	計
事務室	646	176	197	108	1,127	
研究・整理室	1,417	2,465	1,205	125	5,212	
資料・図書室	1,021		383	131	1,535	
会議室	338		129	49	516	
講堂		538	210	132	880	
展示室		864	254	1,361	2,479	
写真室		411	149	78	638	
復原建物			834		834	
造構展示室		1,563			1,563	
車庫	84	608	352	94	1,138	
食庫・収蔵庫	133	7,409	2,979	696	11,217	
研修棟	1,416				1,416	
その他	1,666	2,052	1,669	1,606	36	7,029
計	6,721	16,920	7,527	4,380	36	35,584

宿舎等	重要文化財旧米谷家住宅	213m <sup>2</sup>
	飛鳥資料館宿舎	225m <sup>2</sup>

### IV これまでの刊行物 (括弧内は刊行年度)

#### 奈良国立文化財研究所学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)  
 第2冊 修学院離宮の復原的研究 (1954)  
 第3冊 文化史論叢 (1955)  
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1956)  
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1957)  
 第6冊 中世庭園文化史 (1958)  
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1958)  
 第8冊 文化史論叢 I (1959)  
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1959)  
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1960)
- 第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究— (1961)  
 第12冊 巧匠阿弥陀仏快慶 (1962)  
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)  
 第14冊 唐招提寺藏「レース」と「金龜舍利塔」に関する研究 (1962)  
 第15冊 平城宮発掘調査報告II 官衙地域の調査 (1962)  
 第16冊 平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査 (1963)  
 第17冊 平城宮発掘調査報告IV 官衙地域の調査 (1965)  
 第18冊 小堀遠州の作事 (1965)  
 第19冊 藤原氏の氏寺とその院家 (1967)  
 第20冊 名物製の成立 (1969)  
 第21冊 研究論集I (1971)  
 第22冊 研究論集II (1973)  
 第23冊 平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査 (1974)  
 第24冊 高山一町並調査報告— (1974)  
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)  
 第26冊 平城宮発掘調査報告VII (1975)  
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I (1975)  
 第28冊 研究論集III (1975)  
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1975)  
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1976)  
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告II (1977)  
 第32冊 研究論集IV (1977)  
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1977)  
 第34冊 平城宮発掘調査報告IX (1977)  
 第35冊 研究論集V (1978)  
 第36冊 平城宮整備調査報告I (1978)  
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告III (1979)  
 第38冊 研究論集VI (1979)  
 第39冊 平城宮発掘調査報告X (1980)  
 第40冊 平城宮発掘調査報告XI (1981)  
 第41冊 研究論集VII (1984)  
 第42冊 平城宮発掘調査報告XII (1984)  
 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展 (1984)  
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1985)  
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1986)  
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1988)  
 第47冊 研究論集VIII (1988)  
 第48冊 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立— (1990)  
 第49冊 研究論集IX (1990)  
 第50冊 平城宮跡発掘調査報告XIII (1990)  
 第51冊 平城宮跡発掘調査報告XIV (1992)  
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1992)  
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究 (1993)

- 第54冊 平城京在京二条二坊・三条二坊一長屋王邸・藤原麻呂邸一発掘調査報告 (1994)
- 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV一飛鳥水落遺跡の調査一 (1994)
- 第42冊 平城宮木簡5 図版・解説 (1995)
- 第43冊 山内清男考古資料7 (1995)
- 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻 (1995)

#### 奈良国立文化財研究所史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1954)
- 第2冊 西大寺觀音堂釋迦堂金銅佛像 (1955)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編1 (1963)
- 第4冊 俊乗坊重源史料集成 (1964)
- 第5冊 平城宮木簡1 図版 (1966)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編2 (1967)
- 第5冊 平城宮木簡1 解説 (別冊) (1969)
- 第7冊 唐招提寺史料1 (1970)
- 第8冊 平城宮木簡2 図版・解説 (1974)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I (1974)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II (1975)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III (1976)
- 第12冊 藤原宮木簡1 図版・解説 (1977)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV (1977)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録V (1978)
- 第15冊 東大寺文書目録第1巻 (1978)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡3 図版・解説 (1979)
- 第18冊 藤原宮木簡2 図版・解説 (1979)
- 第19冊 東大寺文書目録第2巻 (1979)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第3巻 (1980)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1981)
- 第23冊 東大寺文書目録第4巻 (1981)
- 第24冊 東大寺文書目録第5巻 (1982)
- 第25冊 平城宮出土墨書き土器集成I (1982)
- 第26冊 東大寺文書目録第6巻 (1983)
- 第27冊 木器集成図録一近畿古代篇一 (1984)
- 第28冊 平城宮木簡4 図版・解説 (1985)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻 (1985)
- 第30冊 山内清男考古資料1 (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書き土器集成II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料3 (1991)
- 第34冊 山内清男考古資料4 (1991)
- 第35冊 山内清男考古資料5 (1991)
- 第36冊 木器集成図録一近畿原始篇一 (1992)
- 第37冊 梵鐘実測図集成(上) (1992)
- 第38冊 梵鐘実測図集成(下) (1993)
- 第39冊 山内清男考古資料6 (1993)
- 第40冊 山田寺出土建築部材集成 (1994)
- 第41冊 平城京木簡1 図版・解説 (1994)

#### 奈良国立文化財研究所基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説 (1973)
- 第2冊 瓦編2 解説 (1974)
- 第3冊 瓦編3 (1975)
- 第4冊 瓦編4 (1976)
- 第5冊 瓦編5 (1976)
- 第6冊 瓦編6 (1978)
- 第7冊 瓦編7 (1979)
- 第8冊 瓦編8 (1980)
- 第9冊 瓦編9 (1983)

#### 飛鳥資料館図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
- 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇 (1976)
- 第3冊 日本古代の墓誌 (1977)
- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇 (1978)
- 第5冊 古代の誕生仏 (1978)
- 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺— (1979)
- 第7冊 日本古代の鶴尾 (1980)
- 第8冊 山田寺展 (1981)
- 第9冊 高松塚拾年 (1982)
- 第10冊 渡米人の寺—槙原寺と坂田寺— (1983)
- 第11冊 飛鳥の水時計 (1983)
- 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで— (1983)
- 第13冊 藤原宮一半世紀にわたる調査と研究— (1984)
- 第14冊 日本と韓国の塑像 (1985)
- 第15冊 飛鳥寺 (1985)
- 第16冊 飛鳥の石造物 (1986)
- 第17冊 萬葉乃衣食住 (1987)
- 第18冊 壬申の乱 (1987)
- 第19冊 古墳を科学する (1988)
- 第20冊 聖徳太子の世界 (1988)
- 第21冊 仏舍利埋納 (1989)
- 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 (1989)
- 第23冊 日本書紀を掘る (1990)
- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察 (1991)
- 第25冊 飛鳥の源流 (1991)
- 第26冊 飛鳥の工房 (1992)
- 第27冊 古代の形 (1994)
- 第28冊 蘇我三代 (1995)

## V 1996年度の動向

予 算	(千円)
人件費	730,375
運営費	1,200,319
事業管理	11,146
一般研究	63,900
特別研究	286,280
発掘調査	563,301
宮跡整備管理	73,736
飛鳥資料館運営	52,252
埋蔵文化財センター運営	73,257
本庁舎維持管理等経費	52,970
飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営	23,477
施設費	1,562,028
平城宮跡等整備費	1,550,130
各所修繕費	11,898
合 計	3,492,722

主要工事	(千円)
(1)平城宮跡地等整備費	
朱雀門復原平成8年度工事	660,400
東院庭園復原工事	516,600
東院正殿復原平成8年度工事	14,111
宮内省築地等復原平成8年度工事	60,461
通信線改修等工事	22,660

(2)施設整備費	
*藤原宮収蔵庫新築工事	361,365
*平城京収蔵庫屋根改修工事	71,070
(3)その他(各所修繕費、国有文化財保存整備費)	
特別史跡山田寺跡整備平成8年度工事	60,358
本庁舎漏水防止等工事	7,725

\*印は建設省支出委任工事

### 協力事業等

文化庁では、1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収業務を担当している。

1996年度の状況は下記のとおりである。

区分	面 積(m <sup>2</sup> )	金 額(円)
1996年度	5,297.98	295,188,931
国有地合計	360,557.99	8,519,564,740

### 人事異動 (1996.4.1~1997.3.31)

4月1日

飛鳥資料館庶務室長に昇任	左右田 道
庶務部庶務課長補佐に昇任	野木 正博
庶務部庶務課庶務係長に昇任	大川 智和
庶務部会計課専門職員に昇任	今西 康益
庶務部会計課用度係用度主任に昇任	小野 敦
庶務部会計課長に転任	倉橋 瞳雄
平城宮跡発掘調査部主任研究官に転任	井上 和人
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長に配置換	川越 俊一
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室長に配置換	毛利光俊彦
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	小澤 毅
文部技官(平城宮跡発掘調査部考古第二調査室)に採用	金田 明大
文部技官(平城宮跡発掘調査部考古第三調査室)に採用	清野 孝之
文部技官(平城宮跡発掘調査部造構調査室)に採用	西山 和宏
事務補佐員(庶務部庶務課)に採用	伊藤 久美
研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用	戸部秀樹
国立極地研究所事業部事業課長に転任	萩原 寿都
大阪教育大学学生部入学主幹に転任	家村 善男
京都大学学生課長補佐に転任	田中日出男
大阪大学総務部人事課専門職員に転任	金野 忠司
大阪大学医学部附属病院管理課施設掛長に転任	笠松 保
京都大学超高层電波研究センター事務掛主任に転任	森 昭彦

7月1日

平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	白井 熊
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	藤田 盟児

8月31日

辞職	藤田 盟児
----	-------

10月1日

飛鳥藤原宮跡発掘調査部造構調査室に配置換	長尾 充
----------------------	------

12月1日

庶務部会計課理係長に昇任	河野 忠男
京都大学胸部疾患研究所業務課収入掛長に転任	市原 伸三

12月26日

辞職	森本はぎ子
----	-------

1月1日

事務補佐員(庶務部会計課)に採用	中元裕美子
------------------	-------

3月31日

退職	荒木 浩司
----	-------

### 刊行物

学報 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告

- 史料 第45冊 北浦定政関係資料  
 第46冊 山内清男考古資料 8  
 飛鳥資料館図録 第29冊 齊明紀  
 報告書等 1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報  
 飛鳥・藤原宮発掘調査概報26  
 平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧  
 平城宮発掘調査出土木簡概報32  
 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報12  
 飛鳥資料館カタログ第11冊 山田寺  
 埋蔵文化財ニュース82  
 埋蔵文化財ニュース83  
 埋蔵文化財ニュース84  
 アンコール文化遺産保護共同研究報告書 I

#### 平城宮跡資料館・遺構展示館見学者

区分	平城宮跡資料館	遺構展示館	計
1996年度	61,506	64,645	126,151
累計	1,479,442	1,825,626	3,305,068

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

#### 図書・写真資料

図書：165,668冊 (1997.3.31現在)

区分	種別	購入	寄贈	計
1996年度	和漢書	1,465	5,565	7,030
	洋書	69	37	106
累計	和漢書	58,235	99,471	157,706
	洋書	6,013	1,949	7,962

写真：601,463 (1996年度末)



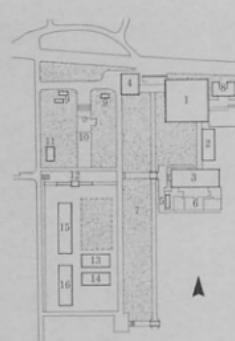
本館配置図

- 1 本館  
 1 階 治務部及び図書資料室  
 2 階 所長室及び平城宮跡発掘調査部  
 3 階 建造物研究室、歴史研究室及び埋蔵文化財センター  
 4 機械棟  
 5 車庫  
 6 自転車置場  
 7 正門  
 8 通用門  
 9 非常口



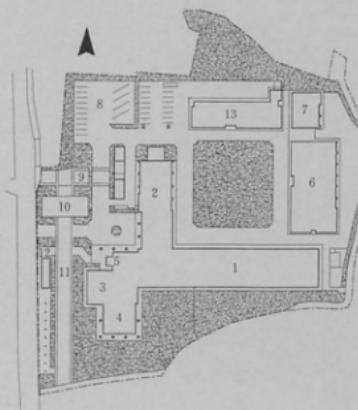
平城宮跡資料館配置図

- 1 平城宮跡資料館  
 (1) 展示室 (3) 準備室  
 (2) 講堂 (4) 写場  
 2 第1収蔵庫  
 3 第2収蔵庫  
 4 第3収蔵庫  
 5 第4収蔵庫  
 6 第5収蔵庫  
 7 大型遺物処理棟  
 8 遺物解析処理棟  
 9 便所  
 10 整備棟  
 11 資材保管加工棟  
 12 収蔵庫  
 13 佐伯門跡



平城宮跡構造展示館配置図

- 1 造構展示館 2 展示館  
 3 造構展示館 4 管理棟  
 5 施地復原 6 埴積基壇復原  
 7 東大溝復原 8 便所  
 9 バーゴラ 10 室内広場  
 11 防災設備室  
 12 宮内省北門・施地復原  
 13 宮内省復原建物(南殿)  
 14 宮内省復原建物(南殿第2殿)  
 15 宮内省復原建物(西北殿)  
 16 宮内省復原建物(西南殿)



飛鳥藤原宮跡発掘調査部配置図

- 1 整備研究棟  
 2 管理棟  
 3 展示室  
 4 講堂  
 5 入口  
 6 第1収蔵庫  
 7 遺物処理棟  
 8 駐車場  
 9 六条糸間路跡  
 10 建物跡  
 11 東三坊井間路跡  
 12 自転車置場  
 13 第2収蔵庫(新設)



飛鳥資料館配置図

- 1 第1展示室 2 第2展示室 3 講堂  
 4 ロビー 5 聞観室・売店 6 管理室  
 7 便所 8 光庭 9 管理棟  
 10 正門 11 売札所 12 星外展示解説室  
 13 バーゴラ 14 機械室 15 通用門  
 16 須勢山石 17 酒船石 18 石人像  
 19 山田寺塔心礎 20 瓢石 21 人頭石  
 22 法輪寺塔心礎



奈良国立文化財研究所  
〒630 奈良市二条町2丁目9-1  
Nara National Cultural Properties Research Institute  
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630, JAPAN